
ちいさなカケラ

夏詠水面

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちいさなカケラ

【Nコード】

N5742U

【作者名】

夏詠水面

【あらすじ】

疫病から村を救うため、イングリットは高名な「森の魔女」の元を訪れる。しかし、魔女に関するうわさは、とんでもないものばかり。

曰く、サンバを踊りながら薬を調合する。

曰く、ゴスロリ趣味。

曰く、興奮すると刻の声を上げる。

……イングリットは、無事、村を救えるのだろうか？

何年か前に書いた作品を、羞恥心にもだえつつ投稿します。どうか、生暖かい目で見守ってください。基本、一日一回、22時の更新です。

なお、本作には若干一名変態が登場します。注意してください。

プロローグ

プロローグ。

雨がしとしと降っていた。

イングリットの体は、その雨に体力を奪われ、もはや動く気力すらもわかない。

それがどういふことなのか、イングリットは理解している。

（死んだら、そのあとどうなるんだろう）

もう薄れかかった意識の中で、イングリットは思う。もちろん、死後の世界とか、そういう死んだあとの魂の行き先のことではない。そんな非現実的なものがこの世に存在しないことぐらいは田舎の村の子供でも知っている。

ただ、肉体。

この身体は、死んだあとも放置されるのだろうか。誰にも目を向けられないままここで腐るか、あるいは獣たちの餌になるのだろうか？

そんなのは嫌だ。

あたしはイングリットだ。人間だ。誇り高き父と慈悲深い母との間に生まれた人間だ。たとえ死して人里はなれた大地にその屍が打ち捨てられようと、誰がこの身を汚すことを許されようか！

あと少し。もう少し頑張れるはずだ。

こんな森の中で死ぬるはずがない。

父の誇りにかけて、救わなければいけない人たちがいる。

母の愛にかけて、守らなければいけない約束がある。

じり。と、イングリットの手が地面の泥をつかんだ。その手は硬く、硬く握り締められ、寒さで細かく震えながらも強い意志がこも

っているようだった。

じり。

もう動かないと思っていた足に力が入る。

じり。

光を失っていた瞳に命の炎が宿る。

じり。

体が再び自由を取り戻す。

（やり遂げてやる）

心の中で呟いて、イングリットは一気に起き上がった。

気がつくと雨も小降りになっている。

いける。

いまなら、まだ頑張れる。

．．．．．けど。

「．．．．．とりあえず、一眠りしてからにしよう」

イングリットはそう一人ごちてごろんと横になった。

開幕。少女、イングリット

「・・・・・・・・くちゅん」

なんとも情けないくしゃみであたしは目を覚ました。

そしてすぐ、目と鼻の先に黒い見たこともない生き物がいるのに気がついた。

その生き物はすんすんとあたしのおいをかいでいる。一見小さくて愛らしいようにも見えるが、おなかをぎゅるると鳴らしながら涎をたらしているところを見ると、明らかにあたしを食料として認識しているようだ。

雨はやんでいるようだったが、服が濡れているせいで寒い。周囲の明るさから見るに時刻は一回りして昼なのだろうが木々が光をさえるために太陽がどの辺りにあるのかおおよその目星しかつかない。身体は動かない。

恐らく寝たせいで気が緩んだのだろう。寝る前に感じた燃え滾る炎のような気力は微塵も感じられず、捕食されようとしているこの瞬間ですらも倦怠感が身を包んでいる。

てか、のんきに状況観察している場合じゃない！

誰か、誰でもいいから助けて！？

・・・・・・・・あ、でもやっぱり助けてくれるなら白馬に乗った美形の王子様のほうがいいな。

それで「姫、御無事でしたか？」なんて訊きながら手の甲にキスしてくれるの。

なんてバッチグーなアイデアなのかしら。

じゃあこういういなおすべきね。

「美形でやさしい白馬に乗った王子様なら誰でもいいから来てー」

「……あ、まだ叫ぶだけの体力はあつたんだ。
あ。」

黒い動物が、あたしの悲鳴に驚いて口を空けた状態で固まった。
そこで、待ちに待った助けの声が聞こえた。

「アサさんダメよ。それは食べ物じゃないんだから」

残念ながら女性の声らしい。
「……しょんぼり。」

あたしは助けが現れたことに安堵しながらも心のどこかで落胆した。

「そんなものを食べたらおなかを壊すわ」

そんなもの呼ばわり。

もうちょっと、なんか、まともな言い方はないのだろうか。

助けられておいて言うのもなんだが、そんなものといわれて気持ちいいはずがない。

「味見も駄目」

それでもそろそろ舌を伸ばそうとしていたアサという黒い生き物にその声はぴしゃりといった。

あわてて舌を引っ込めつつも恨めしそうな顔であたしを見下ろすアサ。

そのつばらな瞳が何よりも明確にアサの心境を語っていた。

（あたちのごはん……）

という声が今にも聞こえてきそうだ。

声の方向に少しだけ体を動かすと、サンダルを履いた白い足が目

入った。雨で地面はぬかるんでどろどろになっているはずなのにその足はなぜか少しの泥もついていないまっさらなものだった。

「えっと、確か初対面の人には自己紹介をするのよね」

その声は言う。

うん、まあ、確かに初対面の相手には自己紹介をするのが普通だが瀕死とも言える状態の人間を前に自己紹介をするような空気が読めない非常識な人はいないんじゃないかな。

「私の名前はハルよ」

……いないんじゃないかな！

「趣味は日光浴。職業は魔女だけれど、副業として薬師もやっているわ。時々非常識だって言われたりするけれど、私的には非常に常識的な人間のつもりよ」

ちやつかり自己紹介しやがった。

こやつ、本当に今の状況を理解していない。
空気読めっつーの。

「ところであなた、一体こんな森の中で何をしているの？」

死にかかっています。

「それと、これは善意からいうけれど、そのゴキブリが肥やしの中を走り回ったあとみたいな身なりは見ていて見苦しいわ。そんな格好で魔女の館の前に居座らないで頂戴」

「喧嘩売ってんのあんた！」

思わずがばりと起き上がって怒鳴りつける。

って、え？

魔女の館？

あたしは女性の背後にある門を見る。

大陸じゅうに名前をとどろかせる魔女の住む館が、目と鼻の先にあった。

「イタカの村から？」

熱い風呂から上がったあたしにそつと薬湯を差し出した、ハルという名の女性、もとい少女は驚いたようにいった。

噂に聞いていた森の魔女というのはもつと年寄りだったはずだが、あれは尾ひれがついたものだったようだ。今日の前にいる少女は、どんなに年上に見積もってもまだ二十歳になるかならないかという年齢で、簡素だが清潔そうな白い服を着たどこにでもいそうな普通の人間だった。

「イタカの村って、確か大人でもここから歩いて五日はかかる場所よね。王都に近くて、そもそもが王都に新鮮な穀物を運ぶために作られた農村都市じゃなかったかしら。いくらこの薬が国内随一とはいえ、どうしてあなたみたいな小さな女の子が来るの？もつとちやんとした大人のひとかはいなかったの？」

魔女の疑問は至極もつとも。

けど、魔女は王室の偉い人達とも強いつながりがある。何が起きたのかを知っての質問だろう。

黙り込んでうつむいたあたしに、魔女はほんわかした笑みで「ごめんなさい」といった。

「この質問は、あなたを傷つけるだけね。私、妹からよく言われるんだけど、他人の心の機敏を察したり場の空気を読んだりするのが苦手なのよ。許して頂戴」

魔女はそういつてあたしの向かいの席に座る。

つて、え？

妹！？

「魔女に妹がいるの！」

あたしはやや身を乗り出しつつ聞いた。

魔女に妹がいるなんて初耳だ。そりゃ勿論魔女だって人間だし、家族を持つていたっておかしくないが、噂に聞く魔女というのは、もっと気難しくて、人間嫌いで、一人ぼっちのはずだ。いくら尾ひれがついた噂とはいえ、妹と一緒に「くすりやさん」を営んでいるような家庭的な印象はカケラも受けない。

魔女と呼ばれ、敬遠されがちな存在に、妹がいるとは……！！
目を真ん丸くしたあたしに、魔女はくすりと笑って、冷めないうちに薬湯を飲むように促した。

「自分では気がつかないかもしれないけれど、あなたは相当体力を消耗しているのよ。今は全然疲れた感じがしないかもしれないけれど、それは精神的安堵感から来る一時的なもので、いつ高熱を出して倒れてもおかしくないわ。その薬湯は即席のものだから栄養回復ぐらいにしかならないけれど、ちゃんと休んで体に無理をさせなければ二日ぐらいで体調は万全になるはずよ」

あたしは魔女に言われるままに薬湯を口に含んだ。
確かに、甘い。

それも、街の薬屋が子供用の薬として提供している砂糖の混ぜられたものではなく、もっと自然な甘さ。
率直に表現すれば、そう、ミルクのよう。

「そう。それはシシマヤミの樹液 通称、樹の母乳が入っているわ」

魔女が教えてくれる。

シシマヤミの樹は、とても栄養価が高く森にすむ動物たちが冬越しの食料とすることもあるらしい。中でも樹の幹に傷をつけて採集する樹液は甘く、白濁色をしていることから樹の母乳といわれ風邪を引いたときなどに重宝する。生殖数こそあまり多くはないが、ライヒビ王国の中ならどこにでも生殖していたりする。

「おいしいよ、これ!？」

一気に飲み干したあたしの顔は、大げさではなくきらきら輝いていた。

それを受けて、魔女が声を上げて笑う。

「ふふふふつ。それは重畳。気に入ったならあとで作り方を教えてあげるわ。そんなに難しくないし、すぐに覚えられるはずよ」

「本当!？ 魔女の秘薬とかじゃないの？」

あたしが驚いて言うと、何がおかしいのか魔女はぶつと吹き出す。
あまりにも唐突だったので一瞬茫然としてしまったが、それから少しむっとした。

「ちょっと、なにがおかしいのよ？わたし別に変なこと言ってないでしょう！？」

「いや、だってあなたの反応って、大げさというかオーバーアクションというか、すごく真っ直ぐで、それに」

そこで魔女はいったん言葉を切り、すっと目を細める。
思わずたじろいだ。

魔女の姿が一瞬、どこもなく慈愛を帯びたものに見えた。

「それに、思っていたより元気そうだったから、よかったなっと思って。だって最初に逢ったときのあなたは本当に死にそうに見えたんだもの。いくら私の薬でも、助けられる自信はなかったわ」

この館であなたが死ぬということも、覚悟していたわ。と、魔女が続ける。

いつ死ぬかもしれない人間を、自分の家に招き入れられる人間が一体どれだけいるだろうか。

ひょっとしたら自分の家から死体が出るかもしれないというのに、わざわざ救いの手を差し伸べられる人間が一体どれだけいるだろうか。

町や村で噂される森の魔女は、噂とは違い世相離れた老婆ではなかったが、噂どおりの優しさをそなえた人だった。

お礼を言わなければ、と思った。優しさを与えてくれた、この清らかな魔女に、お礼を言わなければいけない。けれど、なんといえればいいのかわからなかった。学のないあたしには、美辞麗句を並べて相手をおだてることも、心に響くような大層な台詞をはくことも出来ない。

「助けてくれて、ありがとうございます」

結局、口から出たのはそんな有り体な言葉。

あたしには、この深い感謝の気持ちをどういう言葉に置き換えていいのかわからなかった。

けれど、ちゃんと想いは伝わった。魔女ははにかむように笑うと誠意を持ってあたしの言葉を受け取った。

思えば、先程から魔女は笑ってばかりだ。その表情はころころと千変万化に変わっているが、まるで幸せ以外知らないかのようにいつも笑っている。その笑顔を見ているとんだか心が解され、あたしもつられて口元が緩む。

と、そのとき玄関が開いた。思わず振り向くよりも早く、「ただいまーっ」という元気のいい声が聞こえた。

「あ、漸く帰ってきたわね。紹介するわ、あれが私の妹のロッキンツォン。歳は先月漸く十歳になったところだけどあなたと同じくらいかしら？」

パタパタと軽い足音が響いて、それからロッキンツォンという少女の姿が現れた。

「あ」と、ロッキンツォンがあたしを見つけて一瞬目を丸くし、それからぺこりと頭を下げる。

「はじめまして。サチ・アデライト・ジェディラル・マダリテリテールディング・メズアマティティルト・ロッキンツォンと申します」

いや、それ名前なの！？ていうか、そんなの一度聞いたぐらいで覚えられないよ！

「・・・・・・・・えつと、ただ単に、ロッキンツォンって呼ぶけど、いい？」

やや引き気味に尋ねたあたしに、なぜかまた魔女が笑い出す。
本当に、よく笑う人だ。

「『ロッキンツォンさん』って呼んでください。あなたを助けたのは確かに私の姉ですけど、実際にあなたを見つけたのは私なんですから」

なんと！

じゃあ命の恩人ということになるのか！？

あたしは姿勢を改めてもう一度深々と礼を言った。そこでロッキンツォンの持つている籠に気がつく。

「ろ、ロッキンツォンさん、その籠の中身って・・・・・・・・」

「え？あ、はい、これですね」

ロッキンツォンが籠を持ち上げ覆っている布をどける。

「あなたの体調をよくするための薬草ですよ。これを飲んで、元気になっていただけたらと思います」

なんていい人・・・・・・・・！！

あたしの中のパラメーターが一気に振り切られ、嬉しさのあまり涙まで出てきた。なりふり構わずロッキンツォンさんを抱きしめたら奇妙にくぐもった声を上げられた。顔を上げると目を丸くしたロッキンツォンさんがいた。こちらを見つめ返している彼女はすぐにつこりと笑うと、あたしの頭にポンと手を載せる。

なんだか、ロッキンツォンさんからとても懐かしいにおいがした。ぎゅっとロッキンツォンさんにしがみつく手の力を強めてすんすんとおいをかぐと、ロッキンツォンさんは困ったように苦笑する。

「なんだか妹が出来たみたいですね」

ロッキンツォンさんはそういつて、離れようとしないあたしを見下ろす。

昔から、きょうだいが欲しかった。孤児だったあたしは親切な村の人たちのおかげで今日まで飢えることも凍えることもなく幸せに暮らしてきたけれど、血のつながった家族というものに思いをはせた。どんなに求めても作り上げる事のできない、生まれついてしか与えられる事の無い親愛の絆というものが欲しかった。

だから、思わず甘えてしまう。甘えられるときに甘えておかないと、本当に人肌が恋しくなったときに寄りかかる相手がいなくなってしまうような気がして。

「姉さん、これ、頼まれてた薬草」

ロッキンツォンさんがあたしを貼り付けたままえっちらおっちらと魔女のほうに移動して、魔女に籠を手渡す。魔女に話しかけるときのロッキンツォンさんの口調はあたしに向けるときの丁寧なものとは違い、いささか砕けたものだ。

「それも何かの薬になるの？」

とあたしが尋ねると、魔女は水道の水で薬草を洗いながら肯定する。というより、水道があることにあたしは驚いた。普通水道というのはお金持ちの家だけに配備されているもので、豊かさの象徴だ。それもそのはず、川から一個の家庭に水を引くだけで街のあちこちを

改造しなければいけなくなるのだから莫大な資金が必要になる。
驚いたあたしの視線に気がついたのか、魔女が地面を指差す。

「この下に地下水脈があるのよ。ただ単にそこから水を引いただけ。
全部先代の魔女が自分の手でやったことだから、お金はかかっていないわ」

「そ、それこそすごいじゃない……!?!」

どうして地下水脈の場所がわかるのだろうか？

地面の下に水脈があるかどうかなんて普通の人にはわかりっこない。
相当地面を掘り下げないと見つけることが出来ない地下水脈なんて、
何十年かに一度偶然で発見されるような代物だ。

けれど、ライヒビに住む人間はそれに対する答を持ち合わせている。
魔女だから。

人と自然との間に立つ、調停者にして交渉人。ネコシエータ

神の存在が否定され宗教が忘れ去られた、この歪で平和な世界において唯一、人ならざる奇跡を起こせる存在。

魔女の役割というのは、本来は薬師ではない。

ライヒビ全体を占める、森という雄大で漠然とした意志に対し、人間が恩恵を授かるためにいる者。

他の国の人間に説明しても、きつとわかってもらえないだろう。でも、あたしたち森国ライヒビに住む人間にとつては、森というのはなくてはならない絶対のものなんだ。森には意志が存在するなどという、他国の懐疑主義者はそろいもそろって異議を唱えるだろうけど、じっさいに森に暮らしてみればわかる。木や狐や、栗鼠といった小さな生命ではなく、もっと大きな何かが森を支配していることに。そして人間はその恩恵を受けているから生きていけることに。

魔女は、その何かと人間の間に立つものだ。何かをかつて信仰の対

象であつたとされる神と例えるならば魔女は巫女。神に愛された寵児。

そもそもが、人間に生まれながら人間とは違う存在なんだ。やがて、魔女はあたしの前に小さなコップを差し出した。その中にはさっきの薬草を使って作った緑色のどろつとした液体が入っている。

「今度のやつは、結構不味いわよ。まず最初に苦味が来て、それから喉の奥から吐き気がするわ。最後にヘドロのような生臭いにおいがすることもあるけど、それはあなたの体質しだいね」

「……なんとも不味そうな説明をありがとう。おかげで飲む気がうせました。」

「そ、それでこれは何の薬？」

あたしが尋ねると、魔女は気まずそうに目をそらす。仕方なくロッキンソンさんのほうを見たが、彼女もまた同じように目をそらした。

あたしの目の前には、異臭を発する小さなコップが一つ。なんだかコップの周りからどよんとしたオーラが漂っている気がする。薬というよりかはむしろ劇薬だ。

何とか飲まずにすむ方法はないだろうか。と思考を巡らせ、すぐに思いつく。

「あ、ほら、あたしお金持っていないし、魔女さんにとって薬は商売道具なんだから、この薬も他の人に売るべきよ」

「え？お金？じゃあ懐に入っているのは何なの？」

きよとした顔をした魔女に言われ、あわてて懷を押さえた。鎌をかけられたのだと気がついたのは、その直後だった。魔女がわざとらしく両眉を上げ唇の端を上げる。

「そもそも、お金をとる気はないわ。行き倒れの人にそこまでするほど私は守銭奴じゃないもの。その薬は．．．．．まあ、なんていうかしらね、その、あれよ、あれ、あれだから。そうよね、ロツキンツオン？」

「え？あ、私？」

いきなり話を振られたロツキンツオンさんは、あたしに抱き着かれたままの状態で一瞬あわてて、それから一瞬だけ真っ直ぐにあたしの目を見て、

「惚れ薬よ」

といて、すぐに目をそらしやがった。

本当に一瞬だけだったな．．．．．

．．．．．しかも惚れ薬って．．．．．

明らかに嘘だとわかる台詞に顔を引きつらせつつ、漸くロツキンツオンさんから離れ、あたしはコップを口元に持っていく。

ちらりと魔女を見る。

．．．．．なぜか応援された。

ちらりとロツキンツオンさんを見る。

．．．．．なぜか拝まれた！？

ごくり、と喉を鳴らして意を決したあたし。

沈黙があたしたちの間を流れた。

五、四、三、二、一．

ぐいっとカップを傾ける。途端にあたしの口の中に苦味があふれ、

あたしはしわくちやのおばあさんみたいに顔をしかめた。意思に反して吐き出しそうになる口を必死に押さえながら、なんとか胃袋に流し込もうとするが、何かが喉につつかえているみたいにそれを邪魔する。

あたしは涙目で魔女のほうを見て、吐き出してもいいかと視線で聞いた。

「イングリット。その薬はね、とても大切なものの。その薬を飲めないで死んだ人や、その薬が開発される前だったせいで殺された人が数え切れないほどのいるの。あなたがここにいてその薬を飲めるという事はとてもありがたい事なのよ。その薬がとつともなくまじいことはわかつているわ。でも、ねえ、イングリット。私はあなたに生きて欲しいの。あなたみたいな小さな女の子がどうしてこんな森の中で倒れていたのか、私には想像する事しかできないわ。けれど、きつとあなたがこの森に来たのはとても悲しい事だと思うの。私のところに来るのは病人ばかり。たまに健常者が来ても必ずその影には病気の二文字が付きまわっている。そしてそのうちのいくらかは元気になって帰って行って、残りのいくらかは　　この館で死んでしまう」

あたしの事からは完全に話がそれていたが、魔女の台詞に、あたしは薬を含んだまま聞き入ってしまった。

この歳若き魔女は、妹と二人っきりでたくさんの人の死を見てきた。時には、あたしのように事情を背負った幼い子供もいただろう。時には、つい患者に情が移ってしまった事もあっただろう。

嗚呼。

お金がないから薬が飲めませんなんて、あたしはなんて失礼な事を言ったのだろう。

魔女は、純粹に、真っ直ぐな気持ちであたしに死んでほしくないと

思っている。

なぜそんなにも、魔女は他人を思えるのだろう。

野垂れ死にしかかった子供なんて、助けなければいい。

ただ他人からもらっただけで、何も返す事のできない子供なんて、無視すればいい。

気づかなかつたといえはい。知らなかったと嘘をつけばいい。関係ないと主張すればいい！

なのに、魔女は手を差し伸べて。あたしの魂を温かい心でそっと包んで。

（切ない）

切ない。切ない。せつないせつない。胸が切ない。

あたしの心が震えて、声をつむぎだす。言葉にならない、意味のない声が。

だつて初めてだった。

無用心に好意を振りまける人間が。

だつて初めてじゃなかった！

他人のために心を開く人間が。

嗚呼。

いつそのこと、あたしなんて助けなくて欲しかった。

ねえ、わかつてる？

あたし、ほんとは死にたかつたんだ。あそこで野垂れ死にたかつたんだ。

行きようと頑張つて見せたのは単なる悪あがき。

あんなところで少しくらい頑張つたからって、死ぬのはわかつた。

あなたはあたしのためにあたしを助けたんじゃない。

ただ目の前で人が死にかかっているのが我慢できなかっただけ。ねえ。

誰でも彼でも生きたいと思っているなんて思っているの？

子供だったら悲しい経験をした事がないなんて信じているの？

（生きて、）

そして何かいい事があるの？

（何かを我慢する必要があるの？）

（あたしなんか）

あたしなんか

（あたしなんか）

あたしなんか。

「イングリット、私たちを助けてくれるかい？」

村を離れるときに聞いた大切な人の声が頭に響く。

あたしが、初めて村の人たちに嘘をつかれたとき。

嘘だとわかっていても、あたしは頷かざるをえなかった。裏切られたからこそ、村の人たちがどういう目であたしを見ていたかを知ってしまった。

じわりと、目の前がにじむのがわかった。

目の前がやみ色に染まる。

喉の奥から、熱いものがとめどなくあふれ出した。

腐死病。名前だけは知っていた。人の体が徐々に腐ったような黒色に染まっていき、数日で死に至る恐ろしい病気だという話は、お世話になっていた家が開業医だった事もあって、時々耳にした。

「イングリットちゃん、ちょっと手伝ってくれる？」

階下から聞こえてきたおかみさんの図太い声に、あたしは「はあい」と返事をして、友達の誕生日プレゼントのために編んでいた小さな手袋を放り出した。

あたしは、孤児だ。夫婦で旅をしていた両親はあたしがまだ四歳のころに山賊に襲われて負傷し、ほうほうのていで逃げ込んだ村で息を引き取った。それ以来あたしはその村の人たちの中で育てられた。本来招かれざる存在だったであろうあたしに対し、村の人は誰一人として嫌な顔一つしなかった。

彼らは、病気になったときに医者がいないと大変だろう、貧しくても子育ての経験がある家に預けるべきだろうか、子供がいなくても裕福な家に預けるべきか、などと、あたしが村に来て以来彼らは何度となく集会所に集まり、たかだか四歳の子供一人のために額を寄せて話し合った。結局、あたしは中年の医者夫婦のところに居候することになり、その家の二階にあたし専用の部屋が与えられた。

とんとんとん、と階段を下りていくと、おかみさんが鍋で医療品を煮沸消毒していた。

「ああ、漸く来たね、イングリットちゃん」

あたしを見つけたおかみさんはそういつて手招きする。

「そろそろだんなが帰ってくるはずだから、パン買ってきてくれるかい？ 白い大きいのがいいねえ。小麦のやつだよ」

おかみさんの言う、「だんな」は文字通りだんなさんのリットさんの事だ。この村唯一の医者の上、とても腕が立つのであちこちから引っぱりだこで、いつも回診に行っている。

おかみさんはあたしに小銭を渡しつつ、頭をくしゃつと撫でた。あたしはくすぐったさにちよつと目を細める。おかみさんの手から消毒薬のにおいがするのはいつもの事。そのにおいあたしの友達は嫌がるが、あたしの大好きなおいだ。

元気よくドアを開けて、あたしは秋空の下を走り出す。両側の小麦畑には麦がたわわになり、そろそろ刈り時だ。

いつもバターの香りのするエマーさんのパン屋に飛び込んで、あたしは「小麦の食パンください！」という。それこそパンのようにふくらした顔のエマーさんは、あたしがパンを買いに来るといつもおまけをしてくれるので、現金だと思いつつもあたしも惜しげなく愛想を振りまく。

エマーさんがおまけしてくれたチョコパンをほおばりながらパン屋を出たあたしはそこで「だんな」さんと鉢合わせし、驚いただんなさんは、

「」

・・・え？

視界がぐるりと暗転する。

小麦畑が真っ黒に染まり、腐ったようなにおいが辺りを覆う。

「」

「」

「」

「イングリット！」

そこには、いつもどおりのだんなさんがいた。

けれど、その目はいつもと違い、優しさの代わりの恐怖をたたえていた。

がしり。と、想像もできない力で肩をつかまれ、あたしは思わず怯む。心臓が高鳴り、つる草でも絡みついたかのように体が動かなくなる。

恐怖を感じた。

「イングリット」

後ろから別の声が聞こえて振り返ると、焼きたてのパンをたくさん抱えたエマーさんがいた。身じろぎしようとして、何か奇妙なものに触れて、あわてて身をすくめた。ぐによりという、不気味な感触。背中の上をぞわぞわと恐怖が駆け抜け、心臓が痛いぐらいに高鳴る。

「イングリット」

右から、漁師のミュールさんの声。

「イングリット」

左から鍛冶屋のシムさんの声。

みんな、黒かった。

強烈な酸の臭いにあたしは両手で鼻を覆う。

村のみんなの体が、濁った闇色に染まっていく。だらんと皮膚がたるみ、目は窪み、頬は垂れ、赤黒く膨れ上がった唇からはでこぼこの歯が見える。

「イングリット！」

誰かが呼んだ。もう誰の声だかわからない。喉の奥から搾り出したようなその声は、あたしの頭の中でがんがん響く。

「・・・・・・・・っ！」

あたしは耐え切れなくなつて耳をふさいでしゃがみこむ。けれどもあたしを呼ぶ声は絶えず、何かがあたしの体に触れるたびにあたしは嫌悪感で身震いする。

どれほどの時間、そうしていただろうか。

気がついたら、焚き火に照らされたやや広めの建物の中にいた。粉臭いにおいに（ああそうか）と気がつく。ここは、村の集会所だ。村で栽培される麦をいったん集めて王都へ出荷するための拠点で、隣に麦を挽くための風車小屋が隣接しているうえ、窓が小さいせいで風通しが悪いから、秋のこの時期はいつも粉っぽい匂いが漂っている。

あたしが立っているのは、集会所の玄関戸口。そして集会所の中では、大人たちが難しそうな顔で話している。いつもの話し合いとは違い、集会所に入りきらないほどの大人数だ。普段の寄り合いでは見かける事がないお年寄りや、女の人までも混じっている。

誰も彼も、体の一部に黒いシミのような跡がある。そのシミは、ここ数日徐々に体全体に広がっていて、ひどい人だと体の半分以上が侵されていた。

この村にいる、わたしも含めてたった五人の子供はまだ幼かったので寄り合いには参加していなかったが、あたしだけは家が遠い事もあるって、家に一人で置いておくのが不安だったのかおかみさんと旦那さんに連れてこられた。

寄り合いは、いつも以上に緊迫していた。

剣のある低い声が集会所の中を行きかい、声を荒げる人も何人かいた。

一体どんな話し合いが行われ、どういう提案がなされようとしてい

るのか幼いあたしにはわからなかったけれど、「腐死病」「焼き払い」「国王軍」という物騒な言葉は、状況が理解できない分余計にあたしを不安にさせた。

ときどき村の人たちはあたしのほうにチラッチラッと目配せし、やがて村の指導者的立場のロコさんがあたしのほうに近寄ってきた。決して他人に己の苦勞を悟らせるような事のないロコさんには珍しく、憂いを帯びた顔。

「イングリット、助けてくれるかい？」

今でも覚えてる。

ロコさんの必死の声も。

媚びへつらうようなまなざしも。

「イングリット、腐死病という言葉を知っているかい？」

普段とは様子の違うロコさんに、あたしは身を引いた。慌てたコルさんがあたしの両肩をがっしりとつかむ。

やや弾力に欠けた、その手で。

「腐死病というのはね、恐ろしい病気なんだ。村の人たちはお前を除いてみんな、それにかかってしまった」

「……どうして、あたしだけかからなかったの？」

村の人はみんな腐死病にかかったのに、どうしてあたしだけがかわらなかったの？

あたしは聞いた。

同じものを食べて、同じところで同じように暮らしていたのに、何であたしだけが仲間はずれなのか　と。

村の人たちはみんないい人達だったけれど、この村の生まれではないあたしはいつも仲間はずれにされる事を怖がっていた。一人だけ疎外感を感じる事を恐れていた。この村にあたしの家族はいない。おかみさんとだんなさんも、結局はあたしとは血のつながらない人たちだ。

いつかはこういう日が来るとわかっていた。村の人たちと自分が違う存在なのだとまざまざと自覚させられる日が来ると知っていた。

「イングリット。今からお前に村の全財産を預ける」

すぐに、ロコさんが何を言おうとしているのか気がついた。病氣にかかっていないあたしを、病氣にかからないうちにこの村から出す気だ。

「収穫前のこの時期だから、銀貨のような大きな貨幣はないが、それでも銅貨三千枚はあるはずだ。それを持って、森の魔女のところに、腐死病を治す薬を依頼してきて欲しい」

あたしは、この村の人間でないから。

一緒に死のうとは、言ってくれなかった。

ロコさんは、あたしが腐死病がどんな病氣は本当に知らないと思っていたんだろうか？

村の人たちの余命は、せいぜいあと三日、長くても一週間。

子供の足では、魔女のところまで行って帰ってくる間にみんな死んでしまう。

「そうしたら、みんな助かるの？」

棘のこもった口調であたしはロコさんに聞いた。

「ああ」

それに気づかずロコさんはにっこりと笑う。
うつすらと腐敗臭がした。

「イングリットが頑張れば、みんな、助かるのさ」

生まれて初めて、嘘を吐かれた。そしてその嘘は、あたしと村の人達との関係を、決定的に壊した。

第一章。まだ、少女イングリット

「つまり、イングリットの村の人がみんな腐死病にかかったのになぜかあなただけ難を逃れて、その上薬を依頼しに行くという名目で村を追い出された、というわけね」

一日廻って翌朝である。

あのあと、結局あたしは意識を保ちきれずに眠ってしまったらしい。一体その間にどういうことがあったのかは知らないが、気がついたらあたしはふかふかのベッドで寝かされていた。雨と泥でぐちゃぐちゃだったせいか、あたしはいつの間にか魔女やロッキンツォンさんとおそろいのやや質素な白い服に着替えさせられていた。空腹でおなかを高らかに鳴らしながら目を覚ますというなんとも恥ずかしい起き方をしてしまったあたしは、なぜか床に並んだ大量の皿を片付けている魔女と眼があった。

さすがに魔女といわれるだけのことがある。

あたしが話をするまでもなく、どこからかあたしの村の情報を仕入れてきたらしい。

素直に感心したいものだが、えっちらおっちら皿を片付けているその姿ははつきり言って間抜けだった。

あたしは大量に皿が並んでいる理由について、一つ仮説を立ててみる。

「この部屋、そんなに雨漏りがひどいの？」

「え？そんなことないけど。……ああ、このお皿ね。これは餌」

「餌？」

「そうよ。ほら、アサさん、覚えてる？」

アサ？

「……ああ、昨日あたしを食べようとした小動物か。

あたしはこう見えて自分の嫌な事はすぐ忘れられる性格だから、もう少して忘れるとこだった。

「あの子の餌よ」

「えええええーっ。どう考えても体積分以上食べてるじゃん！？
一体どっという胃袋してるのよ！」

「あの子、大喰らいの上にグルメだからね。当然、あたしやロツキ
ンツオンよりもいいもの食べてるし、ずばらなくせに食事の時間
だけは厳しいし」

「だからってありえないわよこの量はっ。二十四皿以上あるじゃない
！見てるだけで気分が悪くなってくるわ！」

「まあ多少食費がかさむのは　　ああ、言い忘れたけど、起きた
ばかりであまり大声を張り上げないほうがいいわ。一時酸欠状態に
なっって気が遠くなるから」

そういうことは先に言ってほしい。あたしはすうーっ意識が遠く
なりそうになったところを根性で何とかこらえて、両頬をぱちぱち
とたたいた。このあたしがこんなに簡単に気絶しかかるということ
は、やっぱり雨で打たれたせいで体力をかなり削られているみたい
だ。

「それで、どうするの?」

唐突に魔女が話題を変えて、あたしは一瞬何の事かわからずに混乱する。

「腐死病に利く薬、私に依頼するの?それとも依頼しないの?」

「あ………」

どう、しょうか。

そのために、ここまで来たんだ。

けど、もう、薬を必要としている人達はいない。

「薬は………」

あたしは、返答に窮した。即座にいらないと答えられなかった。頭では無駄だとわかっていても薬を作って欲しいと思っている自分がある事に違和感を覚えた。そのまま、ずいぶん長い事逡巡した。皿を片付け終わった魔女はその間一言も発せず、ただじつとあたしの顔を見つめていた。
やがて導き出された結論。

「あたしは、あたしの目的を果たすまでよ」

確かにあたしは村の人たちに裏切られた。けれどもそれによってあたしは助けられて、生き延びる事ができた。だから、たとえ無意味な事だとわかっていても今度はあたしが村の人たちを助けるために努力しよう。それが、彼らの弔いになるだろうと信じて。

村を出るときにはかばん一杯に詰まっていた銅貨も、途中で親切な旅人に銀貨四十枚と交換してもらい、その後立ち寄った商館で金貨

十枚と交換してもらった。商館での両替では多少手数料を取られていたとしても、あたし自身はこの旅程で一切そのお金には手をつけていない。秋の森には果実や水が豊富だったし、雨が降ったりしなければ森の中で野宿するのも悪くなかった。何度か、空腹や寒さにまけかかったこともあったけれど、これは自分のお金じゃないと言いや聞かせて我慢した。

いくら森の魔女の薬とはいえ、それだけのお金があれば村の人全員の薬代を払うぐらいたやすいことのはずだ。

だが、あたしが金貨を魔女に渡すと、魔女は一瞬変な顔をした。

「ねえ、イングリット。確か元は銅貨三千枚だったわよね」

「三千百三十二枚よ。何度も数えたから、間違いないわ」

「・・・・・・・・・・そう・・・・・・・・・・」

何を思ったのか、魔女は手元の金貨をもてあそびながら黙りこくってしまった。

「ひょっとしてあたし、両替したときにお金くすねられてる？」

ふと沸いた懸念。

だが、魔女は否定した。

「銀貨に換えてもらうときとか、金貨に換えてもらうときとか、相手の人に事情を話したりした？」

「ん？そりゃまあ、いくら平和な世の中とはいえこんな小さな女の子が一人で旅をするなんてそうそうないことだから、興味本位から聞かれたりはしたよ。腐死病って言うത്それだけで差別されたりするからそこらへんは適当にぼやかしたりはしたけどさ。故郷で疫病

がはやってあたし以外みんな大変な状況だから、薬を買いに行くんだって感じに」

「そう。だからかしらね」

「何が？」

「銀貨って。銅貨何枚分の価値だか知ってる？」

また唐突に話題が変わった。

あたしは元の銅貨の枚数と銀貨になったときの枚数から、ざっと暗算する。

「八十枚ぐらい？」

「はずれ。銅貨百枚で銀貨一枚分よ」

そういつて、魔女は金貨を一枚、指の間に挟むように掲げる。

「そして銀貨五枚が金貨一枚分の価値と等しいわ。もともと、金貨って価値が高すぎで逆に使いにくいから、大抵銀貨を金貨に両替する人はいないんだけどね」

「それじゃあ……」

「金貨十枚という事は、銅貨五千枚分もの大金よ。あなたの身の上に同情した人たちがこっそり寄付してくれたおかげで、額が膨れ上がったのね」

そういつて、魔女は優しく笑った。

世の中には、いい人がいる。

それは村の人たちだったり、旅人だったり、商館の館長だったり、森の魔女だったりする。

あたしは、そういう人たちに支えられているから生きている。

それはひよつとしたら、とてもすばらしい事なのかもしれない。

感動に打ちひしがれるあたしをちよつと見た後、魔女は、不意に表情を暗くした。

「依頼は、確かに受理したわ。．．．．でもね、これじゃあ駄目なのよ」

「え．．．．駄目？駄目ってどういうこと？」

「腐死病に利く薬草は蒼人参と言う植物の実から作られるの。でもその実は春にしか取れない上に、その植物の特性から群生する事がなくて、さらに言うとなんか生薬でないと薬効は著しく低くなるのよ。今はもう晩秋だから、薬を作ろうにも最低でもあと百日は待たなければいけないわ」

「．．．．．そんな．．．．．」

「もちろん、今現在保存している分がないわけではないわ。一度この実から作った薬草を北の氷国に運んで氷漬けにして、それから再輸入したものならまだ少しなら残っている。でもね、そちらは絶対量が少ないうえに移送費用と保管費用が馬鹿にならないからね。金貨十枚じゃあ一人分も買えないのよ」

「．．．．．」

魔女の言う事は正論だった。

ただ薬を作れないといわれただけなら駄々をこねていただろうわたしのために、薬がどうして高いのか、その理由までも理路整然と説明してくれた。

確かに金貨十枚は大金だ。あたし一人ぐらいなら一年は遊んで暮らせる。でも、魔女の薬はあたしが普段眼にしている薬とは額が違う。森の魔女は、王様や、国の偉い人たちが買いに来る様な格の違う薬師だ。

「金貨十枚で、どのくらい買えるんですか」

でも、あたしも引き下がるわけには行かなかった。

正直、魔女は優しそうだから、頼み込めば少しは譲ってくれるんじゃないかという甘えがあった。お金持ち相手の商売ばかりしている魔女だから、少しぐらいただで薬をくれても懐は痛まないだろうという打算もあった。

魔女は、冷やかな目であたしを見た。

親しみのこもっていない、見下した視線だった。

「金貨十枚分あなたに譲って、その薬であなたは何をするの？誰かを助けられるの？」

「た、助けるって……あたしはただ、村の人たちを……」

「もう、死んじゃってるのに？」

かっとなあたしの頭に血が上る。それは分かっているとも言われたい事だった。

怒鳴り散らそうと口を開きかけたあたしを制するように、魔女が言う。

「あなたのエゴのせいで、私のところまで充分なお金を持ってきたのに薬を買えずに死ぬ人がいるとしたらどうするの？」

ずん。と胸が重くなった。

金貨十枚でも一人分も買えないほど貴重な薬。

あたしがここで薬を買ったら、その代わりにあたしの知らない誰かが死ぬかもしれない。それで村の人が一人でも救えるならいい。一人救って、一人見捨てる。それなら大切な人のために見ず知らずの人を犠牲にしてもいいだろう。

あたしはただ、自己満足のために薬が欲しただけだ。

自分は村の人のために頑張ったという、全力を尽くしたという免罪符が欲しいだけだ。

そうでもしなければ、村の人たちを見捨てたあたしはあたし自身を許す事ができないから。

（金貨十枚もあるなら、それで生まれ変わればいいじゃないか）

あたしの中で誰かがささやく。

（それだけのお金があれば、子供でもかくまってくれるやつがたくさんいる。ここでごみにしかならない薬を買って文無しになるよりもそっちのほうがずっと村の人たちへの恩返しになるんじゃないのか？）

薬を買って、誰かが死ぬなら。

あたし自身が幸せになったほうが、村の人たちも嬉しいだろう。

考えれば考えるほど、薬を買わない方向に意志が傾いていく。

誰かのために薬を買わないという、新しい免罪符を手に入れたあた

しは、急に目の前の金貨が惜しくなった。

そもそも、村の人たちはあたしのためにこのお金を用意してくれたんだろう。保護してくれる人たちがいなくなっても、わたしが食べるのに困らないようにお金を残してくれた。それがわかつていたからこそ、あたしは意地でもそのお金には手をつけなかったし、他人のお金だと言い聞かせてきた。

プライドが許さなかったのだろう。

所詮、自分を支えていたのはそんなくだらないものだったんだ。

「魔女さん」

しばらくぶりに、あたしは魔女としっかり目を合わせた。

そして、魔女の手の中に在るきらきら光るお金に視線を落とす。

「そのお金の分、次にお金が足りなくて薬が買えない人が来たときに、薬を譲ってあげてください」

・・・・・・・・あれ？

・・・・・・・・あれ？

今あたし、なんか間違ったこといわなかった？

思考と発言がかみ合わずに一瞬きよとん。

それからあたしは小首をかしげた。

魔女が笑って、あたしの頭を撫でてくれた。

「そうね。あなたなら、そういう答えを出すかもしれないわね」

うんうんと頷く魔女。

いや、だからあたし、言い間違えただけなんだって！！

この話はもうおしまいというように、魔女がまた話題を変える。

「何日か、この館で休んでいきなさい。家事を手伝う事を条件に食費とかはこちらで面倒を見てあげるから」

「・・・・・・・・・・はあ」

もはや自分で勝手に結論を出してしまっている魔女に、あたしは仕方なく頷いた。

数日後。

まだ体が弱っていて固形物の消化を受け付けないらしいあたしの胃袋のために木の母乳を混ぜた栄養ドリンクを飲んで、それから例の苦つがい薬も飲んで、あたしは漸くベッドから降りる許可を得た。

許可とはいっても制限付で、魔女がロッキンソンさんと一緒にやなければ外に出たらいけないかったり走り回ったりしたらいけないかったり、まるで重病人に対する扱いであたしはちよつと体力をもてあまし気味。

そんなあたしの様子に気がついたのか、昼食のあとで魔女が森の散策に誘ってくれた。

「散策というより、搜索ね」

「え？誰かを探しに行くの？」

「そんなところ。マサさんって言うんだけどね、アサさんと同じ猫って言う動物で、盗癖がある上に方向音痴なのよ。マサさんが遭難してしばらく帰ってこないのはいつもの事なんだけどそろそろ冬も近いからね。薬草を採集するついでに家に連れて帰ろうと思ってね」

「猫？それってあの絶滅危惧種に指定されている猫の事！？」

あたしは驚いて目を見開いた。

あたしの記憶が正しければ、歳経た猫はやがて人を食べるようになるという噂から何十年かまえに乱獲が行われたはずだ。その結果今では百匹も残っていないといわれ、半ば伝説の存在と化している。でもあの愛らしい姿からは到底人を食うような印象は……あ、そういえば出会いがしらに食べられなかったな。

それにあの猫、普段から二十四完食するぐらい大食らいだし。

「アサさんの大食らいは別に猫全般に共通する特徴じゃないわ」

まるで心を読んだかのように魔女が言った。

「それに、家の猫は二匹とも変わってるのよ。本来猫は方向感覚がよくって、半日ぐらいの絶食で飢え死にしかかったりはしないんだけどね」

半日食べなくてもう飢え死にかい！

そりゃあ変わってるよ！？

「もっとも、私だってアサさんとマサさん以外の猫にはあった事がないから猫の特長なんていうのもいい加減なものだけどね……
……あら？」

ふと、そこで魔女が顔を上げた。

あたしもその視線を追うと、なぜかエプロンをつけてハタキを持ったロッキンツォンさんがいた。

「わざわざ見送りに出てきてくれたの？珍しいわね」と、魔女。ロッキンツォンさんは魔女のほうを向いてちよっと呆れたような表

情をすると、あたしのほうを向いていった。

「イングリットさん。くれぐれも体調にはお気をつけて。体に痺れを感じたり、指先が急に冷たくなったりしたらすぐ森の魔女に言うんですよ」

・・・ん？

ずいぶん症状が細かいな。

体調が悪くなったらすぐ言えって言うならわかるけど、どうして体が痺れたり指先が冷たくなるってことが前提なんだろう？

あたしは疑問に思っただけを振り返ったが、もうロッキンツォンさんはいない。わたしとほんの何歳かしか離れていないのに、一人前の働き手としてこの館の事を切り盛りしているのだ。その事にあたしは少し敬意を払いたい。

「あの子だったら、それだけのことを言うためにわざわざ顔を出したのかしら？私がついているんだから患者の体調悪化に気づかないなんてことはないのにな」

あたしと魔女は、顔を見合わせて笑った。

改めて魔女と一緒に森の中を歩いてみると、まるで整備された道があるときのように簡単に移動できる事に気がつく。魔女以外ほとんど誰も入らない森なのだから未開地といっても語弊はないようなところなのに、平らな道を歩くのと大して変わらない速度で移動できるのは、きつと魔女と一緒にいるからだ。そのため、あつという間に魔女の館が見えなくなってしまった。

時刻はそろそろ三時過ぎのはずだが、森の中にいる限り、時刻はほ

とんど関係ない。木々はうつそうと茂り陽光をさえぎり、立ち込める蒸気が熱気を帯びてむしむしとしている。森国といってもここまですべて植物に侵食されている場所というのも珍しい。なれない環境に、あたしは少し居心地の悪さを感じて身じろぎした。

「どうしたの？眠いの？それともお腹が空いたの？」

あたしの動きに反応して即座に魔女が尋ねてくる。

「……てか、まるであたしが食べる事と寝る事しか考えてない単細胞生物みたいな言い方は止めてほしい。」

ここ何日か一緒に過ごしたんだから、いくら他人とはいえ魔女もあたしの生活パターンぐらい知っているだろうに……

朝起きて、ベッドに寝ころがったまま薬を飲んでご飯を食べて昼寝して、昼食の後に居眠りをして夕飯を食べて就寝……

……あれ？

あたしはがくつと肩を落とした。

本当に食べて寝るだけしかやっていない。

一応、ベッドから出る事を魔女から禁止されていたと言い訳できないでもないけど、それにしたって意気地がしゅんと萎えてしまう。

「ま、まあ、果物ならいくらでも食べ放題よ。ほら」

意気消沈したあたしに、何を勘違いしたのか魔女があわてて手を差し出す。

すると、まるで示し合わせたかのように上の木々から林檎が一個、魔女の手の上に落ちてくる。

嗚呼。

やっぱり、魔女っていいな。

わざわざ木に登ってくだものを採ってこなくても、魔女が望むだけ

で森がいくらでも果物を分けてくれるんだもの。

あたしは魔女から受け取った林檎をかじりつつ、遠い目になった。森の魔女といえば、誰もがなりたがる憧れの職業だというけど、それも確かに頷ける。おいしい果物は、誰にとってもあがないがたい魅力だ。

「……普通、魔女になろうという人は林檎ではなくて権力に魅力を感じているのよ」

魔女があきれつつも訂正を入れる。

「……心読まれた!？」

「森の魔女ほどの薬師になれば当然注文に来る顧客も選ばれた人たちになるわ。魔女は大臣とか宰相とか国王とのつながりも強いし、他の国にもコネがある。だから大抵森の魔女になりたい人って言うのは権力は欲しいけれども努力をするのが嫌いな無責任な人たちね」

もつとも、今の時代努力をしたり苦労をしたりしてまで権力を得たいと思う人は少なくなってしまったけどね。と、魔女が、森の魔女について説明してくれた。

「魔女さんも、権力が欲しかったから魔女になったの?」

「んん? 私は違うわよ。ただ単に先代の魔女に憧れたってだけのこと。……あと、成り行きかな?」

「成り行き?」

「ええ。昔私が住んでいた町でも、腐死病が流行してね。私も両親を亡くしちゃって、まだ赤ん坊だったロッキンツォンを育てるため

に先代の魔女のところに身を寄せたのよ。．．．．．ああ、今思えばあれが全ての始まりだったわ」

なぜか遠い目をする魔女。

いろいろ思うところがあるらしい。

「じゃあ、あたしと同じような境遇だったってこと？」

「ええ。見方によってはそうなるわね。もともと、数年に一回は腐死病で滅びる村や街があるんだから、私やあなたと同じような境遇の人なんて沢山いるでしょうけど。ただ、まさか自分の村で腐死病が蔓延するとは思わなかったけれど」

「．．．．．それも、そだね」

あたしは大きく目を睨り、ややあつてうつむいた。
村の、^{こきょう}ロコさんの声が頭に響く。

イングリットが頑張れば

たいていの人にとって、腐死病は自分とは関係のない事なのだ。でも、当事者たちにとっては運が悪いという言葉では済まされない。いくら魔女が腐死病を治せる薬を作るからといって、魔女は大陸中でたった一人しかいないんだし、どんなに魔女が頑張っても作れる薬の量には限界がある。それに、魔女の言葉が正しければ腐死病の薬草自体稀少なものらしい。

誰かが頑張ったところで、救える命の数なんて高が知れている。

「．．．．．うん、わかつているつもりだ。精一杯頑張っても、どんなに手を伸ばしても、指と指の間から零れ落ちていってしまう命があるのは避けられない。それは魔女のせいでも他の誰のせいでも

ない。

でも、それを仕方がないとしてしまうのは、違うと思う。精一杯頑張っても助けられなかった命だって、何とか助ける事ができた命だって、どちらもかけがえのないものであったのには変わりがないんだから。

「ごめんなさいね」

ふいに魔女が言った。

イタカの村の人たちを助ける事ができなくて、ごめんなさいと。

魔女は、そういう人だ。

自分の力の及ぶ限界まで頑張って、それでも助けられなかった命に對し、ごめんなさいと涙を流せる人だ。

その優しさは、ロッキンツォンさんに通じる。きっと、先代の魔女もそういう優しい人だったんだろう。

「魔女さんは、悪くないよ」

まだ何かを言おうとする魔女を制して、あたしは言った。

「あはは。なんかさ、魔女さんって言ってもあれだよ、普通の人と変わらないような気がする。村にいたときにはあたし、魔女って言うところの奥で隠棲生活を送ってる悟りきった人みたいなイメージがあったのに、目からウロコだよ」

「魔女について今流れている噂のほとんどは、先代の魔女のものなのよ。魔女の容姿って言うところの腰の曲がったしわくちゃ顔のおばさんみたいな感じがするでしょう？それは明らかに先代の特徴だし、薬を作るときにサンバを踊るって言うのも先代の魔女が編み出した技法なの」

「ちょっと待つて！その噂は聞いた事がないわ！？しわくちやのおばあさんがサンバを踊りながら薬を作るの？それってある意味・・・」

想像開始。

想像終了。

「・・・・・・・・絶対見たくない光景だわ」

むしろそんなファンシーなばあさんが森の魔女なんてやってたから、魔女に『近寄りがたい』みたいな印象があるんじゃないでしょうか。

「知りたくなかった魔女の実態、というより噂のまんまの怖そうなおばあさんのほうがまだよかったわ・・・・・・・・」

弱弱しく頷くあたし。

気がつくとも口元に手を当てた魔女がぶるぶると震えている。

笑ってる！？

「ちょっと！何でそこで笑うのよ！？魔女って言う結構憧れの存在だったのよ！あたしの夢を返してよ！！」

「まあ、あなたの夢が壊れてしまったのは残念に思うわ。でもそれを私に当たるのはお門違いじゃないかしら。誰かに責任を取らせないと気がすまないなんて・・・・・・・・そんなの、ただの横暴よ」

魔女の言っている事は正論だった。

でも納得は出来ない。

正論は必ず人を傷つける。

ここで引いたらイングリットの名が廃る！

「じゃあ魔女さんは一度も誰かに文句を言ったことはないって言うの！！」

「ないわね」

即答！？

てか、嘘でしょ！

「魔女さん！」

あたしは断固とした抗議の意味をこめて、魔女の前に立ちふさがった。

一体何事かといった感じで、魔女が目を丸くする。

その魔女に向かって、あたしは大きく息を吸った。

普段なら、いくらあたしが抗議したところで、魔女に軽く言いこめられて終わるところだ。けれど、今回は例外だった。

突然、あたしたちのすぐ横の木が倒れなければ。

ぎいいいいっ、ばたんっ！

そんな、立て付けの悪いドアみたいな感じで腐った巨木が倒れ、一瞬、誰もが硬直した。……いや、あたしと魔女の二人だけだけどさ。

「あ、あつぶな。なによこの木、もう少しで怪我するところだったわ」

「一応、謝罪しておくわ。森の管理人たる魔女として」

森の魔女が淡々と言って倒木に近づく。

「ああ。やっぱり」

やがて魔女は言った。

「やっぱりって何？その木が何か変なの？」

「イングリット。とりあえずあなたは館に帰りなさい」

「へ？」

唐突に言う魔女に、あたしの頭には「？」が浮かんた。

「森林散策は中止よ。薬草もまだ全然採れてないけど、そっちの予定も後回しね。ほら、見てみなさい」

森の魔女に促されるままに、倒木に近づいたあたしは、

「な、なによこれ！？」

倒木に深々と突き刺さった矢を発見した。矢は真っ直ぐに、魔女のいた場所に向いている。朽木がたまたま倒れたから、その矢が防がれたのだ。

「ま、魔女を殺そうなんて考える人がいるの　　！」

「安心しなさい。彼が自分の登場シーンを派手なものにしようとして悪質ないたずらをするのはいつもの事だから」

「彼って……もう少しで魔女さん、死んでたんですよ！」

そういつて、ハタと気づく。

魔女がこんな事で死ぬわけがない。森にいる限り、全てが魔女の味方だ。

「森が傷つくからやめてくれとはいっても言ってるんだけど、聞く気はまったく無いようなのよね。害意は無いんだろけど……と、言うわけだから、イングリット」

魔女は、ぐるりと辺りを見回しながら言った。

「あなたがここにいると無駄に話がこじれそうだから、先に館に帰っていなさい」

「でも、帰り道わからないし！」

「案内をつけるわ」

魔女がそういうと、どこからとも無く狼の群れが現れる。総勢数百匹、これが魔女の言う「案内」なのだろう。

案内なら一匹でいいだろうとか律儀に心の中で突っ込みを入れながら、あたしはとりあえず狼の群れについていく事にした。

なぜ、あたしがいると話がこじれるのか、その理由には気づかずに。

第二幕。魔女、ハル

狼の遠吠えが小さくなつていくのを聞きながら、私はほつと胸をなでおろした。

これで、あの子は大丈夫だろう。ロッキンツォンならすぐに事情を察してイングリットを匿ってくれるはずだ。

まだ、あの子が自分の秘密に気がつくのには時期が早すぎる。選択肢が一つしかなくても、あの子にはちゃんと、自分の意思で歩むべき道を選んで欲しいから。

でも、彼女がどういう選択肢をとるかはわかっている。彼女は私と全く同じ道を歩んでいくべきだ。

私は軽く溜息をつく、森の一方を睨みつける。

「今回はまた、ずいぶんと地味な登場ですね、殿下」

私が皮肉を言うと、木々の間から私と同年の男が現れた。

「まあ、今日は先客がいたようだし、少々羽目はずしすぎると兄上のように『森の魔女のいる半径二千歩以内に立ち入り禁止』の刑を食らってしまうからね。愛のキューピットにちなんで、僕の愛情がたっぷりこもった矢を放たせてもらったよ」

私は呆れて目を細めつつ、彼から目を逸らした。

目を逸らした理由は明快だ。

愛のキューピットにちなんでいるという彼は、愛のキューピットにちなんでいるという言葉のとおり、なんとも変態的な格好をしていたからだ。

正確に言うと、一糸まとわぬ姿に羽根姿。

それこそ、愛の使者たるキューピットを冒瀆している。

「ごめんなさい」

とりあえず、私は目を逸らしたまま彼に謝る事にした。

「私はこれでも世界一の薬師のつもりだけど、あなたの思考回路は人類のそれとはあまりのモかけ離れていて、私でも治療は不可能だわ」

本当は意地でも治療してあげたいのだが。

あなたのためではなく、私のために。

イングリットを逃がしておいてよかった。森の魔女がこんな変態と知り合いだと知れたら、それこそ森の魔女に関する頓珍漢な噂を流されかねない。

曰く、人里はなれた森の中で暮らす世間知らずの魔女は、裸で往来を歩くような男が好ましい、とか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

私は弱弱しく頭を垂れた。

嫌だ・・・・・・・・

そんな噂を流された日には、魔女の沽券にかかわる。

サンバを踊りながら薬を調合する先代の魔女を見るときのような好奇の視線が、今度は私に向けられる事になるのだろうか？

確かに魔女には変わり者も多い。社会と隔絶された環境で暮らしているせいか、先代の魔女を初めとしてサンバだったりゴスロリだったり刻の声だったり、頭を抱えなくなるような微妙な性癖を持つ傾向が、たしかに、代々の魔女には、ある。

でも、そこに「ヌード趣味」なんていう破廉恥な性癖は、付け加えたくない。年頃の女の子として。

とりあえず、そのためには目の前の男を闇に葬らなくてはいけない。私は固い決意をこめて、ぐっと手を握り締めた。

幸いな事に私はこの男を私の前から消し去るステキな呪文を知っている。

ただ、これは本来最終手段だ。

あまりに効果絶大すぎるので、普段は使わない事にしている。

「殿下、公務はどうなされましたか？」

しかし、彼は既にこの呪文に対する防衛呪文を会得していた。

「ふふん」

と、まるで鼻歌を歌うようにしながら彼が背中の羽根から取り出したのは一枚のスマギク紙。

それをこちらに向かって差し出しているところを見ると、受け取れという事なのだろう。

私は目をそっぽに向けたまま慎重にじりじりと彼に近づいて行く。彼の体温で微妙に生暖かくなったその用紙には、ライヒビ王国の宰相の印が押してある。保管に適したスマギク紙を使う事といい、どうやら正式な公文書のようなようだ。

『『大陸暦1006年海老月六日。本日、怠惰ですばらで怠け者のライヒビ王室第七十七代国王が三男、イーマ・ライヒビ王子殿下が先一ヶ月分の書類公務を全て一日で片付けてしまうという、世界の終末が目前に迫っているとしか思えないような奇行に走ったため、非常に、とても、むちゃくちゃ遺憾ながら閣下の魔女の館で休暇をとりたいというワガママを阻止する事ができず、ちゃんと仕事が出るならサボろうとせずにもまじめにやれよ糞王子とか思っているがらもここに王子が二週間の休暇を取ることを認めます』と書いて

ありますね」

一度音読した後、私は、目をこすってから何度も見直したが、本来あるはずのない目の前の手紙が消える事は無く、ついでに視界の隅の変態男も消えてくれちゃったりはしなかった。

公文書偽装の可能性もまじめに考えてみたが、平民出身の宰相閣下独特の乱雑な言葉遣いは紛うこともない本物だった。

「殿下、お付の方々はどうしました？護衛もなしでは危ないでしょう」

「お、魔女殿が私の心配をしてくれるか！？」

いや、むしろあなたみたいなアブナイ奴が野放しになっている事のほう私が心配だ。

こんなのが一応王子だと他の国に知れたらこの国の品位を疑われてしまう。

「宰相たちはな、うん、いろいろとうるさいから何とか振り切ってきた。まあ、いざとなったら魔女殿が守ってくれるだろうから、護衛などいらさないさ」

すっかり当てにされていた。

こういうとき、普通は男性が女性を守るものではないだろうか？

私は彼が私を守ってくれているところを想像してみた。

想像開始。

想像終了。

死んでもそのような事態は避けなければいけないと心に誓った。

「さて、魔女殿。まだ他に言いたい事はあるか？」

どうだとばかりに腰に手を当てて胸を張る彼。

「……………とりあえず服を着てください、殿下」

「は？」

「『は？』じゃありません！大体今が何月だと思ってるんですか？
見ているこっちが寒くなります！？」

「ああ、そういうことか。大丈夫だ。これくらいなんとも無い。例え世界が氷で閉ざされたとしても、この魂は魔女殿の愛で暖かく包まれている！」

私はツララのようなまなざしで彼を見た。
見てしまったからあわてて、目を逸らした。
汚れる汚れる。

「……………とりあえず、お引取りください、殿下。私の館には
今、重病患者が保護されているんです」

「ふふふ、魔女殿はシャイだな。私と目を合わせることすらも気恥ずかしいとを感じるか。……………ああ、それと、重病患者というのは先ほど魔女殿と一緒にいた女の子の事か？いつの間になくなってしまったようだ」

「いたいけな少女があなたの毒牙にかけられる事の無いよう、避難させたんです」

ふんつ。と、彼がむくれたように腕を組む。

そして、ふいにまじめな顔になった。
やや間があつて、彼が口を開く。

「あの娘、よもやイングリットという名前ではなかるうな？」

空気が、止まった。

違つと即答したかつたけれど、口が動かなかつた。

「先月、イタカの村が腐死病に滅ぼされた」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「秋の刈り入れの時期だつたのが幸いしてな、王都から麦の買い付けに行つた商人たちによつてすぐに腐死病の蔓延が確認、対処されたが、一人だけ、イタカの村に籍を置くもので死体が確認できなかったものがある」

腐死病に対する対処、というのは村中に油をまいて焼き払つてしまふ事だ。例え生存者がいたとしても、ぐるりと村を取り囲む兵士達によつて皆殺しにされる。村は、文字通り灰になる。

今のところ、それが腐死病に対抗する最も有効的な手段といわれている。

まだ幼いイングリットは、そこらへんのことは知らないようだったが。

「私はイタカの村を焼き払うときに、現場責任者をやらされた」

私は思わず、はつと息を呑む。

彼の言っているのは、それくらいの言葉だつた。

「今でも、彼らの苦しむ声が頭の中で響いている」

彼の格好はともかく、彼の言葉は恐ろしくはつきりと森の中に澄み渡った。

「なあ、魔女殿。実のところ、どうなのだ？腐死病は絶対に対処が出来ない病気なのか？王都からここまで大人の足で五日。イタカの村のほうが多少距離が近いとはいえ、あの歳の少女が一人で旅をするとなると、二週間はかかるだろう。それなのになぜ、あの少女は死んでいないのだ？腐死病に対して先天的に免疫を持っている人間というのがあるのか？」

矢継ぎ早に質問してくる彼。

それは、微かに見出した可能性に何とかしてしがみつこうとしているようにも感じられた。

けれど、その質問に対する答えは、否だった。

「潜伏期間、って知ってる？」

私の問いに一瞬、呆けた顔をする彼。

「医療用語で、感染から発病までの期間の事だろ？その間に病原菌は人間の体内環境に適応したり、増殖をしたりする。潜伏期間中に病気が発見できるかどうかが生死にかかわるような事もあるそうだが、腐死病に関しては潜伏期間なんてものは無いはずだぞ……
・いや、まて、あるのか？腐死病にも潜伏期間が……
まさか、あの娘がそうなのか？」

相変わらず、聡い。

人は見かけによらないとは、よく言ったものだ。

「正確に言えば、潜伏期間というわけではないけれどもね。腐死病は数日のうちに生物を死に至らしめてしまう恐ろしい病気だけれど、逆に言えば感染者がすぐに死んでしまう分、感染範囲はあまり広がらないのよ。だから大抵、感染エリアにおいて一人ぐらいは感染から発病までに一定の期間がおかれるの。その間にその人が行動して、感染エリアが広がっていくのよ」

私は、彼が理解できないだろうと半ば確信しながら言った。病原菌の特徴と呼ぶにはこれはあまりにも異常すぎるし、私の乏しい語彙力では簡潔に説明する事はできない。

彼はしばらく考えるように腕を組んでいたが、やがてぼんと手を打ち鳴らした。

「つまりはこういうことか。人に感染して繁殖する腐死病は、人がいなくなってしまうては繁殖が出来ない。だから人の命を奪うだけ奪いつくした後、他の街に移動して新しい獲物を獲るために、最低でも一人は生かしておくのだな」

「………なんでなのかしら、私がそれを理解するのに何日もかかったという事は別にして、少なくともすっぽんぽんのあなたにだけは理解されなくなかったわ」

別に彼に悪意があるわけではないのだが、侮辱された気がした。屋外全裸破廉恥男よりも自分の頭脳のほうが劣っているといわれた気がして。

「では、改めて聞く。腐死病に対抗する手段は、本当にペツタラシかないのだな？」

ペッタラというのは、イングリットが結局買うのをあきらめた蒼人参の隠語だ。

ベッタラの実は春先にしかならず、大抵腐死病が蔓延するのは秋だ。それに、ベッタラの生殖数はあまりにも少なく、ベッタラが腐死病に有効だと他の薬師たちが知ったら、我先にと乱獲してすぐに絶滅してしまうだろう。

森の魔女が腐死病に効く薬の作り方を公開しないのは、薬の利益を独占したいからだと薬師の間でひそかに囁かれているのは知っている。でも、腐死病に対する唯一の対抗手段を失ってしまったては、今度こそ手詰まりになってしまう。

「その通りよ。腐死病を直す手段は、ベッタラしかない。腐死病の蔓延を防ぐ手段は、焼却処理しかない。死期を延ばす手段は、・・・まあ、いくつかあるけどね」

「・・・そうか。いや、詮無い事を聞いた。結局、人間にとって腐死病は抗えぬ天災なのか・・・って、マテ」

口で言うのと同時に、手でも待てといってくる彼。

「腐死病の死期を延ばす手段なんてものが、あるのか？」

「あるわよ。一番単純なのは、体の、腐死病に感染した部分を焼くなり切るなりする方法。あとは新陳代謝を薬によって低下させる方法や首から下を水中に沈めて生活するという方法も場合によっては有効よ」

驚きとも、喜びともつかない表情をする彼。だがすぐに、警戒のそれへと変わった。

「では、なぜ魔女殿はそのやり方を実行しない？」
ほらやっぱり。

彼が一筋縄でいかないのは、こういう所だ。

「よっぽど初期症状で無いと通用しないというだけの話よ。後は、
イングリットのように潜伏期間中の患者の場合でないとね」

仕方が無いので、わたしは正直に答える。

「……ふうむ。まあ、魔女殿のことだから害意あつてのこと
ではないと思うが……」

彼は、まだ納得がいかないのか眉をしかめていたが、渋々ながらも
引き下がってくれた。

「まあ、それはそうとして……ここは、ちと寒くないか？」

今更思い出したように言う彼に、今更思い出したように私は目を逸
らした。

「ですから、服を着てください、殿下。まさか服を持っていないと
いうことは無いでしょう」

もっていない可能性も充分あつたが、幸いにして、彼はこくりと頷
いた。

彼がいそいそとはおつた服を見て私は大きく溜息をつく。とりあえ
ず、裸に黒マントという趣味が私にないことだけは、弁解しておこ
う。

第三幕。魔女の妹、ロッキンツォン

姉の事を尊敬しているかと聞かれたら、私はしばし首をかしげた後、肯^{はい}と答えるだろう。

姉は空気が読めない性格で、意思疎通能力が低く、誰かと話しているのを傍からみていて気を揉む事がしばしばだが、魔女なのだから仕方が無いといえればそれまでの事だし、逆に姉が普通の街娘のような調子で誰かと会話していたらそれこそ頭でも打ったのかと心配してしまう。

つまりは、姉には姉の生き方がある、ということだろう。だが、それを見習いたいかという事と尊敬しているかという事は、違う問題だ。

それはともかく、今現在私たちの館に宿泊しているイングリットという女の子は、ずいぶんと姉の興味を引いているようだ。どこが姉の琴線に触れたのか、姉はイングリットをやたらと気にかけている。具体的にどうこうと例が挙げられるわけではないが、生まれてから今までの全ての時間を姉と共有してきた私は、姉のわずかな態度の違いでそれがはつきりとわかった。

そして、姉がイングリットに興味を持った事よりもさらに驚いたのは、姉がイングリットを次世代の魔女に育て上げようとしている事だ。魔女にするということは、いろいろなしがらみを与えるという事に等しい。だから、姉がこうもあっさりと後継者を決めてしまったことは私に戸惑いをもたらした。

私には、イングリットと言う少女が魔女になれるほどの器を持ち合わせているとは思えない。魔女というのは王侯貴族とも渡り合っていかなければいけない職業だ。扱うお金の単位も、命の重みも、並みの薬師とは比べようにならないくらい違う。それこそ一度の診察

ミスが十年単位で国に被害をもたらしてしまう。

腐死病で身寄りを失った、右も左も、自分の進むべき明日もわからない少女にいきなり魔女になれといっても、プレッシャーに押しつぶされてしまっただけだろう。あの子には、ただの人間として普通の人生を送ってもらわなければならない。

私は、そんな事をつらづらと思いながら洗った食器を棚にしまっている。

家事の出来ない姉に代わって、この家を人が住むにふさわしいレベルに保つのが私の役目だ。この家は人の世と森との玄関口。塵一つ積もってはいけない。

石段が窪めばすぐに新しいものに取り替えて、木の床が濡れれば撓しならないうちに拭いてしまう。そういった細かい手入れは当たり前として、勿論汚れないようにするための手間も惜しまない。土足など言語道断だ。

まあ、とはいっても姉はしょっちゅう靴を脱ぎ忘れたまま上がりこんでくるし、どちらかといえば落ち着いた性格のわたしがいくらほんわかと諭したところで姉は全く私の言う事を聞く気が無いようなのだ。

「ロッキンツォンさん！」

「靴を脱いで足を拭いてスリッパを履きなさい今すぐにとっているそばから床を泥だらけにしないでくださいそれは私に対する宣戦布告と受け取りますよっ！！」

私がほんわかと諭すと、イングリットは一瞬呆気にとられた後、あわてて靴を脱いだ。

なぜ呆気にとられたのだろうか？

不思議だ。

「それで、どうしたのですか？そんなに顔を引きつらせて……
・それでは一見かわいい顔も台無しですよ」

イングリットと視線を合わせるために、少しだけ私は前かがみにな
って尋ねた。

「魔女さんが、弓で撃たれて、それで木が防いで、それで……
」

慌てて、両手をばたばたと振りつつ途切れ途切れの単語をつむぐイ
ングリットをとりあえず落ち着かせようと、私はしまいかけていた
コップに水を注ぎイングリットに手渡す。

「イングリット。深呼吸をしましょう。吸って、吐いて、吸って、
吐いて……」

すーっ。
はあーっ。
すーっ。
はあーっ。
すーっ。
はあーっ。
すーっ。
はあーっ。
すーっ。
はあーっ。
すーっ。
はあーっ。
すーっ。
はあーっ。
すーっ。

「……イングリット、落ち着いたら深呼吸を止めてもか
まわないんですよ。そんなに必死に深呼吸してたら、深呼吸の意味

がありませんから」

この子、素直というかい子というか……..
私がやめろというまで深呼吸をずっと続けるつもりだったようだ。
びた。とイングリットが深呼吸を止めて、それと同時に体の動き求
める。

「……………」

「……………」

沈黙。

やがてイングリットが声を放った。

「むづ。むづむづ」

「……………イングリット、深呼吸というのは息を吐いたところ
で止めるものです。息を吸ったところで止めてしまったら、苦しい
でしょう」

優しく、諭すように言う。

イングリットがいい子過ぎて、私の趣味にストライクゾーンなのは
大歓迎なのだけど、こんな性格をしていては将来他人に力もられ
るのは目に見えている。

ぷは。とイングリットが息を吐いた。

「要するに、貴方と魔女が森を散策している途中、何者かによって
魔女が襲撃を受けた。矢による攻撃は魔女を守ろうとした森の倒木
によって防がれたものの、何がどうなっているのかわからない。お
まけに魔女は貴方だけ先に館に戻るように指示した。そうですね？」

イングリットが目を丸くする。

あれだけ切れ切れとした単語では何を言っているのか伝わらないと、イングリット自身自覚してはいたのだろう。

「別に驚くことでもありませんよ。ただ単に、そういう愚かなことをするような方に心当たりがあるだけのことです。安心してください。いつもの事ですし、彼だって本気で魔女を狙っているわけではありませんよ」

「で、でもっ、魔女さんはあたしだけ逃がしたしっ！」

「別の意味でアブナイ方なのですよ。名目上はこの国の第三王子ってことになっていますが、城にいるよりも市井の繁華街にいる事のほうが多いお方でね、ちゃんとその才能を正しい方向に使えば優秀な方なのですが、忌憚無く才能を発揮するのは己の趣味と道楽のためだけという、ちょっと困った方なのですよ」

そういつて苦笑すると、イングリットは愕然としていた。一体何に驚いたのだろうか？

私は自分の言動を振り返った。

「ひよっとして、王族だというのがそんなに驚きでしたか？この国の王族など、他国に比べたらたいしたことありませんよ。水国の国王や砂国の皇室などは指一つ動かすだけで百人の人間の命を左右できるほどです。それと比べれば、どれだけこの国の王族が庶民的な生活を送っているかがわかるでしょう？」

「いや、分かんないから！王子様の日常生活とか知らないし！」

ああ、そういわれればそうだ。

魔女の関係者という立場上、どうしてもイングリットとは違う視野になってしまう。イングリットからすれば、王子の日常生活について当たり前のように話されても、ただ当惑する事しかできないだろう。

この子がもし、本当に魔女になりたいというのなら、こういうことも知っていかなければいけないのだが。

いずれにしろ、当面のところはこの子には関係の無い話だ。

「要するに、この国の王子様は、貴方が思っているよりもずっと気さくな方だというだけの話ですよ」

これで、この話はおしまい。

再び皿をしまいながら、私は次の話題を持ち出す。

「イングリット、貴方、料理はどの程度出来ますか？」

「え？あ、お粥とか、おひたしとか、野菜スープとか、ポテトサラダとかなら作れます。あと、簡単なお菓子とかも」

「なぜ作れる料理といって一番最初にお粥が出てくるのでしょうか・・・ああ、そういえば貴方の育った家は個人病院を営んでいたのでしたね。ということは病院食ということですか」

「何で知ってるの！」

イングリット、？然。

「貴方が寝言で、自分の育った環境とか、この館に来る事になった理由とかについて物語のように滔々と語っていましたから」

イングリットのまん丸な眼が、さらに大きく見開かれた。あの語り口調からして寝たまま物語をつむぐのは初めてではないと思うのだが、どうやら本当に気がついていなかったらしい。

「まあ、それはいいとして、ケーキをつくたことは？」

イングリットの眼がいきなりきらつと輝く。そしてきらきらと・・・というよりかむしろギラギラとした目をしたまま、ぐいっと私に詰め寄る。

「ケーキを作るの？ひょっとしてチョコレートケーキ？！」

私が一步退がる。

そんな私を物凄い形相で見上げるイングリット。どうやらケーキの事になると目の色を変える性格らしい。

なんだかイングリットの意外な一面を知ってしまった気がした。

「ええ。本来は貴方と姉が帰ってくる前に作ってしまう予定だったのですが、予定などずれて当たり前のものですし、貴方と一緒にケーキを作るというのも、楽しいかもしれせん」

満面の笑みを浮かべたイングリット。果たしてイングリットは、ケーキを作るのが好きなのか、食べるのが好きなのかはわからないけれど、作って食べるのだからどちらでも変わらないだろうと思いい、私もイングリットにっこりと笑いかける。

「一緒にチョコレートケーキを焼きましょう」

そのとき、だった。

館の門が勢いよく開かれると同時に、どやどやという、閑寂な魔女の館にはふさわしくないほどの数の足音が聞こえた。

一瞬、私もイングリットも何が起こったのかわからず、呆然と門のほうを眺めて

その足音が一体何を意味するのかに気がついたときには、既に手遅れだった。

館の中にまでその足音が進入してきて、やがて銀色の鎧を纏った兵士達の姿が見えた。

「いけない！イングリット。隠れなさい！！」

私がそう叫んで、一瞬呆気にとられたイングリットが慌てて奥の部屋に入り込むよりも、

「その娘を捕らえなさい！」

という胸のむかむかするような声にしたがつて一人の兵士がイングリットを抱え上げるほうが一瞬早かった。

兵士の手から逃れようと手足をばたばたとさせるイングリットだが、大の男とイングリットでは体格が全く違う。結局イングリットの口がふさがれ、より一層強く拘束されただけで、無駄な抵抗でしかなかった。

「やれやれ、本来は王子殿下を連れ戻すためにきたのですが」

私は声の主を睨みつけるが、所詮は私も子供。そいつは何事も無いように私の視線を跳ね返してくる。

「思わぬ大捕り物、というわけですか、宰相閣下？」

私の声に、宰相は普段から鋭い目をさらに細める。

長い銀髪は背中の後ろまで伸び、まるで針金細工のようにひよる長
いからだ。眼鏡という高級品を身につけたその男に対して、今の私
はあまりにも無力だ。

（お姉ちゃんがいれば、どうとでもなったのに）

そういう思いが頭をよぎる。

「あの一瞬でイングリットの顔の上に浮かんだわずかな黒いシミを
見つけてしかもそれが忌諱すべき腐死病の証だと気がついたのはさ
すがですね、宰相閣下」

イングリットが目を見開き、抵抗を止める。

彼女は自分が腐死病にかかっていると知らなかったのだから、それ
は当然の事だ。

「それだけが、私のとりえですからね」

返事をするのも面倒だというようにそっけなく答える宰相。姉がい
ないときの私など、彼からすれば取るに足らない存在なのだろう。

このままではイングリットは殺されてしまう。宰相にとって、腐死
病が駆除で来るのなら一人の少女の命など安いものなのだ。

でもまさか宰相も今この場でイングリットを殺すようなことはしな
いだろう。ここは魔女のお膝元ともいえる館の中。魔女を敵に回す
のが下策だということぐらいは宰相にもわかるはず。だが、それは
逆に言えば、ここで私が身を引けばイングリットの死は確定する
という事。それだけはなんとしても避けなければいけない。イングリ

ットにはそれがわからないだろうから、イングリットのために何かが出来るのは、ここでは私だけだ。

姉がこの場にいないからこそわたしの発言力が弱いというのであれば、姉が帰ってくるまで時間稼ぎをすればいい。

しかし、それは不可能に近い。

宰相が王子を迎えに来るということは、あの変態王子はまたもお付の人を放り出して一人でふらふらとここまでやってきたのだらう。

姉のような不器用な人が王子ほど雄弁な方をそう簡単にあしらえるはずがないから、薬草を摘みながら帰ってくるとして、下手をすれば日没だ。悠長に待っている時間は無い。

私は、ハタと顔を上げた。

何のことは無い。宰相がイングリットを殺せないような状況を作り上げればいいだけのことだ。腐死病に潜伏期間があることは一般にほとんど知られていないはず。判断力と決断力の高さを買われて今の地位についた宰相は、そういう知識分野に限れば普通の人と大して変わりがない。

「その子供、イタカの村からやってきたのですよ」

急に話題が飛んだことに、宰相は警戒の色を見せる。

「戸籍を確かめていただければわかると思いますが、その子供イングリットという名前です。イタカの村からここまで一人で旅してきたそうです。賢明な宰相閣下ならその意味がお分かりになるでしょう?」

宰相と兵士達の顔が驚きにゆがむ。

イングリットほどの歳の子供の足でイタカからここまで歩いてくるのだとしたら、それだけで二週間はかかるだらう。一般に知られている腐死病の症状では、そんなに長い間生き延びることは不可能だ。

「姉はどうか知りませんが、われわれはその子供がひよつとしたら腐死病に対する免疫を持っているのではないかと思っています」

「……その子供を拘束して馬車に載せなさい。王都まで連れて行きます」

判断力だけがとりえの宰相は、とりあえずは私たちにとって都合のいい判断をして、館を出て行った。どやどやと、銀色の兵士達も続く。

ぷつん。と、緊張の糸が途切れ、私はぺちゃりと床に座り込んだ。これで何とか時間稼ぎが出来た。後は姉が帰ってくるのを待つて狼で追いかけてもらえばいい。人の足と狼の足だったら狼のほうがはるかに速いから、あつという間に追いついてイングリットを取り返す事ができるだろう。

私に出来るのは、姉を待つ事だけだ。手持ち無沙汰になってしまっただが、ケーキを焼くのは後回しだ。

一緒にケーキを焼こう。

そう、イングリットと約束したから。

第三幕。魔女の妹、ロッキンツォン（後書き）

次の更新は7/10です。

第四幕。王子、イーマ

「なあ、魔女殿。聞いているのか？なあ！」

私が服を着てからしばらく、森の魔女ことハルは一人でどんどんあるいって行ってしまったて、森歩きに慣れていないわたしを全然気遣う様子を見せてくれない。それがハルなりの照れ隠しなのはわかるのだが、こうもそっけない態度をとられると、知らない人が見たらまるでハルが私の事を嫌がっているかのように見えてしまうので止めてほしい。

まあ、そんなハルも愛らしいからといって、許してしまったている私も同罪なのだが。

「な～あ、魔女殿」

「・・・・・・・・」

「まっじよどのっ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「まっじよどのっ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「魔女殿」

とことん無視をされている。私はハルとおしゃべりをしたいしハルも絶対そうであるはずなのだが、ハルの場合その欲求は恥ずかしさで隠されてしまっている。

とりあえず、楽しいおしゃべりのためには目の前の女をふりむかせなくてはいけない。

私は固い決意をこめて、ぐっと手を握り締めた。

幸いな事に私はこの女の目を私に向けるステキな魔法を知っている。

ただ、これは本来最終手段だ。

あまりに効果絶大すぎるので、普段は使わない事になっている。

ぴた。と私が足を止めて俯くと、気配でそれに気がついた魔女が怪訝そうにこちらを振り向く。

私はハルのことを、捨てられた子猫の視線でじいーと見上げた。

思わぬカウンターアタックに、冷やかな表情を浮かべていたハルが大いに怯んだ。

「……………」

じいーと。

「……………」

ただ、じいーと。

「……………」

ひたすらにじいーと。

ハルが目を逸らした。

勝った！

こほんっ。と、ごまかすように咳払いするハル。

「ええーっと、殿下。私としては殿下には早いところお帰り頂きたいのですが、まあさすがに貴方を一人でほっぽり出すわけにも行きませんし、貴方が振り払ってきたという宰相閣下以下お付の方々が到着するまでの間、森の館で休息をとることを認めます」

「素直に、私と一緒にいたいといったらどうだ、魔女殿？」

まったくもう、素直じゃない！
そこが、ハルの魅力なのだが。

「…………お付の人たちは、どこで振り払ってきたの？」

その間は一体何なのだろうか！？
まあいい。ハルの口調がフレンドリーなものに変わっただけでも、私は十分幸せだ。

「ここに一番近い村だが、それがどうかしたか？」

なぜだか知らないが、ハルの顔がほっとしたものに変わる。むしろ、どこまでも続く闇の中に一筋の光明を見い出した感じ。

「それじゃあ、一日ぐらいあれば追いつくわね」

ああ、なるほど。ハルはひよっとしたら少ししか私と一緒にいられないのかと気を揉んでいたのか。一日は確かに長くは無いが、決して短くも無い。

一緒にいたいにもかかわらず宰相たちが来たらすぐ帰ってくれなどと照れ隠しをして、なんてかわいいのだろうか、私のハルは！
だが、残念なお知らせがある。

今回、私は少しでも長い時間ハルと一緒にいたかったので馬車を使つてここまでできたのだ。当然付き人たちも馬をあてがわれているし、宰相の目を逸らすためのおとりとして私の馬は付き人ともども村においてきてしまった。今頃は私の不在に気がついた宰相たちが魔女の館についているかもしれない。

私は歩調を落とした。ただでさえ慣れない森の中で歩きにくいところに、さらに意識してペースを落とすのだから亀の歩みのようにゆっくりな動きになる。もう照れ隠しに私を無視する事も無いらしく、ハルも私と歩調を合わせてくれた。館に着くまでが、私に残された幸せな時間だ。

こういうとき、時間がゆっくりと過ぎてくれればいいと思う。ゆっくり、ゆっくりと。

「ところで、コスモスはどうしているの？やっぱりあのやんちゃは変わらない？」

暫く他愛の無い会話をした後、魔女殿は不意に思い出したように聞いてきた。コスモスというのは、あの宰相の娘で私の許婚の事だ。

「ああ。全く困ったものだよ。しょっちゅう侍女の目を盗んで城下町に出ては夜まで遊びほうける。仕事をすれば優秀なのに、その才能を仕事をサボる方法にばかり忌憚無く発揮させる。父親があれだけ堅物なのに、一体誰に似たらあんな性格になれるのだろうか」

私が溜息をつく、共感したのかハルも盛大な溜息をつく。憂いを帯びた表情のハルに私が見とれていると、私のほうを見たハルが再度大きな溜息をついた。

「確か、あなたは鏡を持っていたわよね」

「うん？」

急に話題が変わった。

「まあ、王族というだけあって一応金だけはあるからな。魔女殿は持っていないのか？透貨一枚ぐらいの値段だが」

金属をこれでもかというぐらいピカピカに磨き上げる技術は、この国には無い。だから鏡は全部フェリントーナからの輸入品だ。

ちなみに透貨というのはダイヤモンドを削って作られた貨幣だ。国と国との間での商品取引は時にとてつもない額になってしまったため、到底重くてかさばる金貨などではやってられないという事で作られた信用貨幣なのだが、金属製の貨幣と違い、形や大きさがまちまちのダイヤモンドの原石を削って全く同じ規格を作らなければいけないというのは非常に困難を伴い、そのため透貨の値段というのは非常に高いものとなっている。

具体的に言くと、金貨一万枚で透貨一枚。

それこそ、透貨が百枚もあれば国家予算が賄える。

透貨を造るフェリントーナがその技術力だけでどれだけ甘い汁を吸っているかというのが伺える。

でも、ハルほどの収入があれば、鏡ぐらい持っていてもおかしくは無い。

「私は生憎。そういった外来品を買うツテがありませんもので。とにかく、鏡をもっているならば一度覗いて御覧なさい。コスモスさんが誰に似たのかわかるから」

よくわからなかった。

鏡はあくまで己を映すためのもの。それを覗いたところでコスモスが誰に似たのかという問いの答えが返ってくるわけではない。

「魔女殿の言っている事は、複雑過ぎるぞ」

私は苦言を申し立てた。

「似たもの夫婦ってことですよ」

やっぱり意味不明だった。

どんなにのろのろ歩いてても、歩けば前に進むもの。

あつという間に、魔女の館が見える場所まで来てしまった。

長い歴史の中で、魔女の館が出来るまでの経緯というのは忘れ去られてしまったが、この色とりどりの館は、どう見ても悪趣味だと思う。

赤、青、白、黒、黄、紫、茶、灰、橙。

木々に囲まれている事を考慮したのか緑だけは使われていないが、森の中にあつてそれは異彩を放っている。

構造はのっぺりとした平屋根造。一見住み難そうにも見えるが、階層式に地下に広がっているため案外住み心地はいい。

と、そこで妙な事に気がつく。

馬が、一頭もないのだ。

ハルが家畜の類を好まないのは知っているが、宰相たちはここまで馬で乗りつけたはずだ。奴らは私が館にいと踏んでいるはずだから、私が馬の嘶きに気がついてこっそり逃げ出さないよう馬に猿轡をかませていたにしても、これはおかしい。

まだ奴らが到着していないのか、あるいは

（とつくに到着して、私を捕まえるための罠をしいたか）

あるいは事情が変わって、一度この館に來た後私を置いたまま王都に帰ったという可能性も無きにしも非ずだが、そんな都合のいいことは無いだろう。仮にそうだとしたら、何が起きたのか私に伝達するために伝兵の一人ぐらいは残しているはず。よもや透貨のような高価なものを運搬しているのでもあるまいし、伝兵一人分の人員も割けなかったということは無いだろう。

「妙ね……………」

ふと、私の横にいたハルも呟いた。

「臭いがしないわ。ロッキンツォンは私たちが森の散策をしている間にケーキを焼くような事を言っていたのに」

ふつ。と辺りが暗くなった。一瞬遅れて、私たちは夕日が沈んだのだと認識する。

おかしい。何かがおかしい。

頭ががんと警鐘を鳴らす。急がなければいけないと本能が叫ぶが、何を急がなければいけないのかわからない。

暗くなって、魔女の館もその様相を変える。

派手な色で塗られていた外壁はのっぺりとした灰色に染まり、冬の前にして枯葉色になった芝生は人のいなくなった廃墟を思わせ、なめした動物の皮を張った薄暗い窓からは、本来もれてくるはずの生活の灯りがもれてこない。

ハルの足が、私を気遣う事を忘れかようにだんだんと早くなる。なだらかな道になったため歩きやすくなった私の足もそれにつられて

加速して

玄関のドアを開けたとき、まるでそれが合図だったかのようにポツと灯りが灯った。

思わず安堵の溜息をつき、ハルと顔を見合わせる。

根拠も無く早とちりした事にお互い苦笑しながら、私はわずかに胸の中に残っている不安をそつと払拭した。

と、何の前触れも無くロッキンツォン顔を出した。

「あ、お姉ちゃん、お帰りなさい」

おそらくはこれが姉の前でだけ見せる素の表情なのだろう。ロッキンツォンはいつもの馬鹿丁寧な口調ではなく、幾分砕けたしゃべり方だ。

それにしても、普段ロッキンツォンはハルのことをお姉ちゃんと呼んでいるのか。

だとしたら、将来私はロッキンツォンになんと呼ばれることになるのだろうか？

？お義兄ちゃん？・・・・・・か？

（それはなかなか、悪くない）

「お姉ちゃん、すぐに狼を呼んでくれる？」

思わずにやけた私を無視してロッキンツォンはいたってまじめな顔で言う。

「イングリットが宰相閣下に攫われたの。狼で追えば簡単に追いくでしょっ？」

「あ・・・・・・・・・・・・・・・・」

ガツンと、拳で頭を殴られたような衝撃。

宰相が腐死病の少女を見れば、どういう反応をするのかなど目に見えていた。

適当に人気の無いところに連れて行って殺そうとし……いや、殺したのなら宰相たちがここにいない理由がわからない。それにロッキンツォンだって、腐死病の少女がどういう扱いを受けるかはわかっているだろうから、殺されるのだとしたらこつも落ち着いていられないだろう。

恐らく、腐死病の少女がこつも長い間生き残っている理由を調査しようとして、王城に連れ帰ったのだ。

私が来るときに乗っていた馬車ならば気密性が高いし、腐死病は空気感染で伝染する病気だ。城についてからも、人気の無い牢屋の密閉性を高めて閉じ込めておけば、感染の可能性は考慮に入れなくていいぐらいに低くなる。

ロッキンツォンの態度からして、腐死病の少女を城に連れ帰るように仕向けたのは彼女の入れ知恵だろう。彼女は、魔女が帰ってきてから狼で追いかけても十分間に合うと思ったのだ。私が魔女の館に来る時は、大抵徒歩だから。徒歩の人間になら、飼育されていない野生の獣でも簡単に追いつけると思ったから。

都合がいいなんてとんでもない。

途方も無く、都合は悪い。それこそ、運の悪さは数え上げたら切が無いぐらいだ。

たまたま、馬で来ていたこと然り。

私が館にいたと思った宰相が、馬の嘶きを抑えるために猿轡をかませていて、そのせいでロッキンツォンが馬の存在に気がつかなかった事然り。

透貨よりも貴重な観察素材を運ぶために、宰相が伝言兵すらも割かなかったこと然り。

宰相が館にいたと思い込んだ私が、張ると一緒に居る時間を少しで

も稼ごうと館に帰るまでの時間を引き延ばしたこと然り。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

馬の速度ならば、ここから城まで半日だ。速度においては狼が勝つていても持久力においては馬が勝る。いくらハルでも、物理的距離と速度だけは覆せない。

「・・・・・・・・」

私は、ハルの服の袖をつまんで、謝った。

謝罪は後で聞くといいて狼に乗り込もうとした魔女に、現状を説明した。

魔女の顔が、今までに見た事が無いほど鋭いものになった。

とりあえず私は準備をするから、貴方は狼に乗って追いかけなさい。城に着いたら、イングリットのために可能な限りの手を尽くしなさい。

そっというハルに急ぎ立てられて、私は狼と共に闇夜を疾る。

一体何の準備をするのか、それを聞く資格は私には無い。

ただひたすらに、ハルのために駆けるだけだ。

第五幕前半。王子の許婚、コスモス

何日かぶりに街に出てみると、晩秋ならではのこたごたとした通りが目に入る。もう肌寒い時期なのにむわっとした熱気が立ち込めているのは、そこで働く者たちの活気のせい。この時期は地方で収穫された穀物を運ぶための荷馬車で町中ごった返している。

わっちは市井の町が好きで、よく城下町に繰り出す。そのせいで侍女にこつぴどくしかられる事もしょっちゅうだが、それだけの魅力が市井の市場にはある。

「婆、鳥の串焼きを一本じゃ」

わっちがそういうと、顔なじみの婆は「またですかア」という顔をしながら串焼きを渡してくれた。城を抜け出すたびに個々の串焼き屋に顔を出すので、今ではすっかり常連になっている。

「婆、何か最近、面白いことはないか？この時期だから旅芸人が来たりとか、してるだろう」

麦商人は勿論の事、冬になる前にいろいろなものを揃えておこうという地方からの人であふれるこの時期、そういった人たちを狙った旅芸人やら、珍しい品物売る土産物の露店なども立つ。だから、わっちはそういったことにやたらと詳しい婆に尋ねたのだ。

「そうですねえ、今年はイタカからの穀物が無いせいで少し閑散としていますからねえ。もう暫くはそういった旅芸人たちも来ないのではないかと思いますよオ」

やたらとおつとりした口調は婆ならではの。

イタ力というのは毎年王都の穀物需要の大半を賄っていた村の名前だが、少し前に腐死病で滅びてしまった。

もちろん、そこで取れた麦も焼き払われてしまい、一時期、軽い食糧難に陥って国の上層部は対策に追われていたらしい。らしい

などというと、侍女あたりから「他人事じゃありません」などといわれそうだが、わうちにとっては他人事だ。わうちにとって大切なのは自分の目の前にあることだけで、行った事もないし知り合いがいるわけでもない畑だらけの村の住人がいくら死んだところで心が痛みようも無い。

「あー、そーでしたそーでした」

ふと、婆が思い出したように言う。

「ここから少し裏路地に入ったところに、ほら、酒屋があるでしょ」

ふんふん。酒屋で何か面白い事があるのだろうか。

「その酒屋の裏口を抜けて、真っ直ぐ進んだところのオ、突き当りをさらに右に進んだところのオ、服飾店のオ、だんなさんがア、この前亡くなつてエ、奥さんのアリスが後を引き継いだんですけれどオ、」

「・・・・・・え？」

服飾店のだんなは、わっちの顔なじみだ。城下町のことをぜんぜん知らずにふりふりの夜会ドレスで街に出てきたわっちに、街娘の服を譲ってくれたのがその服飾店のだんなだった。

（亡くなつ、た・・・・・・・・？）

そんな、死ぬような高齢ではなかったはず。持病も無かつたし、食欲は人並みはずれていた。よく奥さんと喧嘩したと言つては繁華街で全店制覇する勢いでやけ食いしていた。

（あの、おじさんが・・・・・・・・？）

いつの事だろうか、最後に話したのは。
いつだっただろうか、あの店に最後に寄つたのは。

「それでエ、その奥さんがア、服飾店のよこのオ、空き地を買い取つてエ」

婆の話はまだ続く。
いい加減まどろっこしい。

「店を建て増してエ、それで服飾店をやめて宿屋にしようとしてたらしいんですねエ」

「え、ええい、とつとと要点だけ述べんかい！聞いってだんだんいらいらしてくるじゃろうが！」

このまったりした所がこの人の味なのはわかっている。
しかし、我慢にも限度がある。
そしてわっちの沸点は結構低い。

「エー」

「なにが『エー』だっ！そんな枝葉末節まで説明されては一体どこが話の要点なのかわからんであるっ！？結論だけ言え、結論だけ！」

「それじゃア、その『酒の魔術師』がア」

「結論だけ言われてもわからんであるっが！酒の魔術師というのは何者だ！」

「でもオ、コスモス様が結論だけ言えとおっしゃったんですしい。噂というのはあ、要約したり枝葉末節を省くから尾ひれがついてしまっんですからア、少しぐらい時間をとったとしてもオ……」

「ま、待て。ちょっと待て」

わっちは婆の言葉をとめて周りを見回す。どうやら侍女はまだこの付近にはいないようだ。城に連れ戻されるのは暫く後になるだろう。

「ええい、いいだろう。枝葉末節まで付き合っちゃる。婆、串焼きのお替りじゃ！」

わっちは景気よく言い放った。

要点だけ言っと、服飾店の横の空き地に、水を酒に替えてしまおうという奇妙な男が居座っているという事だった。魔法などあるわけが無いのだから絶対に詐欺の類なのだが、いろいろ言ってその酒を高い値段で売り捌いて法外な金を手に行っているらしい。

はなはだ許しがたい。ここは国王のお膝元とも言える王都。そのよ

うな詐欺師の居座っていい場所など裏路地にすらない。

（わっちがじきじきに裁きを加えちやる！）

そう息巻いて向かった件の空き地には一体何事かというぐらいの人だかりが出来ていた。

その威圧感に一瞬ビビった後、わっちは腹をくくってその局地的過密現象区域に飛び込む。

（ええい、どかんか。このっ）

両手で泳ぐように人垣を掻き分けて前に進んでいく。わっちの身分とか立場とかを述べれば手っ取り早く道を作れるのだが、相手の詐欺師にも警戒心を与えてしまう。それでは意味が無い。

「こちらの酒は、万病に効く薬ともなり、死者をも生き返らせたとされる生命の酒。香りたつ果実の香りは奇跡の香り。さあさ、来て見て、買って行くことだよ」

漸く、ベタベタな売り文句が聞こえてきた。そしてすぐに、黒い服を全身に纏った男が、ぼつかりと出来た空洞の真ん中に座っているのが見えた。この男が、婆の話していた酒の魔術師だろう。酒の魔術師の見世物はちょうど今始まったようで、彼の前に置かれた手桶には水がいっぱいに張られている。

「さあさ、この水にご注目。今からこれが果実酒に早代わりするかね」

そういつてポケットから丁寧に折りたたまれた紅い布を取り出す魔術師。

（ああ、なるほど。考えたものじゃな）

一瞬、わっちは不覚にも感動した。

酒の魔術師の使っているトリックが解かった。べらぼうな値段で売りさばいているといっても、仕入れ値を考えれば妥当な値段といえた。口八丁手八丁で売りさばいても、これなら大して利益が出ないだろう。

（なれば、種を暴いて、晒し者にする事もあるまい）

自分の言動がどれだけの効果を持っているのかは理解している。場合によっては、許婚のイーマにまで迷惑がかかってしまうだろう。

王族にとつて人望を失うことは命を失う事に等しい。イーマもわっちに負けず劣らず無鉄砲な性格だが、それでも王子だ。自分とは違い、いろいろな気苦労も耐えない。わっちは無力で、イーマを影から支える事もできないけれど、それでも足手まといにだけはなりたくない。

それにわっちは王都内の不正を正そうと思ってここにきたのであって、そこにいるのが単なる商人ならばわざわざ揚げ足を取ってその商売の邪魔をするつもりは無い。ここにきたのは、己の観察力をひけらかして自己満足を得るためではない。

・・・ちよつと悪人をからかつて退屈しのぎをしてやろうとか、そういうことは全然思っていないのじゃ！

「・・・なんじやろうか、この、言い訳をした後のような居心地の悪い罪悪感は・・・」

わっちが一人ごちて、人ごみを後にしようとした、その時

「買っわ！そのお酒、全部頂戴！」

まるでこらえていた言葉を一気に吐き出すような叫び声が、わっちの後ろから聞こえた。

わっちはその声に聞き覚えがあった。それは、とある服飾店を影から支えていた、気丈な女性の声だった。

酒の魔術師が、のそりと顔を上げる。黒く、よどんだ目をしていた。

「全部、ねえ。いいよ、それも。でも、払えるの？即金で、金貨千枚」

一言一言、言い聞かせるようにする酒の魔術師。その言葉は魔法のように周囲に響き渡る。

服飾店主人の妻、アリスが躊躇したのがわかった。金貨千枚というのは、そういう金額だ。

「生命の水って言うぐらいなんだから、そのくらいの値段じゃなきゃ割に合わないでしょう？」

（そうか）

生命の水、死人を生き返らせることすらも出来る水。そんなものがあれば、真っ先にそれをほしがるのは最近大切な人を亡くしたものたちだろう。

アリスは気丈だ。どれだけ辛くても齒を食いしばって、周りには何事も無いように振舞う事ができてしまう。そうやって我慢して、胡散臭い詐欺師が店の横に居座って嘘としか思えない命の水なんてものを売り出しても、死んだ人は生き返ることが無いのだと自分に言い聞かせて我慢してしまう。

我慢して、我慢して、我慢して。

水が酒に変わるのを見ても、奇術だと自分に言い聞かせて。その酒が飛ぶように売れているのを見ても、皆がだまされているだけだと信じて

限界が、来た。

自分はそんなものに頼らなくても、一人でやっていけるのだと、自分の旦那が死んでも耐えることができるのだと、自分自身をだまし続ける事に、限界が来た。

（これが、酒の魔術師の手口だったわけじゃな）

生命という言葉に後押しされて、アリスが口を開く。

「店を抵当に入れば、そのくらいのお金は簡単に手に入るわ」

酒の魔術師から見て、アリスの今の姿はどう映るのだろう。こいつは、悲しみを受け止めてこらえようとするアリスに蛆虫のようになり、アリスのことを何も知らず、知ろうとせず、亡き夫の亡霊に執着して蘇りを妄信する、滑稽な未亡人の財産を吸い尽くそうとしている。

ぷつんと、わつちを押さえていた何かが切れて、胸の奥底から熱いものが湧き上がった。

それは、イーマや婆や父に対してあふれ出すのとは真逆の感情。

暗くてどろどろした、おぞましいもの。

殺意すらももった、憎しみだった。

イーマのことが頭をよぎる。

あの、変態で心優しい王子に、迷惑はかかるだろうか？

（そんなこと、どうでもいい）

わっちの沸点は結構低い。いつもは怒り出しそうになっても、イー

マの面影が頭をよぎってわっちを諫めてくれるが、今日だけはイマも役不足だった。

わっち自身が、この怒りに身を投じたいと強く願っていたからだ。未練がましく脳裏をよぎるイーマの影を心の外に追い出す。

（イーマ、すまぬがな）

最後に、謝罪する。

（あの男を許したら、わっちは、大切な人たちへの気持ちにうそをつくことになるんじゃない）

ごうごうと耳鳴りがするのは、猛る血潮のせいだろう。

「待ちんしゃい」

酒の魔術師のほうを向き直ってわっちが一步步み寄ると、周囲の目が全部わっちに集められた。

いつもならその視線に心地よさを感じるところだが、今はそうも言っていない。怒りに身をゆだねつつも、怒りにおぼれてしまわないように全神経を使わなければいけない。感情に任せて殴りかかってはいけない。それで切り傷ぐらいはつけられるかもしれないが、こいつは切り傷が癒えて無くなるころにはまた同じことを繰り返すだろう。

とことんまでこいつを貶めて、可能な限り辱めるには冷静でいなくてはいけない。

（考える）

考える。才媛といわれたその知恵を、この男を晒し者にするためだ

けに搾り出せ。

「アリス、その薬で旦那が生き返ったとしても、店がなくなっていては路頭に迷うであろうが」

とりあえず、アリスを何とかする。酒の魔術師ごとき低俗な詐欺師にだまされていたのだと知れば、アリスは癒しようも無いほどの深い傷を心に負うことになるだろうから。

「わっちも、行きつけの服飾店がなくなつては困る」

ちよつと苦笑してみせながら本心を言つてみた。服飾店は王都に沢山あるが、この服飾店だけは、特別な存在だから。

暗に、おじさんの思い出が詰まつた服飾店を辞めないでほしいという思いをこめて。

「じゃから、そ奴とはわっちが話をつける。アリスは店で待っておれ」

アリスが眉をしかめる。何か言おうとするより前に、わっちが口を開いた。

「ライヒビ王国王子、イーマ・ライヒビの許婚としての、これは正式な命令じゃぞ」

あえて、いつもおじさんに言っていたのと同じ言い方をしてみた。わっちはこう言つて我俣を押し通してはおじさんを困惑させていた。周囲がどよめく。結構わっちの名乗りの効果は大きいようだ。

「それと、服屋がいきなり宿屋なんぞやったところで人が入る訳が

無いじやろつ。アリスの飯の不味さはわっちが保障するぐらいじやからな」

立ち去ろうとしたアリスの背に、そう声を投げかける。相手に聞こえるように、けれども独り言のように。

アリスなら、これだけ言えば立ち直れる。旦那の面影を、命の水などではなく共に過ごした服飾店の中に見い出して、それを頼りに生きていける。

「次は、おぬしの番じゃが」

アリスがいなくなったのを確認して、わっちは酒の魔術師のほうに向き直った。

いったん飲み込んでいた憎悪の感情をもう一度吐き出す。けれども今度は、簡単に自分を制御する事ができた。

「わっちはどうしても解せんのが、ぬしは水を酒に変えるという売り文句で酒を売りさばいているのに、先ほどから見えて主が水を持っている様子は無い。何でじゃ？」

「な、何を言うのかな？水ならほら、この桶に入っているじゃないか」

そういつて後ろに詰まれた桶の山を示す詐欺師。

「ほう、それが水じゃったか。しかしわざわざここまで水を汲んでこなくても、王都には公共の水路が沢山ある。どうせならそういう水路のそばに店を構えたらよからう」

わっちが衆人観衆の中指摘すると、詐欺師は怯んだように顔をしか

めた。「確かにそれもそうだ」という囁き声が聞こえる。

「……いや、わっちに指摘されるまで本気で気づかなかったのか、こいつら。」

まあいい。人を疑う事を知らない純粋な奴らなのだと思い込む事にしよう。

「それはそうと、わっちはちと喉が渴いてな。酒はいらんから後ろの水を飲ませていただきたい。案ずるな。後で飲んだ分ぐらいの水は汲んできてやるから」

「いや、そ、それは………」

「清酒でもあるまいし、王都において水が高価なわけがあるまい」

ぴしやりと指摘してやった。すっかりおびえきった詐欺師が「ひつ」と情けない声を上げる。
そう。

『酒の魔術師』の使っているからくりは簡単。

清酒を張った桶を用意し、水だと偽った上で布にくるんだ染色料の粉をこっそり混ぜているだけ。清酒はそもそもこの国の酒ではないから観客の中にそれと気づける人はいないだろうし、ごたごたとした町の中では酒の臭いは他の臭いにまぎれて薄くなる。

ただ、清酒の値段は高い。他国から輸入してくる費用と、詐欺がばれて投獄されるリスクを考えれば利益は薄い。人をだましていたのが事実でも、こいつがつけていた値段は清酒としては妥当なものだ。この詐欺師が明らかに法外な値段をつけたのは今この瞬間、アリスから店を奪い取るうとした瞬間だけだった。

（もっとも、最初からそれだけが目的だったのじゃろうがな）

奪い取った服飾店を誰かに転売し、自分はその利益を手にして闇へと消える。

「清酒は、米という穀物から作る水のように澄んだ酒じゃ。もともとからこやつは水を酒になど変えていないのじゃよ！」

傍観者どもに説明する。敗北を悟った詐欺師が逃げ出そうとするが、そのうちの一人に取り押さえられた。

ごっつい腕に拘束された詐欺師が、抵抗できない猫のようにわっちの前に連れてこられる。

「貴様の罪は片手の指では足りぬほどある。一つ。清酒を命の水と偽って売ったこと。一つ。空き地を不法占拠したこと。一つ。届出をせずに無断で店を構えた事。一つ。酒の売買に際し酒税を納めなかったこと。一つ………」

わっちは詐欺師の罪状を一つ一つあらためる。

抑揚無く言うわっちの声に、詐欺師はだんだんとうなだれていく。頭をたれているのは、己の罪深さを悟ったからではあるまい。

「そして、おぬしの犯した最も大きな罪は、わっちの友を貶めようとした事じゃ！」

わっちは、決め台詞を言うためにいったん言葉を区切る。

「貴様など、詐欺師の鏡じゃ！」

……む？

なんか、ちよつと違うことを言ったような気がする。

神妙な顔でわっちの言葉を聞いていた周囲の者達が一斉に「は？」

という顔をした。

「え、ええい。そ奴を警備隊に突き出せ！」

・・・無理矢理押し切ることにした。

第五幕前半。王子の許婚、コスモス（後書き）

コスモス登場。一番好きなキャラです。

第五幕中盤。

詐欺師が連れて行かれた後、わっちが人垣を離れようとしたらばちばちと拍手が聞こえた。その視線を追うと、笑顔を浮かべた侍女と目が合う。

「お見事でございます、コスモス様」

「うむ。我ながらよく立ち回ったと自負している………って」

わっちは侍女を見た。

今頃、わっちを探して町中を走り回っているはずの侍女を。

「あー。主が一体何者かは知らぬが、わっちはコスモスという名ではないぞ。そうそう、先ほどわっちによく似て美しい金髪の可憐な少女が大通りで鳥の串焼きをほおばっているのを見かけたぞ。人探しならそこらへんを探してみたらどうじゃ？」

「ええ。たしたにコスモス様は大通りにいたでしょうね。実は私も串焼き屋のお婆さんに貴方のいる場所を聞いてきたんです」

とつさに誤魔化そうとしたわっちに侍女は満面の笑みを返す。

この侍女は怒っているときしか笑わないのだ。

「くっ。よもや婆が敵に回るとは思っておらんかった………油断した！」

裏切りは国をも滅ぼす。わっちは敵に回ったかつての戦友^{とも}に涙を流しながら、戦線離脱をしようとして

「その人を捕まえなさい！」

鋭い侍女の声で反応した周囲の人々に捕まえられた。

ごつつい腕に拘束されたわっちは、抵抗できない猫のように侍女の前に連れてこられる。

「わっちは何も悪いことをしてないぞ！ええい、放せ、わっちを自由にしろ！ライヒビ王国王子、イーマ・ライヒビの許婚としての、これは正式な命令じゃぞ！？」

怒鳴り散らしてみるが一向にその腕は離れようとしない。

「あきらめてください、コスモス様。叫んでも助けなんて来ませんよ」

「何じゃその悪役のような台詞は！……ぬしらも傍観しとらんで助けんか？！」

わっちが叫ぶが誰も助けようとはしない。かつぽかつぽと馬車が道を走っているが、特にわっちたちに関心を示さずに通り過ぎていつてしまった。その後ろに続く馬に乗った兵士達も硬い表情のままわっちをあえて避けるように進んでいく。

「コスモス様。みなさんは、私に逆らう事がどういうことか本能的に理解しているのです。底知れぬ恐怖と共にあるこの方たちに今の貴方の声は届きません」

「き、貴様、魔王か何かだったのか！？」

愕然とするわっち。

と、そのとき先ほどわっちたちの前を通り過ぎた馬車が止まって人が飛び出してきた。

ばあつ。とわっちの顔が明るくなる。助けがきたのだと思ったからだ。

「えーい！放せ、あたしを自由にしろ！」

だが、馬車から出てきた人影、もとい少女はついさっきわっちがはいたのと同じような台詞を吐くと、すぐにこっつい兵士に捕まって再び馬車の中に放り込まれた。

暫し、きよとん。

突然現れて突然去っていった馬車に、わっちは視線をむける。

（あの少女、顔が黒かった）

顔の右頬の部分が、まるで腐ったような色をしていた。顔が黒い人間の話など聞いた事も無い。

それに、あの少女は両手に枷をはめられて目隠しまでされていた。

あれがイーマだったというなら解せる。城を抜け出したイーマが手枷をはめられて宰相に連れ戻されるのはいつもの事だからだ。

だが、突然の事態に啞然としたのはわっちだけだった。その間にこっつい男から侍女に引き渡されたわっちは、ずるずると城のほうへ連れ戻されようとしていた。

「なっ！いつのまに！！ええい、放せと言っておろうが！おぬし、女の癖に何でそんなに力があるんじゃ！？」

ずるずるとわっちを引きずる侍女の力は思いのほか強かった。

彼女の体格からは到底これだけの力が出せるとは思えない。女性が

筋肉をつけていいことは何も無い。

「いつもこうしてコスモス様を連れ戻している間に筋肉がついてしまったんです。コスモス様が悪いんですよ？」

なぜか疑問形で責められるわっち。

わっちの叫びもむなしく、やはり助けてくれる善良な市民はいなかった。

コスモス様はそこで暫く頭を冷やしててください。

侍女にそういわれて部屋に閉じ込められてしまった。ご丁寧にドアには鍵までかかっている。

失礼な！！

これではまるで目を放したらわっちがすぐどこかに遊びに行ってしまうような無責任な道楽者のようではないか！

……まあ真実なので怒りもわいてこないが。

やる事も無いのでベッドに寝そべる。

いま、脳裏を占めるのは馬車に乗っていたあの少女の事。今から思い返してみると馬車の後ろに続いた兵士の中にわっちの父である宰相の顔が混じっていたような気がする。

あの少女は何者なのだろうか？

（悪人、という雰囲気ではなかったが）

第一、それだったら出張ってくるのは城の兵士ではなく警備隊の連中のはずだし、囚人を護送するのにあんな立派な馬車は使わない。そもそも、父は王子と共に魔女の館に向かったはず。あと何週間か帰ってくる予定は無い。

（謎、じゃな）

わっちの口元がきゅっとつりあがる。こんなに面白い謎に出くわしたのは久しぶりだ。

胸が高鳴るほどの快感。今すぐにあの少女と話をしてみたい衝動に駆られた。

（楽しい。楽しいのに、なぜ！？）

何故、わっちはこんなところで閉じもめられておるのじやろうか！ベッドから降りて窓を開けてみるが、ここは三階。フェリントーナ帝国から輸入した高層建築技術によって建てられた城は、こういうときわっちに歯痒い思いをさせる。そもそも標高の高いところに立てられているため、ここからの見晴らしは絶景なのだが今はそれを眺める気にもならない。

再びドアに近寄ってみてチョイチョイと鍵をつつく。ちなみにこの鍵もフェリントーナ製。石と木でできた鍵のようにカーテンレールでぶっ叩いて壊すことは出来ない。

「これじゃからフェリントーナは嫌いなものじゃ。鍵がなくては開かない扉など造ってどうするというのじゃ」

侍女あたりがここにいたら「鍵がなくても開いてしまふ扉など意味が無いでしょう」と突っ込まれそうだが気にしない。

再びベッドに突っ伏そうとしたとき、窓の外から視線を感じた。つと頭を上げると、閉め忘れた窓の窓枠に茶色い子猫が座っていた。

「はて、城の猫ではないようだが」

城の猫はちゃんと管理されている。こんなところにいるわけが無いし、そもそも茶色い子猫などいなかったはずだ。

わっちは猫を脅かさないようにそっと近づいてから首をかしげた。絶滅危惧種に指定されている猫を飼えるような場所は限られている。国王の許可が無ければ飼えないことから権力の象徴ともされるし、野良猫ということは無いだろう。

「ここから一番近いところで他に猫がいるというところ……魔女の館じゃな」

だが、魔女の館でもここから大人の足で五日。そこから来たとするには少し無理がある。

と、そこで気づく。その猫が鍵を咥えている事に。

そのうえ、その鍵がこの部屋のものである事に。

わっちの眼がキラーンと輝き、子猫がひるむ。

「一体どうしてぬしが鍵を持っているのか解からんが、おとなしく渡してもらおうか」

十分後、ムギヤーという猫の悲鳴が城中に響き渡ったという。

あの少女の様子だと城の最上階の牢に幽閉されているだろうというわっちの勘は当たっていて、牢の一番奥に閉じ込められていた。城の連中はよっぽどこの少女の事を恐れているのか、わざわざ牢屋の入り口を気密性の高い金属の扉に付け替えたようだ。

「……………」

いざ少女と檻越しに相對して、わっちはかける言葉を見つけれずに困惑していた。

町で見た光景は見間違えではなかったようで、顔の右半分ほどが腐ったような黒で染まっている。それは少し吐き気すらもよおさせる色だったが、それがなければどこにでもいる普通の少女のように見える。

軽くカーブを描く麦色の髪は肩口で切りそろえられ、程よく日焼けした肌はこんがり焼けた鳥の串焼きを連想させる。

思わず涎が出た。

（旨そうだな……って、いかんいかん。そういうことを考
えに来たのではなかるうに）

横道に逸れかかった思考を慌てて修正する。

ジュルツと涎を飲み込むとその音でわっちの存在に気がついた少女が顔を上げ、慌てて壁際まで逃げる。なんだか、蛇に睨まれた蛙、というよりも猫に目をつけられた鼠のようなおびえた視線だった

「あゝ、なんじゃ、これ、怖がらんでよい。わっちは別におぬしを捕って食おうとか、そんなことは思っておらんから」

まあ、おいしそうじゃな。とは思ったけれど。

「ほ、本当に？あたしのこと、食べようとは思わない？」

「ああ。思つとらん」

少ししか。

不意に少女が瞼を下げた。

その様子は少し悲しそうだった。

「ねえ、あたしの顔、黒い？」

暫く悩むような素振を見せた後、少女はいきなりそんなことを聞いた。

わっちはまじまじと少女を見下ろす。

「黒い、というか腐ったような色じゃな。それがどうした？」

「あたし、腐死病にかかってるみたいなの」

「ま・・・・・・・・」

まさか。という言葉途中で飲み込んだ。

イタ力の村で腐死病が蔓延したのは、一月ほども前の事だったからだ。それ以来、腐死病の発生情報は入っていない。

一瞬、からかわれたのだと思い込もうとして、それから少女の瞳が真剣なのに気がつく。

「・・・・・・・・まあ、この質問はおいておこう。おぬしが仮に腐死病なのだとしたら今の病状について聞きたくも無いだろうし、わっちもそんな重苦しい話をしにきたわけではないのじゃからな。おぬし、名はなんと言っ？」

少女は、むすっとした不機嫌そうな顔で「イングリット」と答える。

「ふむ。イングリットか。神聖語で『黄金の穂』、つまりは麦穂を表す単語だな。いい名じゃ。名づけ親は誰じゃ？」

わっちがそう聞くと、名前を誉められたのが嬉しいのかちょっと気

を良くしたようなイングリットが答える。

「お父さん。まだあたしが小さいときに死んじゃったけど、旅をしながら昔の事を勉強するのがお仕事だったの」

「ほう、成る程なあ。神聖語など知っているものはほとんどおらんとっておったが、戦乱期のことを学ぼうとすれば当然必要となってくる知識じゃからなあ」

この大陸には、四つの国がある。

森国ライヒビは、国土の八割を森に埋め尽くされた緑色の国。

砂国フェリントーナは、国土の十割を砂漠に埋め尽くされた土色の国。

水国ミレイアは、国土の十割を水に埋め尽くされた青色の国。

氷国ハルファナは、国土の十割を氷に埋め尽くされた白色の国。

大陸をきれいに四分割したような国土分布は、ここ千年、全く変わっていない。

また、この世界における基本原則というのはいくつかある。

一つ。他国に一定期間以上留まろうとすると環境の違いに体が耐え切れず死に至る。

例えば、多湿な気候で育ったライヒビの人間が、乾燥した砂漠の国フェリントーナに住む事はできない。

一つ。自国だけで全てのものを賄える国は無い。

例えば、フェリントーナは穀物の需要を百パーセントをライヒビに頼っているし、ハルファナは肉の需要の百パーセントをフェリントーナに頼っている。

一つ。戦乱期に比べて、何かを欲するという人間の欲望が明らかに小さくなっている。

例えば、権力を手にするために権謀術数を廻らそうという人間はいない。「とりあえずご飯食べるのに困らないなら別に権力なんて無

くても良いや」という人間ばかりになってしまった。

一つ。宗教や神といった概念が無くなった。

例えば、死後の世界を信じている人など今の世の中にはいない。

一つ。言語が変化しなくなった。

例えば大陸のどこであつても共通語が通じるし、社会から隔絶された未開の村であつても言語に訛りは無い。

そんなルールが突如として発生し、この大陸が「平和」になってしまったのがおよそ千年前。今でもその原因を解き明かそうとするものは多いが、千年という期間は多くの記録を奪い去ってしまっている。

神聖語や古代語を勉強するのは貴族や、昔の事を勉強しようと志したもののたちだ。

「?.....ふうん? そうなんだ」

わつつちが説明すると、イングリットは始めて知ったというように小麦色の目をぱちくりとさせた。

「なんじゃ、おぬし、自分の父親が調べていた事の内容も知らなんだか」

「あたりまえよ。だつてお父さんとお母さんが死んだのつて、あたしが四歳のころよ」

少女はさらりと両親の死を口にした。どうやらそのことはイングリットの中ではあまり悲しい事ではないらしい。

(いい人たちに囲まれて育ったという事じゃろうな)

両親の死の悲しみを忘れさせてくれるぐらいいい人たちがイングリ

ツトの周りには集まっていたのだろう。そうでなければ両親が居ない悲しみは心に重くのしかかる。

だったら、そんな環境で育ったイングリットもいい子に違いない。ただ、イングリットが腐死病だということはイングリットがイタカの村で育ったという事に他ならない。親が死んだときは村の人間の励ましで立ち直ったのだろうが、村の人間たちが死んだ今、誰がこの少女を励ますというのだろうか？

「それじゃあ、お父さんはどうやってお金を稼いでいたの？勉強をしているだけでお金って稼げるの？」

「いや、勿論ただ勉強をするだけでは稼げんよ。そういう昔のことに興味のある貴族や王族に雇われていたか、調査の過程で立ち寄った村々で商いをしたり、地方の子供たちに教育をしながら旅をするというのが一般的じゃな。要するに、千年前に何があつたのを解き明かして戻りたいのじゃよ。戦争だらけの剣と流血の時代に」

イングリットが眉をしかめた。どうして平和なのに戦争などにあこがれるのか理解できないのだ。

「簡単に言えば怖いのじゃよ。同じ人間同士ならば言葉が通じて、言葉が通じなくても戦えば決着がつく。じゃが、今の平和は明らかに何者かの干渉によって生み出されたものじゃ。それが神じゃとは思わんが、神の様な力を持ちながら神で無いというのは神なんぞよりもよっぽどたちが悪い。戦う事すらも出来んのじゃからな。解かるじゃろう？努力してもどうにもならんことがどれだけ恐怖か」

イングリットは解からないように首をかしげる。目に見え無い敵も居ると言うのが理解できないのだ。

「この世界の歴史が、誤った歴史、つまりは誤史ごしと呼ばれるゆえんじゃよ」

「誤史？」

「正規の進化をしていない、神やそれに類似したものに干渉されてしまった間違った世界の事じゃ。もっとも、」

今を生きるものたちからすれば、間違った歴史だろうと正しい歴史だろうと関係ないじゃろうがな。と、そういつてわっちは言葉を切った。

イングリットの顔を見るに完全に理解しようという努力を放棄していたからだ。

わっちは「ちと話が逸れすぎたな」といつて苦い笑いを浮かべる。

ふと、わっちはまだ名前を名乗っていないのを思い出した。

ここまで話し込んでおいて、それは失礼だろう。

「名乗りを上げよう。わっちの名は、ナタリエル・テリテマ・ゲンテリリエール・トマコ・チェミエンス・ニヤマラ・スズラヒ・レノハ・コスモスと申す」

「……長いよ」

イングリットの突っ込みにわっちは苦笑した。

「わっちの故郷の町には名前を受け継いで継ぎ足していく伝統があるらしくてな。解かりやすく言えば、親の名前に新しい名前を継ぎ足して子の名前を作るのじゃ。じゃからわっちの名前は一番最後についたコスモスの部分じゃな」

ちなみにこのような長い名前を持つ文化は国中探してもわっちの故

郷の村にしかないようだ。逆に言えば感心するほど長い名前の人間が居ればほぼ間違いなくわっちの村の人間だという事だ。

イングリットの村はどんな村なのかと聞こうとして、すんでで思いとどまった。気になるといえば気になるが今聞くのは逆効果だろう。腐死病という単語が出たからにはイタカの村の住人なのだろうし、イタカの村の住人ならば故郷の話などしたくないだろう。

（ああ、この大陸のどこでも共通する事が、もう一つあったな）

わっちは心の中で呟く。

腐死病は、この平和な世界にあって常に死の恐怖を忘れる事ができない四国共通の問題だった。

第五幕後編。

最初の日は、そんな感じで自己紹介と世間話で終わった。二日目はほとんどわっち一人が喋って終わり、三日目に漸くイングリットがここに閉じ込められている理由を聞き出せた。腐死病にかかりながら三週間近くも生きながらえているということは常識では到底考えられなかったが、その実例が目の前にいるのだから信じるしかないだろう。

そして四日目。つまりは今日、わっちがイングリットを訪ねると、イングリットは泣きはらした顔をしていた。

「な、どうした、イングリット！」

わっちの声に反応して、イングリットが涙の跡の残る顔を上げる。慌てて檻越しにハンカチを差し入れてイングリットの頬をぬぐうと、イングリットの顔がくちゃっと歪んだ。

「夢を、見たの」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「村が兵隊に囲まれて、油をまかれて焼き払われる夢だったの。実際にあたしはその場所に居たわけじゃないのに、なんだか物凄くリアルで、ああ、帰る場所が無くなっちゃったんだア。って解かっちゃったの。あたし、実は腐死病に汚染された村は人の手で焼き払われるってことすらも知らなかったんだよ。あたしをここに閉じ込めた兵隊さんたちが言っているのを聞いてはじめて知ったの。なのに、夢に見たの。ロコさんも、エーマさんも、ヨビッツも、コルさんも、おかみさんも、みんな焼かれて死んでいくの。熱い熱いって

言いながら、半分腐って動かなくなつた体を無理矢理動かして、泣きながら這いずりまわって

「イングリット」

わっちは、檻の間から手を差し伸べてイングリットを抱きしめた。抱きしめておいて、手でイングリットの口をふさぐ。

取り乱して身じろぎをするイングリットを頭から押さえつけ、イングリットが痛がるぐらいの力を込める。

痛み以外の全てを忘れてしまうように願って。

イングリットはすぐに抵抗をやめ、その代わりに静かに涙を流し始める。

その顔の黒いシミは、心なしか大きくなっている気がした。

「コスモス。あたしの帰るところは、無くなっちゃった」

腐死病の少女の口から手を離すと、案外冷静な声。涙声ではあつたけれど、自暴自棄にはなっていなかった。

「あたしと一緒に何かをしようといってくれる人は、居なくなっちゃった。あたしだけ残して、居なくなっちゃった」

ポツリポツリと語る声に抑揚は無く、感情がこもっているわけでもなかったが、心にずしりと響いた。今語ったほんのわずかの言葉が、ずっとイングリットの心の中を占めていたことなのだということは即座に理解できた。

イングリットが考えていることはわからなかったが、かけるべき言葉はわかった。

「誰も、おぬしが生き残つた事を責めたりはせんよ。仮に誰かがお

ぬしを責めるといふなら、わっちが庇っちゃる。安心せい」

大切な人を沢山失って、僥倖で生き残ってしまうのは罪悪感だ。イングリットは、自分だけ生き残ってすまないと、ずっと心の中で謝り続けている。

「コスモスが庇ってくれる保障は？」

「ない。完全に口約束じゃ。じゃから、おぬしがわっちのことを信じて頼り続けている限りはわっちもぬしを守り続けよう」

「……こういう時、はっきりと保証がないと言い切るのはどうかと思うわ」

わっちの腕の中でイングリットが小さく笑いを零す。

「想いを形のあるものにしてはならんのだよ。形のあるものは、いずれ壊れるからな」

「目に見えないものは信じない、という人もいるわよ？」

「誰かが疑ったところで、形の無いものが全てなくなってしまうわけでもあるまい。じゃが、そうじゃな。形があつたほうがわかりやすいということも事実じゃ。じゃからおぬしにいい物をやろう」

いつの間にか、自分がこの少女を気に入っている事に気がついた。そうでなければ、腐死病の少女の元に足しげく通ったりはしないだろう。

「イングリット。それと、イタカか。両方同じ音で始まっているの

は紛らわしいな。ならば間にわたちの名前からって何か入れよう」

「はい？」

小首をかしげるイングリット。麦色の髪が彼女の動きに合わせてゆれる。

その様子すらも、愛おしいと思った。ひょっとしたらこの少女には人に好かれる才能があるのかもしれない。

「イングリット・コスモ・イタカ。わたちの権限にて、おぬしを一代限りの準男爵に任命する！」

言うまでも無く、次の瞬間、少女の目がこれまでに無いほど大きく見開かれた。

仮にあの娘が腐死病だったとしても、今のところはわたちに病気が移ったような気配は無かった。念のためにこまめに自分でボディチェックをしているが、さすがの腐死病もわたちの美しい肌にはシミ一つつけられんようだった。

イングリットに爵位を与えたのに深い理由はない。強いて言うなら、名前を与えるおまけのようなものだ。

イタカという言葉性を性につけてきたのは、イタカの村で育った事をいつまでも誇りに思っただけから。

コスモスを意味するコスモという言葉に間に入れたのは、イングリットを敵に回すということがわつちを敵にまわすという事になるからだ。ライヒビの国においてわたちの名前の持つ意味は大きい。侍女のナコのような例外が居ない限り、大抵の人に言う事を聞かせることが出来る。

「おはようございます、コスモス様」

数日振りに外側からわっちの部屋の扉が開き、侍女のナコが顔を出した。

侍女は部屋の鍵を扉近くの小さい台の上に置き、わっちに一礼した。

「先ほど城下町の巡回兵から入った報告によると、王子殿下が単身でご帰還なされたそうです。よって、一応コスモス様も解放させていただきます」

「……うん。 なんとか。」

平和なのは良いが、王子が一人でふらふらしていて何の問題も無いって言うのは、ちょっと寂しいな。

もうちょっと、こう、王子を人質にとつて身代金を要求しようとか、権力を手にして国をのっとろうとか考えるような骨のある輩はいないのだろうか。

例えばそれがどんなに少数兵力で攻めてきたのだとしても、面倒臭がり屋の今の国王なら喜んで玉座を譲りそうなものだが。

なんだか、そうしたら王位をくれてやるといわれた奴の方が「えー、嫌ですよ、面倒臭い。何でそんなことを私がやらなくちゃいけないんですか？王様なんて貴方がやっててくださいよ」といいそうだ。ライヒビの人間はもうちょっと貪欲になるべきだと思う。

「コスモス様。 いつまでもベッドの上に居座らないでください。 アンタがそこにいると私は仕事が出来ないんです」

ナコの冷ややかな声にわっちは慌ててベッドから飛び降りた。

「せめて、面倒臭いから貴方が国王やれとか言うなら、もうちょっと

ところ、王とか王子とか貴族とか王子の許婚といった人種は敬われるべきだと思っくんじゃがな。具体的にいうとわっちの様な人間が！」

わっちの抗議に全く耳を貸すことなく、侍女は淡々とベッドのシーツを取り替える。

「私はわざわざ毎朝、こうしてコスモス様を起こしに来て、その上でベッドメイキングまでしているんですよ？これが私なりの最大限の敬意の表し方です」

「それは敬意ではなくて仕事だろうが！侍女の義務だろうが！！ナコは知らんかもしれんがフェリントーナの皇族では、入浴から着替えから食事まで全部執事や侍女がやってくれるそうじゃぞ」

「じゃあお着替えをお手伝いいたしましょうか？」

わっちは即座に首を振った。さすがにこの歳で着替えまで手伝ってもらうのは恥ずかしい。

そこで、ふいと思ひ出す。

「のうナコ。確かイーマはイタカの村の焼き払い時に、現場指揮官をやっておったな」

「………はい。左様です。確か、国王陛下からの直々の命令だったはずですが」

「………いつも思っくんじゃが、何故おぬしはそういう機密情報を担当り前のように知っておるのじゃ？」

わっちが冷や汗を流しながら聞くと、なぜか侍女はにやりと笑う。

微妙に凄惨な笑いだった。

「言ってもかまいませんが、聞いた後で後悔だけはしないでくださいね」

「・・・・・・・・・・うむ。いつてみよ」

「ただ単に、私の笑顔が魅力的で、私が笑いかけるとどんな殿方もころりとやられてしまうだけの事ですよ。ちなみに失神する方もまれにいらっしやいます」

繰り返し、思う。

この侍女は怒ったときしか笑わない。そして城の連中は当然ながらその事を知っている。

「ちなみに、この情報は国王陛下から直接お聞きしたものです」

「・・・・・・・・・・おぬし、絶対魔王が何かじゃろう」

国王すらも屈服する影の支配者は、心底楽しそうにクククと笑った。

「それで、どうしてイタカの村のことなどお聞きに・・・・・・・・・・あ、そういうえばコスモス様をここに監禁する事になった日、馬車から逃げ出そうとした少女が腐死病患者でしたね。あの一瞬でそれだけの事を理解したのですか。流石です」

心底感心したような、憧憬さえも滲ませる侍女の姿というのは殊の外不気味で、わっちはさりげなく目を逸らした。

あの一瞬、というのは城下町でイングリットのことを見かけた一瞬のことを言っているのだらう。その一瞬でイングリットの顔が黒い

事に気がつき、そのような少女が何故馬車に載せられて護送されているのかを判断すれば確かに腐死病という答えが出てこないでもないが、生憎ながらわっちの知る情報は推理によりもたらされた発想では無くイングリットから聞いて知ったものだ。父なら、そのくらいの判断力を持っているだろうが、父の血を引いているからと言って私は父ではない。

「王子殿下もずいぶんと心を病んでおいでのようでした」

唐突に、侍女は目を伏せて言う。会話をしながらもまったくよどみなく仕事をしていた両手を止め、体の前に組んでこちらに向き直った。

「今でもイタカの方々が火に焼かれて苦しむ姿を夢で見たりて吐いたり、夜中にどうしようもなく震えて寝付けない事もしばしばあるそうです。だから、今回森の魔女のところに行こうと計画を立てたのは、心療旅行のためだと聞いております」

「……そうだったのか？」

これはまた新事実だった。そもそもイーマは悩みがあっても一人で抱え込むタイプだ。誰かに相談しようとしなから誰もイーマの悩みに気がつけないし、漸く悩みを披瀝してくれたと思ったらもう自分で乗り越えてしまった後だったりする。

だから、侍女が王子の悩みを知っていて、その上でわっちには一言も言わなかった事がちよつとねたましかった。

「さて、私はいまひとつだけ嘘をつきました。それは为什么呢しょうか？」

「森の魔女のところに言ったのが心療旅行のためということ？」

というより、傷心を癒すためなら魔女のところではなく幼馴染にして許婚のわっちのところに来て欲しいというのが本心だ。イーマからわっちでは力不足だといわれたようでちょっと辛い。それも確かにまあ、私の憶測ですが。と、侍女は苦笑する。

「正解は、王子殿下にお聞きした、のところですよ。私は単に様子のおかしい王子殿下を気に病んで夜な夜な窓の外から王子殿下の部屋を覗き込んでいただけです」

「……………それを世の人は、覗きというのではないか？」

そもそもイーマの部屋はわっちと同じ三階のはず。窓から覗き込んだということは城壁をエツチラオツチラと這い上がって言ったということになる。不可能ではないだろうけれどこの侍女以外はそんなことをしようと思わないだろう。

具体的に言えば、普通の身体能力しかない人間は。

「まあ、わっちと違ってイーマは優しいからな。本来が人殺しには向かん性格をしておるのじゃ。村一つを焼き滅ぼしておいて平静としていられるほうが妙じゃろう」

わっちが髪でも梳こうと化粧台の前に座りながら言っていると、なぜか沈黙が返ってきた。鏡越しに見ると、侍女は微妙な表情をしている。

「コスモス様」

「何だ？」

「コスモス様のほうが王子殿下よりもずっと弱くて優しい性格をしていますよ。だってほら、大切な人のためなら、体面とか他人への迷惑とか顧みずに平気で怒りに身を投じられるじゃないですか」

城下町の服飾店のことをとっても然り。と、侍女は呟く。

「あ、あれは、違うぞ。ただ酒の魔術師に腹が立っただけじゃ・・・」

わっちが言い終わるよりも前に侍女が歩み寄ってきて、わっちの手から櫛を無理矢理奪い取ると、やや乱暴にわっちの髪を梳かし始めた。痛い。

「自分のためならいざ知らず、本気で他の人のために怒れる人間など近頃ではめったに居ませんよ。もっと素直な目で自分を見てください。コスモス様は王子殿下に負けず劣らず、お優しい方ですよ」

わっちの髪を梳く侍女の手つきはやや強引で、頭皮を引っ張られる痛みにわっちは眉をしかめた。

「強いて言うなら、王子殿下は何でもかんでも心に心を配ってしまつて、コスモス様は目の前の事だけに目を配るという違いでしょうかね。普段は厭世的なことを言っておきながらいざ目の前に困っている人が現れるとほうっておけないというのは、コスモス様だけではなく森の魔女にも共通する性格ですが」

「それは優しいとは言わんじやろう。つまるところ自分の目の前さえ何事も無ければ他がどうなっているでもいいということじゃ」

それは自分本位な理由だろう。

「自分の目の前にいる人全てに幸せであってほしいというのはとても難しい事ですし、気配りは疲れます。それをやろうという時点で十分お優しいですよ」

だから人は大切な人を決めるのだ。と、侍女は言う。守りたいものを、守りべき大切なたった一つのものを選ぶのだと。それだけは譲れないと、そう言える存在を造るのだと。

「私は、コスモス様さえ幸せならば今この瞬間に王都の人間全員が死んだとしてもちつとも心が痛みませんが」

春風が吹いた程度には感じるかもしれませんが。と、侍女は続ける。侍女の選んだ譲れない存在は、私のことらしい。それはお世辞ではなく嬉しかった。

「それに、優しさなんて所詮は自分本位な物でしょう。誰かのために何かをしたいという気持ちは、誰かのために何かをしなければ自分が嫌な思いをしてしまうから、という気持ちを言い換えただけのものですから」

むう。と、わっちはうなり声を上げる。

「おぬしの言う事はどうも概念的で解からん。具体例を挙げてみせよ」

侍女がはいはいといった感じで溜息をつく。
どうやら髪を梳かし終わったらしく櫛を化粧台の上に置き、今度は口紅の粉を練り始める。どうやらわっちに何もやらせる気は無いら

しい。わっちは先ほど自分が挙げたフェリントーナの皇族の例を思い出して苦笑した。

「簡単に言えば、私はコスモス様のことしか考えられなくてコスモス様と森の魔女は目の前の事しか考えられなくて王子殿下は全部のことが考えられてしまふ。と、そういうことですよ」

「ふうん」

わっちは鏡を見て眉をしかめた。わっちの首元に本来あるはずのない黒子のようなものが出来ていたからだ。

「……なんだかい加減な返事ですネ。いいでしょう。要するに、王子殿下はいつも全部を守ることを考えてばかりいらつしやるから、何かを切り捨てる事によつて他を守るといふ事ができない。例えば膿が湧いている肉を見つけても、膿の部分を切り取ってしまったらずに食べるからおなかを壊して大騒ぎするんです」

わっちは苦笑した。侍女が今言つた事は実際に数年前に起きた事だからだ。

「国王陛下がイタカの村の焼き払いを王子殿下に命じたのは、諦める事の大切さを教えるためでしょうね。王子殿下は次期国王の最有力候補ですし、国王になればそれは当然必要になってくる事ですから」

「じゃあわっちも、『国民とわっちとどっちが大切なの!?!』みたいなことを聞いて困らせてみようか?」

「その答えを王子殿下の口から聞きたくは無いですよ。国民を選ぶにしろ、コスモス様を選ぶにしろ、どちらも選べないにしろ」

「・・・・・・・・・・じゃな」

黒子は、一度気づいてしまつと急に存在感を増した。わっちはその黒子がただの黒子でない事に気がつき、眉をしかめる。イングリットの顔を覆う腐死病の黒が脳裏をよぎった。

「・・・・・・・・・・」

わっちはつい、とひじを動かすと、さりげない動作で口紅の粉が入った壺を床に落とす。

「あ、すまぬ」

侍女が「アンタ餓鬼ですか」という視線でこちらを見てくるが、特に何も言わない。

「わざとではないんじゃよ」

「わざとやったなら私は笑っています」

・・・・・・・・わざとやった身としては、それは恐ろしく怖かった。

「絨毯が汚れてしまいましたね。何か拭くものを持ってきます。暫くお待ちください」

そついつて一礼して退室しようとする侍女。

「うん。すまぬな」

そういつて、侍女が出て行ってすぐにわっちはドアの鍵を閉めた。
先ほど侍女が敷いたシーツを引き裂いて布切れを作り、鍵穴やドア
の下の隙間に押し込む。それが終わってから漸く一息をつき、もう
一度化粧台の前に座った。それからまじまじと首元を眺める。

黒い黒子は、腐死病に感染した証拠だった。

第五幕後編。(後書き)

次の更新は17日です。

第六幕。コスモスの侍女、ナコ

コスモス様はわざとやったのではないとおっしゃいましたが、そもそもがコスモス様はわざとやったときにしかわざとではないと弁解なさらないお方です。だから私は「思いつきで絨毯を汚そうなんて思わないでください。それだって高い物なのですから」と心の中だけで呟いてコスモス様の部屋を後にしました。

私は先ほど私がコスモス様に対して言ったように、コスモス様だけのために生きています。フェリントーナには女性騎士の地位を捨ててまで皇后の侍女になった方がいらっしゃるそうですが、コスモス様に対する私の忠誠心はその方にも負けていないと自負しております。他の誰でもない、私自身の意志でコスモス様のために尽くそうと決めたのです。

恐らく王子殿下は、全てを捨ててまでコスモス様をお守りすることは出来ません。それは王子殿下の立場と良心が許さないからです。それに、王子殿下が国民を捨ててコスモス様を選べるような冷酷な方だったとしてもコスモス様のお傍に立つのにふさわしくありません。

さて、私が掃除用具を持ってコスモス様のお部屋に戻ると、何を思ったのかコスモス様は内側から扉に鍵をかけて、呼びかけても返事をしてくれません。数日前にこの部屋の合鍵がなくなったという話は聞いていましたし、私が持っていた鍵もコスモス様の部屋の内側に置いたままになっているので、コスモス様が開けてくれない限り私は中に入ることもできません。金属製の鍵なのでカーテンレールで叩き壊すというわけにも行かず、私は部屋の外で呆然と佇んでおりました。

と、そこに変た……ではなくて、王子殿下が現れます。

……なぜか裸に黒マントというモダンな格好ですが、そこに突っ込むと異世界から沸いて出たと思えない王子殿下の高尚な趣味とやらについてイーマ語という謎の言語で延々と語られてしまうので無視させていただきます。

とりあえず王子殿下から目を逸らしつつコスモス様が閉じこもってしまった事を話すと、王子殿下はいつもと代わらない冴え渡る頭脳でいとも簡単にコスモス様のお考えを理解してしまわれたようでした。

「閉じこもりも何も、じつにコスモスらしい単純な思考ではないか」

ビシッ！

王子殿下が、両腕をびしっと伸ばし、唸ります。

「コスモス、よもやこの程度で私が途方に暮れるとは思っておらんよな！」

シャキーン！

王子殿下が、両腕を交差させて、吠えます。

「観念しろ！」

ドンッ！！

王子殿下が、ポーズをつけて叫びます。
変態の所業でした。

そして、そんな効果音の聞こえてきそうなポーズを扉に向けてとつた後、王子殿下はビシッとコスモス様……の手前にある扉を指差しました。

長年コスモス様と共に過ごした私にはわかります。

扉の向こうのコスモス様がドン引きしているのが！？

「……………あの、王子殿下、ナニヲナサツテオイデナノデスカ？」

出来れば他人でありたいと思う私の本心が私の声にどこやよそよそしい響きを与えています、王子殿下はその事にすらも気がついた様子がありません。

「馬鹿者！ヒーローというのは登場したときに例え相手が扉であつたとしても格好をつけなくてはならん義務があるのだ！」

「その理論には異議があります！アナタ、ヒーローって風じゃないでしょう！」

む。と黒マントだけを身につけた王子殿下がうなります。流石に思うところがあるようです。

「……………そうだな。ヒーローというからには白マントでなければなるまい」

「それはさらにいろんな意味で異論があります！？ですがとりあえず、コスモス様のことですがっ！」

そういつて私も王子殿下と同じように扉を指差します。

「コスモス様は一体どうなっているんですか？！」

「ああ、それはだな」

王子殿下は改めてそういつて扉に向き直ります。

「腐死病だろう、コスモス。大方城に運び込まれた腐死病の少女の存在を知って好奇心を押さえきれずに会いに行つたのだろう」

私は予想をはるかに上回る答えに言葉を失いました。

コスモス様はずっとこの部屋に居たはずだと言おうとして、この部屋の合鍵が紛失していた事を思い出します。コスモス様は何らかの手段を使つてその鍵を手に入れたのでしょうか。

なんて無様なんでしょう。私は、コスモス様のために生きているなどと言言壮語を吐いておきながらそのコスモス様が何を考えてどういふ行動をするかも理解できていなかったのです。

「じゃつたらどうなるというのじゃ？」

扉の向こうからコスモス様のくぐもつた声が聞こえます。コスモス様の声が普段のものと違って聞こえるのは、扉越しの声だと言う事だけではないでしょう。

「とりあえずこの扉を開ける。コスモスが開けてくれないのならこじ開ける。久しぶりに会つたのだからお前もわたしの顔がみたいだろう。違うか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

扉の向こうから伝わってくるのは沈黙。肯定だという事でしょう。王子殿下は何かを言う素振すらも見せずにじつとドアのほうを睨みつけます。王子殿下も言いたい事は沢山あるのでしょうか、ぐつとこらえているのです。

重苦しい緊張が周りを漂いました。

「・・・・・・・・イーマに何ができるのじゃ？」

先に痺れを切らしたのは、いつものようにコスモス様の方です。そして、その問いに含まれていたのはコスモス様の『想い』でした。コスモス様が腐死病にかかったのならば我々人間は無力です。努力をしてもコスモス様の死を免れることは出来ません。やれば出来ると無責任な人たちは言いますが、努力をしてもどうにもならないことがどれだけ恐怖か、私も、そして私以上に王子殿下もご存知です。取捨選択をする事を知らず、当たり前のように全部を助けてきた王子殿下でも腐死病だけは何とかできないからこそ、イタカの様な腐死病に汚染された村は焼き払わなければいけないのです。王子殿下は何でもかんでもに心を配ってしまい、その上でたいいはそれでは何とかなってしまっから、たまに王子殿下でも力が及ばない事があると無力感と罪悪感に簡単に押しつぶされそうになってしまうのです。

「さあな。私に何ができるのか、私にも分らん。だが、何かは出来るだろう。私は最初からあきらめてかかるつもりは無いぞ」

「腐死病が王都に蔓延したら、国が滅びるが、それでもいいのじゃな？」

王子殿下がだから扉を開けてくれ、の、だ、のところまで言ったところでそれを遮るようにコスモス様がおっしゃいました。

私はとつさに理解します。

コスモス様は、『国民とわっちのどっちが大切なの！？』と先ほどおっしゃった言葉通りに国王陛下に天秤を押し付けているのです。腐死病は王子殿下でも何とかすることができない唯一のものだからこそ、この質問が意味を成すのです。

しかし、王子殿下はにやりと笑うとドアをぽんぽんとあやすように叩きました。

「コスモス。国民のために死ぬ、などとは言ってくれるなよ。私から見たらお前だって立派な国民なんだから。取捨選択も何も、片側の皿が空の天秤など無意味だろう」

王子殿下は私とコスモス様の会話を盗み聞きしていたかのようにささやいて、それから私の肩を叩きました。

「さて…………お前、名はなんというのだ？」

「ナコです。ナコ・パンナコッタ」

「よし、ナコ。風呂を用意しろ」

「……………は？」

「延命だよ。ベッタラの実がなる春まで持たせられるかは分かんが、私に唯一できる事があるといったらそのくらいだしな」

さわやかに微笑む王子殿下は、白マントを身につけていたのならば確かにとても魅力的だったでしょう。

第七幕。宰相、レノハ

俺が毎日、嫌だ嫌だと言いながらも書類仕事を懸命にこなしているのは、宰相というなんともめんどくさい地位を国王が俺に押し付けたからだ。確かにこの地位を押し付けられた当時は腐死病で壊滅的な被害を受けた俺の村を復興するのにそれなりに役に立ったのも事実だが、それが終わってしまえば単に迷惑な肩書きが残っているだけだ。

「お前が俺の養子になれば楽なのにな」

と、国王は溜息混じりに言う。それは俺が楽になるという事ではなく国王が俺にその地位を押し付けて隠居するという事に他ならない。「誰が国王になんかなるかあかんベエ」と、最初にそういわれたとき俺は言い返してやったが、急に国王が泣き出しそうな顔になって「れのはア」と俺に抱きついてきたのでそれ以降は仕方なく笑ってごまかす事になっている。

あの、妙に艶っぽい顔は反則だろう。

宰相というだけあって部下だけは生え抜きの優秀な、それこそ俺が居なくても政務に差し支えの無いぐらい優秀な奴らがそろっているのだが、どいつもこいつも出世欲のカケラも持たない奴らで、「おまえ、俺の代わりに宰相やれ」といつても「嫌ですよ面倒臭い宰相なんかになったら週末まで城に出勤してこなくちゃいけないじゃないですか宰相なんてやるのはよっぽどの暇人ですよ」と、俺が宰相を辞めたがっているのと同じ理由で首を横に振るのである。

だが、仕方なく面倒臭い書類仕事を午前中のうちにぱっぱと片付けてしまった俺は、生まれて初めて新しい自分を発見するという珍事に直面した。

こつも書類仕事が恋しくなるとは思わなかった。
仕事に忙殺されていた昨日までが懐かしい。

「とりあえず、御用件をどうぞ、『森の魔女』殿」

早く自分の縄張りに帰って草むしりでもしてろやこのアマ。と、内心では思いつつも表面上は笑顔を浮かべて丁寧な言葉遣いをする。魔女はそれを受けて、向かいの椅子に座ったままぼーとした笑みを浮かべた。

お茶を持ってきます。と、明らかにこの場から逃げ出すための言い訳としか思えぬ言葉を発言してこの場を立ち去ろうとする秘書と、
「なんで森の魔女なんか通したんだよこのフヌケ。宰相になるのがイヤだつて言うならせめて自分の仕事ぐらいちゃんとしやがれや」
「だつてアンタ今日暇だつて言つてたじゃないですか。国内視察つて言い訳で城下町のお姉ちゃんナンパするなら森の魔女だつて美人だしナンパしがいがあるんじゃないですか。というか私みたいな一介の秘書が魔女をとめる事なんてできるわけ無いでしょうだつてこの国の王子三人のオキニの女性なんですよ」という視線だけの会話を交わした後で俺は魔女のほうに向き直る。この魔女は空気が読めない性格だが、逆にいえば今の俺と秘書が交わした心の会話にも気づけないという事で、俺はそつと安堵の溜息をつく。

「………ところで魔女殿、御趣味は何ですか？」

「え？趣味？………日光浴かしら」

「それはそれは、太陽の光を受けた貴方は大層美しく輝いている事でしょう。城の様な重苦しい空間も貴方が居るだけで華やきます。しかし私のようなものからすれば森と共に暮らす貴方は手の届かぬところに咲く高嶺の花も同じ。貴方の愛を一身に受ける森に私は嫉

妬の炎を燃やす事しかできないのでしょうか！」

何処かから「魔女のことを迷惑そうにしてたのにちゃっかりナンパしてるんじゃないですか」という声が聞こえてきそうだったが、気にしない。

このナンパはただのナンパではなく城下町のオネエちゃんをナンパできなかった事に対する八つ当たりだからだ。

（……まあ、どう言い訳したところでナンパしているのに
は変わりがないんだけどな）

とりあえず、と、俺は魔女の両手を握る。森の魔女は女としてはやや背の高いほうだったが、俺も男にしては背の高いほうだったので、やや前屈みにならなければならない。あえて俺の息が魔女にかかるような角度にして、俺は魔女に囁きかける。

「魔女殿……ああ、貴方はなんと罪深い方なのでしょう
貴方の名前を呼ぶだけで私は天にも昇る気持ちになってしまいます」

「え？あの、え？」

「ぜひとも貴方には私の傍にいてもらいたい。魔女殿、この心臓の鼓動が聞こえますか？小鳥のさえずりよりも美しい貴方の声がこうも私の心臓を高鳴らせるのです。薔薇の花すらも色あせる貴方の笑顔のせいでこうも私の血は騒ぐのです」

そつと魔女の手を俺の胸に当てた。自分の銀色の長髪やほっそりしたように筋肉のついたこの体が、女性に対しどれだけ強力な武器になるかは心得ている。

魔女も例外ではなかったように、俺の握った手をもじもじと気恥ず

かしそうに動かしながら目を逸らす。

「さ、宰相閣下、いけませんよ、昼間から」

「じゃあ夜までこうして共に語らいながら待つとしましょうか」

オイオイ何でそこまで飛ぶんだよ俺はちゃんと段階だった恋愛をしようとしてるんだからな。

・・・・・・とは、思ったが言わない事にした。

「貴方を前にすると、誰もが鼻の奥がつんとするような少年になってしまいます。これを愛と呼ばずになんと呼びましょう!」

もう、魔女は顔を林檎のように真っ赤にさせて俯くだけで、何も言わない。

何も言えないような状況に、俺が仕向けた。

「貴方のためならば私は全てを捧げられます。貴方のその微笑が独占できるのならば私は何もかも投げ打てます、貴方に愛されるためならば私は・・・・・・」

「あの、宰相閣下」

さらに森の魔女への愛を説こうとしたところで、森の魔女に口を挟まれた。

さっきまでの恥ずかしがっていた様子は微塵も無く、しれっとした表情をしている。

「今言った事、本当ですね？私のために全てを投げ打てるという言葉」

「え、はい、そうですか」

今度は俺がしどろもどろになって答えた。正確には全てを投げ打てるというのは魔女の微笑が独占できたらという条件付だったはずだが、たいした違いは無い。

「じゃあ、イングリットを解放して私に預けてくださいね」

あ、と俺は一瞬間拔けな声を出して、ぴしゃりと片手で顔を覆う。俺が魔女から手を話した瞬間に、魔女はひらりとまるで魔法のように俺の元から離れる。

甘い言葉をささやいて魔女に本題を忘れさせようという試みは、さらにその上に行く魔女に計略によって利用されたのだ。いや、これは自滅か。

「それは出来ません」

もう色仕掛け作戦は通じないと諦めて、きつぱりと断る。

それから俺はどかと部屋に置かれた豪華な椅子に座った。

魔女は世間知らずではあるが決して馬鹿ではない。その上で言うと馬鹿三兄弟の二つ名で知られるこの国の王子たちによって男に対して無駄に強い耐性を持っているのだった。

「では、私もイングリットと同じように監禁しますか？」

魔女が両手を広げて言う。

「まさか。また森が襲って来たらこまりますから」

先代の魔女を先代の国王が監禁したとき、怒り出した森が急速に増殖して、王都が木々で覆い尽くされた事があったという。そもそもどうして国王が魔女を監禁しようとしたのかは定かではないが、同じ事が今の時代にも起こるのはごめんだった。何せ、そういうことが起こって事後処理に追われるのは俺だ。

「じゃあ、イングリットも開放しなければいけませんよ」

「力技に、出るおつもりですか？貴方はあくまで人と森の間に立つ存在でしょう。そこまで一個人に肩入れすることは森が許さないはずですが？」

魔女がその気になったら人はかなわないが、それはしないだろう。森と人との境界線に立ち、その双方が境界線を越えないようにするのが仕事である魔女自らが境界線を越えるなどという話は聞いたことも無い。

「いいえ」

魔女は予想通りに首を横に振る。

「ただ、私はイングリットを次世代の森の魔女にするつもりがあると、そういうことです」

魔女は予想外のことを言った。

「いいでしょう。あの少女については貴方にお任せします」

衝撃の事実を伝え終わって、さて反撃開始とばかりに口を開きかけていた魔女は俺の言葉が理解できずに一瞬固まった。

「あ、相変わらず決断が早いですね・・・」

「それだけが、私のとりえですからね」

俺がいつもの口癖で答えつつ、椅子から立ち上がるとする魔女を手で押し留める。

魔女が何かを言うよりも前に部屋の外に誰も居ない事を確認して部屋に鍵をかけた。ここは二階だが、念のために窓にカーテンも引くと、部屋の中は薄暗くなった。山の中腹に立てられたこの城の窓景は荘厳だったが、やむを得ない。

「御安心ください、魔女殿。決して魔女殿をどうこうしようというわけではありませんから。いえ、ですから何もしませんって。何もしませんって言うているでしょうその手の上の種をしまってください魔女殿っ！」

ただの植物の種でも魔女が持てば凶器になる。何かを誤解して凶行に走ろうとした魔女に俺はすがりつくように懇願した。

「とりあえず男と暗闇で二人つきりになったら手近にある武器を手にとって相手が混沌するまで力の限り殴り続けなさいって親友だった女の子が昔教えてくれたわ」

「それは力のないフツツの女の子の場合ですっ！魔女殿はその気になれば人だって簡単に殺せるんだからもつとよく考えてから判断してください！」

思わず声を荒げてから後悔する。これでは迫力で威嚇しているように思われるだろう。

魔女が懷からもう一つ種を取り出したのを見て、俺は再び溜息をついた。もうこれ以上口論を繰り返しても堂々巡りの口論が続くだけだ。

俺は魔女の持つ種には気がつかない振りをして眼鏡をかけなおした。

「私には、娘が一人居ます」

「……………あれ、既婚者だったの？」

「よく言われます。若く見えるからでしょうね」

「いや、そうじゃなくって、貴方みたいな見かけだけ清廉潔白で中身はいつも人のことを小馬鹿にしているような最低な人を好きになるような人が居た事に驚いたのよ」

身も蓋もない言い方にちょっと俺の目が細くなった。魔女なら俺の性格ぐらい見抜いているだろうとは思っていたが、こつも神経を逆なでするような言い方をされるとは思わなかった。

空気を読め。

そろそろ真面目な話をしようっつー雰囲気だっただろうが。

「ああ。さっき私にしたみたいに軟派した女の子に孕ませちゃったってこと？」

「……………そういうことを言うのは女性としてどうなのでしょう？」

「女性じゃないわ、女の子よ。お、ん、な、の、こっ」

いつしよだろう、そんなもん。

俺は遠い目になって昔のことに思いをはせた。

「・・・・・・・・・・思えば、あのころは私も蒼かった。あんな女性に引つかかって人生を狂わせられるとは思っても居ませんでした。私がかんな性格になったのも元はといえばあのクソアマのせいでしたね・・・・・・・・ふふふ。忘れていた憎しみがだんだん蘇ってきましたよ。これが殺意っていうやつなんですね」

ふふふと笑いながら俺は空を眺める。おーい、もどつてこーい。という声がどこからか聞こえるが空耳だろう。

「・・・・・・・・・・」

俺がさらに遠い、幼少時にまで思いをはせて現実逃避をしようとしていると、急に呼吸が苦しくなった。見るとツタが首に絡み付いて遠慮なく首を絞めている。

「ま、魔女殿、だから種はしまってくださいといったんですっ！ちよつと現実逃避したぐらいで首を絞めないでいただきたいっ！」

魔女の手元にあつた種はいつの間にか芽吹いて強靱なツタを伸ばしていた。それが俺の首に絡み付いているのだ。

背筋に、恐怖が走った。実に理不尽だ。ほんの少しの気まぐれで人を殺し、個人の我儘で国の存亡すらも左右する。法律も道德も通じない。

何よりも腹が立つのは、それが魔女自身の力ではなく森という強大な存在の尻馬に乗ったものでしかないという事だ。

「それで、あなたの娘さんがどうしたのかしら？」

「つ、ツタを離してからお聞きください！これでは拷問と変わりませんよ！！」

「あら？私に口答えするつもりなのかしら？えいえい」

声色だけはかわいらしく、魔女がツタをさらにきつく締め上げる。

将来国を担う事になるであろう馬鹿三兄弟は「あの俗離れした世間知らずっぷりが可愛くてさ」「街の女のとかと違って清楚で潔癖ってところも可愛いよね」「一見いろいろな事を知っているように無知なギャップがあの子の売りだな」といつていたが、世間の常識が通じないということは、人を殺す事にも眉一つしかめないのではないだろうか？

われわれ人間と、同じ価値観が通用しないということではないだろうか？

遠ざかりかけた意識でそう思って俺が無理矢理引き剥がそうとツタに手をかけたとき

ふっ。と首を絞める力が緩んだ。

「ごめんなさいね」

魔女の口から出たのは謝罪。

慌てて魔女を見上げたら、魔女は反省したようにそつと目を伏せていた。

その様子がとても儂げで思わず許してしまいそうになり、ぐっと留まる。

許すのは理由を聞いてから。魔女に人間の常識が通じるのかを確認してからだ。

「イングリットのこと、腹が立ったのよ」

「……………ああ、申し訳ありません」

何のことはない。あの少女を監禁した俺に対して腹が立っただけのことだった。

なんとも当たり前な、人間らしい感情だった。

魔女は俯いて黙ってしまった。自分の弟子が受けた仕打ちに対する仕返しにしても、やりすぎたのだと思ったのだろう。

しかしその程度のことは、森の中で育って加減を知らない女性ならば仕方がないことだった。

そもそも、ここで文句ごうごう言っただとして、魔女の機嫌を損ねてしまつて困るのは俺自身だ。齒がゆいが、相手が子供じみている分こちらはよりいっそう大人の対応をしなければいけない。

「……………イングリットさんは」

とりあえず会話をつなごうと、俺は思いついた事を口にする。

「貴方にとって、『家族』なんですね」

恐らく核心をついたであろう俺の質問に、「そうよ」と魔女は即答してから、魔女ははじめて気がついた感情と、即答した自分に驚いて小さく首をかしげる。

あのチッコイ妹以外家族と思っていないようだった魔女がこうもいい顔をするようになったことに俺は少し感心した。

最も信愛するものたちに裏切られ、その結果自分だけが生き延びた問いう点で魔女とイングリットは同じだ。今、魔女はイングリットに自分の過去を照らし合わせているのだろう。

だったら平静でいられるはずもない。俺の首を絞めたくなるのは、確かに誉められた行為ではないものの、分からない理屈ではなかつ

た。

俺も含めて、人はとかく誤解しがちだが、魔女は見かけによらず幼い。森に愛されているというその特殊な立ち位置と、神にも似た所業の数々のせいでやたらと偉大に見えるだけで、単なる世間知らずの甘えん坊だ。逆に感情のままに動くという事に慣れていない分、いざ取り乱すとどこまでも危険な方向に突っ走っていく。

魔女がイングリットに自分と全く同じ道を歩む事を押し付けなければいいが。と、俺はらしくも無い事を考えた。だが、それは無駄な心配だろう。既に魔女は、イングリットを自分の後継者にするつもりだ。それこそが、イングリットの望む事だと信じ、イングリットと魔女が個々の意志を持った違う人間だという事も認めないまま。同じような経験をしたからといって、同じような想いを抱くとは限らないのに。

やれやれ、面倒ことはごめんだぞ。と、俺は心の中でがりがりと頭を掻いた。

とりあえず、自分と自分の主だけは被害をこうむらないように対策を練っておこう。と思いながら、俺は一人で考え事に没頭してしまつた魔女を見下ろす。

俺の視線に気がついた魔女は、面白い事に気がついた子供のようにきらきらした目で俺を見つめ返した。

「腐死病が絆を結ぶとは、奇妙な事もあるものです」

どういふ思考回路をめぐつたのか、そう、魔女は呟いた。

「と、とにかく、話を戻しましょう」

あまりにも爽やかに笑つた魔女に惚れそうになって、俺は慌てて眼鏡をかけなおす。娘とほとんど歳の代わらない女に心を奪われそうになつたのは初めてだった。

「私には娘が居ます」

「・・・・・・・・あれ？そんな手前のところで本題から逸れちゃったんだっけ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アンタが話を逸らしたんだろう。と今すぐに突っ込むのはさすがに怖かった。

「コスモスという名前なのですが」

「え？あの王子の許婚のコスモス？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

だからそろそろ黙って俺に好きなように話させる。と突っ込みたいのを無理矢理抑える。

「知っているなら話は早いです。そのコスモスが、イングリットによつて腐死病に感染してしまいました」

え？と呟く声は魔女のもの。

俺ならばそんな失態は犯さないだろうと、奇妙なところで俺を信頼していたのだろう。

その信頼は重い。

「現在クソおう　王子殿下によって対処療法が取られています
が、命も助けたいというのが父親としての本心です。貴方が腐死病

に対抗するイングリットの体質について調査すれば、何とかベツタラ以外に腐死病の治療薬が作れますか？」

魔女は再び「え？」と呟いて、それから思い出したように魔女のチッコイ妹が俺についた？について解説を始めた。
俺から見れば、絶望的な事実を。

「つまり、腐死病を直す手段は、あの少女も持ち合わせていないという事ですか……」

がくつと膝の力が抜けた。椅子に座っていたのでなかったら今頃床の上にひざまずいていた事だろう。

「イングリットは潜伏期間中だったから特殊なの。大事をとって新陳代謝を低下させて腐死病の進行を遅らせる薬を飲ませていたしねあれによつてイングリットは死を免れていたし、私とロッキンツォンは森に守られていたからこそ使える裏技だったのよ」

そんな俺を同情するような目で見つめる魔女。
その目が癪に障った。

魔女ならそもそも、その奇跡で腐死病そのものを根絶させられるだろう。と、ライヒビに住む誰もが思っていることだが、だれも魔女がそうしないことを責めたりはしない。

生きていくためには人が自然を犯さなければいけない以上、自然が人を犯すのも阻止させない。そのためにいるのが魔女。森が、森であるための戒めとして設けた存在^{もの}。

だから、魔女は人に肩入れしない。

そうだというなら、力を貸す気もないのに人間に同情するのもルー

ル違反だろう。

『助けられる力はあるけど助けない。けど、あなたの悲しみはわかります』・・・だあ!?

全てを捨てても助けられるならば助けたいと思う。自分にコスモスを助ける力があつたならば喜んで宰相の地位だって命だって捨てる。仮にそのためにライヒビを滅ぼす事になっても構わない。その気持ちは魔女ごときには分らない。

力があるのに、使おうとしないのがその証拠だ。

「ところで、王子殿下が取ったという対処療法って何のことかしら?」

魔女が小首をかしげる。

そうだ。いじけている暇は無い。こうなったら王子殿下の対処療法で、ベッタラの実る春までコスモスの生命を持たせる事に賭けなければいけない。

「風呂に入れる。という事らしいですよ。貴方から教わったと、王子殿下は仰っていましたか」

魔女が絶句する。

次の瞬間、魔女は種すらも使わずに、普通の少女となんら変わらぬ力で俺の襟を締め上げながら怒鳴るように風呂の位置を聞いたのだった。

第八幕前編。再び、イングリット

あたしは溜息をついて服の上を見た。

服の上には、コスモスという女性によって書かれた文字が躍っている。

書くものがないからといって指先を噛み切って血をインクの代わりにしたり、紙がないからといって服の上に直接書いてきたのには驚いたけれど、よく考えれば国の上層部では日常的に血判が使われているのだとか聞いたことがあった。

しかし、あたしの服の上の文章は一味違う。ライヒビの識字率はあまり高くないのであたしが文字の読み方を知っているのは奇跡に近かったが、その文字の表す内容は素直に喜んでいいのか微妙なものだったからだ。

「イングリット・コスモ・イタカを本日付で一代限りの準男爵に任命する。ナタリエル・テリテマ・ゲンテリリエール・トマコ・チェミエンス・ニヤマラ・スズラヒ・レノハ・コスモス」

と書かれているのだ。つまり、この服があたしを貴族だと認める正式な証書だという事にもなる。

（文面の半分以上を名前が占めているというのも、どうかと思うけどね・・・）

コスモスが事務仕事を嫌うのは、ただ読んでサインするだけでも腕が疲れるからだといっていた。それぐらいならいっそ名前を変えればいいじゃん、あたしは即座に突っ込んだ。

「はあ」

村娘がいきなり貴族に出世してしまった。その理由はコスモスによって聞いたがそもそもどうしてそんな理由であたしなんかを貴族に

したのか分からない。

腐死病についての話題は、コスモスがあえて避けている様なのでこちらから切り出す事ができず、ほとんど話題に上っていない。

そのため、今のあたしの状況が分からない。

宰相閣下を前にしたときのロッキンツォンさんの奇妙な言い回しも気になった。

自分が生きているのか、死んでいく途中なのか。

終わる存在なのか、始まる存在なのか。

それが分からない。不安はあたしの不安をより一層募らせた。

「コスモス、早く来ないかな」

幽閉された日から毎日、最低でも一回はこの牢屋を訪ねてくれるコスモスの存在はいつの間にかあたしの心の支えになっていた。コスモス以外の人間はそもそもこの牢屋を訪れないし、腐死病にかかっているという今の状況でそれは当然だろう。

「はあ」

あたしはもう一度溜息をついて、それから首をかしげた。牢屋の檻の外側に、なにやらもぞもぞ動く茶色いものを見つけたからだ。

暫く目を凝らして、それが魔女の館に居た「アサさん」と同じ猫という生き物である事を思い出す。確か魔女は人食・・・じゃなくて大喰らいでグルメの「アサさん」と、方向音痴で盗癖の「マサさん」という猫を飼っていたはずだ。

(・・・あれ？)

あたしは魔女から聞いていたマサさんの身体的特徴を思い出す。

（茶色い子猫、だつたわよね）

目の前に居るのは茶色い小さな猫。
どうやらこれがマサさんらしい。

あたしは思わず眩暈を感じて天・・・・・・・・・・ではなくて牢屋の天井を仰いだ。

（嗚呼）

王都と魔女の館がどのくらいはなれているのかは知らないけれど、イタカの村から王都まではかなり近いと聞いていたから、きっと大人でも五日はかかる旅程なのだろう。ついでに言うとなライヒビは地形的に山あり谷あり川ありなんでもありの地形で、お城で飼われているごく一部の馬以外はその地形を乗り越えることが出来ないため普通は王様でも何処かに向かうときは徒歩だ。

ちなみにイタカの村は結構低い山の頂上にあつた。標高が高いためか空気は薄かったけれど、王都までの街道はちゃんと整備されていたから困ることはなかった。

・・・・・・・・・・で！あたしの言いたいのはそついう事ではなく！

「マサさん、だっけ？あなた、方向音痴にも程があるでしょう！どうやったら道に迷っただけで魔女の館からここまで来れるの！あんだひょつとして国境をまたいだ事があるとか言わないでしょうねえ！？」

マサさんはあたしの怒鳴り声に驚くこともなく、つぶらな瞳であたしを見つめたままこちらにヨチヨチ近寄ってくる。

「あんたもうちょっと警戒心って物を・・・・・・・・・・」

そこであたしは絶句した。マサさんは、鍵を啜っていたのだ。

「……盗癖も、あんたの特徴だったっけ？御都合主義にも程があるけどそれってひょっとしてこの牢屋の鍵だったりしないわよねえ？」

そんなことはないだろうと思いながら、わたしの眼がキラーンと輝き、子猫がひるむ。

「一体どうしてマサさんが鍵を持っているのか解からないけど、おとなしく渡してもらおうかしら？」

十分後、ムギヤーという猫の悲鳴が再び城中に響き渡ったという。

牢屋から廊下に出て、ドアから出るのはさすがに拙いだろうと窓から飛び出そうとして寸前で間に合った。ガラスなどという高価なものが窓に使われているのは国王や王子といった、城の中でも一番上の人たちの部屋だけで、牢屋しかないここには木窓も何もないただの穴といった感じの窓しか開いていなかったのだが、そこから見える地面は途方もなく低かった。

（あ、そういえばお城って部屋を縦に積み重ねているんだっけ？）

建物を大きくするのに、横に広げる代わりに縦に広げようという発想は分かるけど、そんなことをしたら重みで一番下の部屋とかがぺしゃって潰れそうな気がする。

まあでも、実際にこんな風に部屋が縦に積み重ねられた建物があるのだから不可能ではないのだろう。

だけど、ここで問題になるのはどうやって地面に降りるかという事だ。まさかここから飛び降りても足の骨を折らないという事は無いのだから、どうにかして降りる手段はあるのだろう。

あたしは改めて窓の下を覗く。ここに着た時には目隠しをされていたが、まさか兵隊さんがあたしを担いでこの城壁をよじ登ったわけではないと思う。

「あ、梯子か」

あたしは木の、高いところに生なっている果物を取るときに使うはこのことを思い出した。長い長い梯子があればここまで登ってくることもできるだろう。

（でも、ここから梯子持つてきてくださって叫ぶわけにも行かないわよね）

そんなことをしたら元も子もない。鍵を取り上げられて牢屋にもう一度放り込まれてそれでおしまいだ。

あたしは仕方が無く、窓枠をまたいだ。

（えーい。女は度胸よ！）

確かそんなことを昔言っていた人が居た気がする。

女は度胸と尻と太もも………だったっけ？

（度胸は解かるけど、どうして尻と太ももなんだろう？結婚してからは亭主を尻に敷いて太もものマッサージをさせるって事かなあ？）

あたしは度胸でもう片方の足も建物の外側に出して
びゅーん。

きやあ。

てな感じに、急に吹いた突風に驚いてイモリのように城壁に張り付いた。

あ！

気がついたら体が全部建物の外に出ちゃってる！

つまりあたしは今手と足の力だけで壁にへばりついているわけで。カッチンコって、怖くて固まっちゃった！

一人しか居ないのに妙にシリアス。

何で悪役も居ないのにこんなに緊張しているのかと思うと情けなくて涙が出てきた。

けれど、ここで気を抜いてはイングリットの・・・・・・じゃなくて、イングリット・コスモ・イタカの名折れ。そう心に念じて、あたしは匍匐後退を開始した。

・・・・・・亀並みの速度で。

城壁に起伏はほとんどない。フェリントーナから輸入した建築技術だろう。

あたしは八歳の女の子が城壁を這い降りなければいけないという事態も想定しないでこの城の設計をしたフェリントーナが嫌いになった。

フェリントーナが他の国にやや嫌われる傾向にあるのは、うまく立ち回って甘い汁をすいつづけているということもあるだろうが、こういうところもあるに違いない。

とりあえず生きて再び地面に立てたらフェリントーナに苦情を申し立てる手紙を書こうと思いつつ涙を流す。

そろそろと城壁を這い降りる。

そろそろ。

そろそろそろそろそ・・・・・・ろ・・・・・・（ちよつと休憩）そろそろそろ。

イモリのように壁に体を貼り付けての行軍は案外疲れる。

あたしは痛くなって熱を持ち始めた手をフーフーしようと両手を離

した。

手は真っ赤にはれていて、ところどころ城壁の形に歪んでいる。あたしはもう一度恨みがましく城壁を睨みつけて、それからきょとんとした。

城壁と手を交互に見比べて、かくりと首をかしげる。

状況確認。今、あたしは両手両足を使って起伏の少ない城壁にしがみついていたわけで……って、

（手、離しちゃ駄目じゃん！？）

頭の中が真っ白になると同時に体が傾いた。とっさに思い浮かべた顔はロッキンツォンさんのもの。でもいくらロッキンツォンさんでもご都合主義にここに表れたりはしないだろう。

あたしはぎゃーっと悲鳴をあげることもできず、引きつった笑みを浮かべながらまっさかさまに転落していった。

第八幕前編。再び、イングリット（後書き）

マサは、迷子になった挙句に世界を一周した経験があります。

第八幕後編。

「命を救うのは、これで二度目でしょうかね？」

聞いたことがある声に呼び戻されて、あたしは目を開けた。城壁から落ちた瞬間にとっさに目を閉じたのだが、いつまで待っても体を砕くほどの衝撃はやってこなかった。

代わりに背中に感じたのは、ポカポカ暖かい手の感覚。目を開けると、ほっとした表情のロッキンツォンさんが居た。

「ロッキンツォンさんっ！」

とっさにぎゅっとしがみつくと、ロッキンツォンさんは困ったように頬をぽりぽりとかく。それからあたしをおろして、「怪我はありませんか？」と聞いてきた。

「……まったく。空から女の子が降ってくるなどという話はいまどき三流芝居でも取り扱わない話題でしょう。そもそも、受け止める側も女の子だとしたらこれから先どうラブロマンスを展開したらいいかわからないじゃないですか」

呆れ混じりにそういいながらも、本気でラブロマンスの展開方法とやらを思考しているロッキンツォンさんの顔はちよっとおかしかった。ぶつぶつと、「私は宰相とは違って両刀使いではないんですが」とか、「せめて年齢の差とか身分の差とか、そういう分かりやすい障害がないと恋は燃えませんよね」とか呟いている。

「……両刀使い？」

恋愛するには片方が剣士でなければいけない理由でもあるのかな？ロッキンツォンさんは「まあ、いいでしょう。これについては今後

の課題という事にして保留しておきましょう」といってあたしに向き直った。

「それにしても、貴方は何で空から降ってきたんですか？階段に張りでもいて、逃げ出すことができなかったんですか」

「へ？カイダン？何それ？梯子みたいなもの？」

「……いえ、はい、まあ梯子みたいといえばそうなのですが……そうですね、貴方には高層建築物に関する知識がないんですね。帰ったらお見せしますよ、魔女の館の地下室に行くのにも階段が使われていますから」

「？ロッキンツォンさんの言うことはよくわからないわ」

私は目をぱちぱちとした。

ロッキンツォンさんは苦笑して、「帰ったらお見せしますよ」といった。

それからちよつぱり遠い目で私が閉じ込められていた牢屋を見上げてから、私のほうを向き直った。

「いま、私の姉が貴方を解放してもらえるように宰相に掛け合っています」

それが、ロッキンツォンさんがここに居る理由なのだという事はすぐに分かった。

「私は傍にいても足手まといになるだけなので、城の中庭で暇つぶしをしているわけですが、とりあえず」

貴方が腐死病だということ、隠していて御免なさい。と、ロッキンツォンさんは頭を下げた。

「私にも、私の姉にも、ああいう事態は想定できなかったんです。貴方の村の事情を聞いていたので、もう少し貴方が落ち着いてから教えようと思っていたのですが、それが裏目に出てしまったことについては残念に思います」

「……うん、まあ、いいけどさ」

怒る前に謝られてしまったのは、あたしのほうから詰問することは出来ない。

ちよつと卑怯だと思った。

「つきましては改めて貴方の今の状況について改めて説明させていただきます。立ち話もなので、歩きながら話しましょうか」

まるでお役所仕事のようなロッキンツォンさんの言葉に、あたしは首を傾げつつもうんと頷いた。

結論から言えば、魔女の館で宰相閣下にロッキンツォンさんが言った事は真つ赤な嘘だった。あたしは腐死病に対する免疫など持って居なくて、腐死病の潜伏期間が終われば数日で死に至る状態らしい。あたしは、特別ではなかった。

村の人と同じように、腐死病によって死に至る存在だった。

「姉と宰相閣下の交渉が終わったら、貴方に蒼人參を投与します。もう裏技が使えるような悠長な状況ではなくってしまいましたし腐死病の潜伏期間は過ぎてしまいましたから」

「うらわざ?」

「姉が貴方に飲ませていた、苦いほうの薬ですよ。あれによって新陳代謝を抑えることで腐死病の進行を遅らせ、蒼人參が実る春まで持たせるつもりだったんです」

なるほどなるほど。

だからあたしが何の薬か聞いたときにも魔女さんは言い淀んでいたし、ロッキンツォンさんは惚れ薬だなんて言い訳したんだ。

……いや、惚れ薬はさすがにないと思ったけどさ。

「じゃあ、あのおいしいほうの薬は何だったの?」

「それはすでに姉が説明していると思いますが、あれはただの栄養剤です。魔女の館に来た当時の貴方の体調では到底固形物の消化は受け付けられなかったでしょうからね」

ふうん。

あたしは、魔女によって寿命を延ばされてたのか。

結局は、腐死病で、生き残ることができたのは……あれ?

「ロッキンツォンさん。あたしが王都に居るって事は、ひょっとしてあたしから王都の人たちに腐死病が伝染してしまうって事じゃないんですか?」

「直接的に貴方から、という事はありません。宰相閣下の事だから貴方の居る場所には誰も近寄らないようにしていたはずですし、王都に来る途中はまだ潜伏期間でしたからね。運がよかったんですよ」

そっか。

何はともあれ、あたしから腐死病が伝染しなくてよかった。もしもそんなことが起きたらあたしはあたしが許せなくなってしまうだろうから。

それにしても、延命措置の方法があるんなら何で魔女は他の人に教えないんだろう？

「延命措置が取れる場合というのが限られているからですよ」

ロッキンツォンさんがあたしの心を読んだようにそういつて、あたしは思わずびっくりしてしまった。

「延命措置が取れるのは、腐死病に感染してから一時間以内とか、そういうとても初期段階だけなんです。貴方のように潜伏期間である場合は特例としていつでも延命措置が取れますが、そうでなければとても難しいことなのだということはわかるでしょう？」

あ、うん。

感染後一時間じゃ、黒子ぐらいの大きさのしみがあるかないかってぐらいだもんね。年がら年中腐死病に感染する可能性について考慮している人なんて居るわけがないし、気づけたら奇跡だろうね。

「そして、これまた貴方のような潜伏期間の患者は例外になるわけですが、延命措置を行うと困った事が起きてしまうんですよ」

また、あたしは例外かい……

本当はいいことなんだろうけど、なんか仲間はずれにされた感じで妙に気分が悪いなあ。

「すなわち、腐死病の暴走です。場合によっては『怒る』とも言いますが、延命措置を取ると腐死病の感染力は急激に上がって、それこそ国一つがあっさりと全滅してしまうぐらいの感染力を持っています」

「す、すごいんだ……」

国が減びるって言われた……

規模が大きすぎてあたしの頭じゃ理解ができないけど、一体どれだけの人間が死ぬんだろう。

あたしは背中に冷や汗をたらしつつ、ロッキンツォンさんを見る。

ロッキンツォンさんはあたしとほんの二歳違いらしいが、身長が高くて歩幅が大きいのであたしがロッキンツォンさんと一緒に歩こうとすると少し早足にならなくてはいけない。そのためロッキンツォンさんがゆっくり歩いているつもりでもあたしの額には努力の汗がにじみ出ていたりするのである。

「まあ、それはそうとして、今後の貴方の処遇ですが」

急にロッキンツォンさんが立ち止まって、慌てて停まろうとしたあたしの足ももつれた。

わ、わ！ 転ぶ！

すごく冷静なロッキンツォンさんがすばやくあたしの体をキャッチ。ちゃんと立つのを手伝ってくれてからもういちど、「今後の貴方の処遇ですが」と言った。

「腐死病が治ったとして、貴方に身を寄せる宛てはありますか？ な

いとして、自分で何処かの町や村に行って生活費を稼ぐ事ができますか？」

あたしはぶんぶんと首を横に振る。頼れる家族も、一緒に何かをしてくれる人ももう居ない。それはあたし自身がコスモスに言った事。自力で生活費を稼ぐと言うのも却下だ。仮に腐死病が直っても、腐死病で滅びた村の住人だというだけで周囲の風当たりは冷たい。あたしが子供だと言う事もあって、どこに行っても邪険にされるのは想像ができた。

今後の先行きが急に不安になって肩を落としたあたしに、ロッキンツォンさんは眉をしかめる。

「プライベールという町を知っていますか？」

ロッキンツォンさんは、全く関係がない話を始めた。

「魔女の館から歩いて一日ぐらいのところにあるちいさな町です。貴方の知的レベルの低さから判断して私が何を言いたいのかあなたには全く理解出来ていないと思うのではつきり言うと、その町は一度、腐死病に滅ぼされかかりました」

あたしははっと息を吞んで、それから首をかしげる。滅ぼされかかったと言う事は、滅ぼされなかったと言う事だろう。腐死病でも滅びなかった町の存在など聞いたことがない。

「ベンド山という山の山奥にある少し閑散とした町なのですが、その時期がちょうど狩りのシーズンでしてね。町の伝統の熊狩りのために大半の男性と一部の女性は町を離れて山にこもっていたんです。だから町に居たのは留守番に残った女性や子供たちだけでした。運がよかったと言うべきなのか、腐死病が流行ったのはちょうどそん

なときだったので、大半の人間は難を逃れる事ができたんですよ」

「……………運がよかったなんて、いえないでしょう」

熊狩りに参加しなかった女性や子供なんかの弱い人間だけが腐死病で死んだと言う事なんだろう。

町は滅びなかったかもしれないけれど、それは幸運ではない。

生き残った人間がどんな気持ちになるのか、あたしは身をもって知っている。

「そうですね。生き残ってすまないと零していた人も確かに居ました。ですが、口に出して言う人こそ居なかったものの大抵の人間は運がよかったと思ったようですよ」

「……………そうなんだ」

そう思う事が悪いと言うわけではない。

現にあたしだって心の片隅で自分はラッキーだったと思っている。今あたしが生きているのは、村の人達があたしに生きて欲しいと願ったからなのに、自分が幸運だったんだと思ってしまうている。

生き残ってよかったと思う、醜い自分が居る。

その気持ちに向き合って、生きていかなければいけないのだろう。

「貴方が知っている人間で、プライベールの生き残りは三人います。一人はこの国の宰相、ナタリエル・テリテマ・ゲンテリリエール・トマコ・チェミエンス・ニヤマラ・スズラヒ・レノハ。そして森の魔女、サチ・アデライト・ジェディラル・マダリテリテールティング・メズアマティティルト・ハルと私、サチ・アデライト・ジェディラル・マダリテリテールティング・メズアマティティルト・ロッキンツォンです。あと、その服に頭の悪そうな字を書いた方と

貴方が知り合いなら、ナタリエル・テリテマ・ゲンテリリエール・トマコ・チェミエンス・ニヤマラ・スズラヒ・レノハ・コスモスさんも一応あの街の人間の血を引いていますね」

あたしはぼんやりとロッキンツォンさんの話を聞いて、暫く立つてそれが人の名前なのだと漸く気がついた。

……長いよ!!

まあ、名前の長さが本題じゃないので、突っ込みは避けておくけど。

「ロッキンツォン、さん？」

「そう。私や姉や宰相は、運よく腐死病から逃れることが出来たプライベールの生き残りなのですよ。……まあ、私や姉は熊狩りに参加したから生き残ったわけではないんですけどもね」

まあ、そこはいろいろとややこしい事情があるのですが、省かせていただきます。と、ロッキンツォンさんは言って苦笑した。

「宰相も、元は平民だったんですよ。でも腐死病に感染したプライベールの人たちを救うために王都まで直訴に行っただんです。当時は流血沙汰とかもあって処刑台に立ったこともあるそうです」

「そ、そんな人に宰相やらせてるのかこの国は……」

「それで結局彼は、『テメエが何にもしてくれねえって言うなら俺が何とかするから、俺に権力よこしやがれ!』って国王に唾を吐きかけて宰相の地位に納まったそうです」

「……い、いろいろ型破りなのね」

王様も、宰相閣下も。

「さて、本題から逸れてしまいましたね。話を戻しましょう」

そういつてポンと手をたたくロッキンツォンさん。なんだかロッキンツォンさんの言葉や言動には人を惹きつける力があるような気がする。演説上手だ。

魔女から、魔女の住んでいた町が腐死病あったと言う話は聞いていたけれど、こうして改めてロッキンツォンさんから具体的な名前を挙げられると話の重さが変わってくる。

「解かりますか？貴方も私達も、同じように腐死病によって家族を失ったんですよ。人を殺し、本来人と人との間の絆を切り裂く存在であるはずの腐死病が、貴方と私達をめぐり合わせたんです。これもまた、縁、なんでしょうかね？」

腐死病が、人を結び合わせる。

同じ生死の苦しみを知っているものどうしの絆と言うのは、ひょっとしたら家族の絆よりも強いかもしれない。

腐死病が絆を結ぶとは、奇妙な事もあるものだ。

「そこで、姉からの提案です。貴方、森の魔女のあとを継ぐ気はありませんね？」

「え？魔女？しかも何で否定形で問い？」

あたしは一瞬目をぱちくり。

「縁、ですよ。腐死病で家族を失ったもの同士、寄せ集めで新しい家族を作っちゃおうという姉らしいじつに本能的な発想です」

ちょ、ちょっと待って！

あたしに森の魔女の後を継げと！？

「無茶だー無茶言っなーッ」

「ええ、それで構いません。姉の後を継ぐ気はないと、そういうことですね？」

改めて確認され、ぐっ、と答えに詰まる。

ロッキンツォンさんはなぜか厳しい口調。・・・・あれ、ひょっとして今あたし、責められてる？

「・・・・そういうわけじゃ、ないけど。身寄りがないのは確かだし」

あたしがそういうと、ロッキンツォンさんはあたしを指差した。

いや、正確には、あたしの服を、だが。

コスモスが血で文字を書いた、服の上を。

「コスモスさんとお知り合いのようですが、あの方に頼るわけにはいかないのですか？」

「・・・・それは」

わからない。

「正直なところ、あたしは貴方に姉の後をついで欲しくないと思っています。それは貴方が魔女として必要な知識を身につけられるだけの頭のデキをしていないと言う事や貴方みたいな破天荒そうな方

が魔女になったら国の恥だとか言う事以前に、魔女になると言う事は、人ならざるものになると言うことですから、人間として培った絆は捨てなければいけませんし、人間と心を通わせあう事もできなくなります。基本的に、魔女は　　独りです」

独り。

イタカの村を去った後のように、独りになる。

「もちろん、姉の傍らに私がいるように、貴方が魔女になっても俗世から隔離されるわけではありません。貴方に好意を感じる人間もいるでしょうし、あなたも他の人と変わらないといってくれる人も居るでしょう」

でも、とロッキンツォンさんは言葉を区切った。

「魔女と人間がわかりあうことは出来ません。人間にとって大切なのは『人』であって、当たり前のように人間を優先させます。人を食う獣を『悪』とみなして追い払い、庭に救う雑草を『害』とみなして刈り取ります。それは人間を主体として考えているからです。人間から見れば害悪であると……それは、間違った考え方ではありません」

確かに。

人は、危険だといって熊を狩る。熊は害獣と呼ばれる。

人は、食べるために兎を狩る。兎にとって人間が害獣だとは誰も思わない。

「けれど、魔女にとっては違います。獣が人を食らうのも人が獣を食らうのも同じ事。腐死病が人を殺すのも、魔女にとっては自然の摂理であって悪ではないのですよ」

あたしはハツとした。

魔女には腐死病を止める力がある。けれど、魔女であるからこそ腐死病をとめてはいけない。魔女にとって人間は最優先すべきものではないのだから。

魔女は、人のために存在するのでは、ないのだから。

「一応、もう一度問います」

森の魔女とロッキンツォンさんだけを家族として、人間を捨てて魔女の後を継ぐ気があるのか、それとも人間のままでいるか、決めろとロッキンツォンさんは言った。
答えなんて、決まってる。

「貴方は森の魔女になる気がありますか？」

「もちろんよ」

「もちろんすぐに答える必要はありません。この件が終わってからはい？」

理解できなかったらしい。
じゃあ言い直そう。

「森の魔女に、なります。だって当たり前でしょ？あたしはイタカの村で、切り捨てられる存在だったから切り捨てられたのよ。森の魔女が孤独だと言うなら、逆に言えば魔女さんはあたしを絶対に裏切れないって事じゃない」

「ぜったい、ですか？」

「形のあるものはいずれ失わるわ。あたしはそれを知っているから、絶対ってものに憧れるの。何かおかしい？」

ロッキンツォンさんはがりがりとき立たしげに頭をかくて、時々舌打をしたり唸り声を上げながら考え込んでしまった。あたしを魔女にしたくないと言うのはどうやら本当の事らしい。

「わかりました」

やがて、ロッキンツォンさんは言った。

「帰ったら、一緒にチョコレートケーキを焼きましょう」

「・・・・・・一緒に？」

一緒に何かしてくれる人はもう居なくなった。
昔から家族が欲しかった。

ロッキンツォンさんは微笑んだ。

「そう。あなたと、私と、森の魔女の三人で一緒にですよ。だって、家族なんですから」

第九幕前編。再び、イーマ

「コスモス、湯加減はどうだ？」

「服を着て今すぐ出て行け不埒者！」

私が風呂場に入るなり、何故か飛んできた風呂桶に吹き飛ばされて私は風呂場の外の壁に叩き付けられた。

「ひどいぞコスモス！昔から親睦を深めるためには裸の付き合いと言うのを知らないのか！？」

勿論私だつて女性の風呂に入るつもりはない。これは腐死病のことで気が滅入っているコスモスを元気付けるためのお茶目なスキンシップだ。

「おぬしは親睦を深める前に思慮を深める事じゃな！」

「そんなつ！昔はよく一緒に入ったじゃないか！」

「・・・・・・・・」

返ってきたのは何故か沈黙。ここで、「子供のころの話じゃろうが！おぬしは自分が一国の王子であるという自覚があるのか！」という答えが返ってくることを予想していたので拍子抜けしてしまった。

「・・・・・・・・一緒に風呂に入ったことなんてあったか？」

「忘れてるのか！？昔はお前のほうから俺の風呂に入ってきたもの

なのに」

わざと愕然としたような言い方をすると帰ってきたのはまたもや沈黙。

「……じゃあ、いいじやろう」

一緒に入って良いの!?

私は脊髄反射の勢いで風呂場に飛び込んだ。

「コスモス。背中流しっこしよう。でもその前にお湯かけっこしよう!」

「おぬしは子供か!? 自分が王子である事をちよつとは自覚しろ!」

何故かまたもや風呂桶が飛んできた。しかし今回は予想の範囲内だったので軽く体をひねってよける。

そのまま浴槽へダイブ!

「へぶっ」

久しぶりに、一子相伝城下町仕込超高度三段階式踵落しコスモス流が私の顔面に炸裂して、私は風呂の底にたたきつけられた。ちなみにこの風呂、王族専用の風呂で無駄に広いし無駄に深い。ライヒビに三つしかない天然の湯源の内の一つを利用しているのだが、数十年に一度前兆なしに沸騰するという非常に危険な風呂だと言う命にかかわる、なんとも恐ろしい風呂場だ。

だが、そんないわくはとりあえず関係がなかった。

誰彼構わず踵落しを食らわすなんとも恐ろしいゴリラが住み着いた以上、もはや風呂場は一年中安息の地ではなくなった。

「誰がゴリラじゃ！」

再び私の脳天に振り下ろされる一子相伝城下町仕込超高々度三段階式踵落しゴリラ流。
いっしそんでんじよあまちじこみちようこうこうどさんだんかいしきびすおと

デブ豚でもこれだけの重量はないだろうと思うほどの重い一撃は再び勇者を地面へとたたきつける。

もはや駄目かと思ったが、勇者は再び立ち上がった。

「さあ来い！貴様の一子相伝城下町仕込超高々度三段階式踵落しデブタ流などこの私が跳ね返して見せよう！！」
いっしそんでんじよあまちじこみちようこうこうどさんだんかいしきびすおと

「なっ！？貴様今可憐なわたしのことを豚と言ったか？！豚と言ったか？！……ええい、そのような無礼を許しておけるか！そこに直れ、私の一子相伝城下町仕込超高々度三段階式踵落し天誅流で改心させてやるわ！」
いっしそんでんじよあまちじこみちようこうこうどさんだんかいしきびすおと

「来い山猿め！イーマ様が相手をするからには明日は無いと思えよ！」

「貴様 言っている事といけないことがあるだろう！だれが直視すらも出来ない醜いブタザルだ誰が！？」

「自分でより語彙を悪化させている！お前はマゾか？」

「だから誰が悪臭ブタゴリラかと聞いておろうが！？」

ぎしゃーっ。と爪をむき出しにして猫のように飛び掛ってくるコスモス。

私たちはそのまま掴み合いと引っかき合いの乱闘に突入してしまっ

た。

体格的には男である私のほうが勝っていたが、城下町に足繁く通っているコスモスも私に負けず劣らず喧嘩の仕方を見つけていて、私とほぼ五分の戦いを見せていた。どたんばったんと風呂場の中を転げまわった結果、両者ともまともに立てなくなるぐらいまで疲弊してひとまず休戦と言う事になった。

「済まなかったな。わっちとしたことがつい熱くなってしまった」

「む！先に謝るとは卑怯なやつめ。お前が先に謝っては、私はお前よりも聞き分けがない子供じみた奴と言う事になってしまうではないか」

私はそういつて？^{むく}れてみせる。コスモスはそんな私をややあきれた表情で眺め、それからどちらからとも無くぷつと吹き出した。

再び湯に浸かったコスモスと湯に浸かった私。体中に出来た傷に湯がしみて痛かったが、それが生きている事を私たちに痛感させた。私は改めてコスモスを見る。こうしてコスモスと語り合うのも最後になるかもしれないという不安と、腐死病になってもコスモスがいっつものように笑っているという喜びで、私の胸は満たされていた。

「思えば、お前も大きくなったものだな」

「なっ！そういう卑猥な台詞をレディーの前で言っな！」

「え？あーいや、性的な意味では無くて、こう、もっと広い意味でだな、昔とは変わったと」

「そうか？」

疑わしげな声。

コスモスに言わせれば、変わってしまったのは私のほうだろう。人の心の本質は小さい頃に形作られて変わらない。変わるのはあくまでも心の外堀の部分だけだ。

昔に戻りたいとは思わないが、昔のほうが幸せだったような気がする。今だって幸せだと言えはそうなのだが、昔に戻りたいかと聞かれれば私もコスモスも迷い無く肯と答える^{はい}だろう。

昔の時間も、今の時間も同じように大切ならば、失ってしまったもののほうがより重く感じられるものなのかもしれない。

昔の詩人は、こう謡った。

人は過去に思いを馳せては「あの頃はよかった」と言い、未来に思いを馳せては「きつと今よりいいだろう」と言う。未来と過去はいつだって、明るい光に満ちている。

コスモスの嫌いな謡だ。

未来や過去に目を配っていても、今だから手に入れられる幸せを見逃してしまうじやろ。と、そう言っていた。

私にとって今の幸せは、こうしてコスモスと何気ない時間を積み重ねていく事なのかもしれない。

「お前は変わったよ。昔は清楚でおとなしくて優しくて草花を愛でるような優雅さを持ち合わせた、人のことを気遣える子供だった」

「それはあれか？昔おぬしが気品あふれて紳士的で穏やかで、十人いれば十人が振り返るような美貌を備えた、とても親孝行な殿方じやったのと同じことか？」

素早く切り返すコスモス。

口の悪さは変わらない。

そして、私は気づく。

過去においても現在においても未来においても、私の幸せはいつもコスモスだと言う事に。

「前言撤回だ。お前は変わらないな」

私の中でコスモスがとても大きなものだと言う事には変わりはない。それがイーマ・ライヒビの本質なのだろう。

「それはお互い様じゃろ」

コスモスが言っ

て。なんとなく、お互いに言葉が詰まった。けれどもそれは何を話したらいいいのかわからない重苦しい沈黙ではなく、お互いに、音の無い静かな空気を楽しむような穏やかな沈黙だった。絡み合うお互いの視線が、言葉よりも雄弁にお互いの気持ちを語っていた。

「のう、イーマ。一つだけ言わせてくれりゃ」

やがて、ぽつりとコスモスが言った。

「わっちはいつか死ぬ。例え腐死病ですぐに死ぬ事が無くとも、老いが来れば人はいずれ死ぬものじゃからな。イーマのほうが先に死ぬかも知れんが、わっちだっていつまでも生きられるわけじゃない。イーマよりも先に死ぬ可能性も充分あるじゃろ。じゃがな、イーマにはそれで自分自身を責めてもらいたくないのじゃ。おぬしは優しいから、知人の不幸を何でも自分の責任に転換してしまうところがある。じゃから、忘れんでおいてくれ。いつ、どこで、どんな死に方をしてもわっちは幸せに死んでいったと。おぬしが後悔せねばならんことは何も無いのじゃと。おぬしがわっちを幸せにしてくれたのじゃとな」

コスモスは胸に手を当てていう。大切な言葉を紡ぐように。

「わっちは、イーマに出会えてよかった。イーマが例え森の魔女にうつつを抜かしてわっちの事をちつとも構ってくれなくても、わっちの愛しているのは……」

と。

そこで、せつかくいい空気だったのに、ぶち壊す奴がいた。

私はそれまで静寂を守っていた風呂場の扉をばたんと大きく開けて、コスモスの言葉を遮った空気の読めない奴をにらみつけようと扉のほうを見た。

噂をすれば影が差す。

森の魔女が、息を切らしてそこにいた。

「な、何をやっているんですか貴方たちは！」

ハルは私たちを見るなり美しい柳眉を吊り上げた。

「だーっ。申し訳ない申し訳ない申し訳ない申し訳ない私としたことが魔女殿と言うものがありながらこんな悪臭ブタゴリラに誑かされてしまうとはどう言い訳したらいいか分からない。ここは体で払って罪を償わせてもらおう!!」

私はコスモスと二人っきりで風呂に入っているのがハルの不況を買ったのかと思ってそう謝り倒したのだが、ハルはより一層鋭いツラのような軽蔑の視線を私に向けただけだった。

「・・・・・・・・イーマ」

と、背中ofすぐ後ろからなにやら物凄くどす黒い気配を感じる。
それがコスモスのものだといふことはすぐに分かつた。

前門の魔女、後門の悪臭ブタゴリラ。

悪臭ブタゴリラのほうgまだまだだと判断してコスモスに声をかける。

「なあ、コスモス」

「うるさい黙れそして死ね」

取り付く島も無かつた。

むしろ心の孤島に取り残された寂しさがあつた。

仕方なく魔女のほうを向く。

「なあ、魔女殿」

「あなた、本当に延命措置には代償が無いと思つたの？」

魔女のほうgまだましのようだ。

つて・・・・・・・・・・は？

「延命措置にはね、当然対価を伴うの。貴方が延命措置に半信半疑のようだつたし、そもそも延命できる段階で腐死病が見つかる事が稀有だつたからあのときには教えなかつたけど、延命措置を施すと腐死病菌は怒り出して、感染力が飛躍的に上がるのよ。それこそ、コスモスさん一人を感染源にして国中に腐死病が蔓延するぐらいにね」

私の顔から、表情が抜け落ちた。

そうだ。確かにあの時、私は疑問に思ったはずだ。

こんな方法があるなら、なぜハルは今まで隠していたのか、と。

あの時ハルは、この方法が使える機会がないだろうからだと言えたが、それは隠していた理由にならないことは私自身理解していた。

教えたところで大して意味がなくても、教えたことで一人でも救えるかもしれないと思えば、ハルは惜しげなく知識をさらけ出す人だが、もうそんな過去のこととは関係がない。事実として過ぎ去ってしまったって、私は選択肢を選び終えてしまった。

天秤の片側が空だといっていたのは、いったい誰だったろうか？

コスモスと国民と、天秤にかけるのを嫌がって現実逃避した挙句、正しい取捨選択ができなかったのは、ほかの誰でもない、この私だ。そしてそのしわ寄せがこれだ。

森の魔女は、王子である私に対して国民全員の死刑を宣告したのだ。

「嫌じゃ………嘘じゃろう？」

そして、私よりも衝撃を受けているのは、その手で国民を殺すと言われたコスモスだ。私の犯した罪にもかかわらず、コスモスにまで罪を背負わせてしまっている。

無力なら、せめて自分だけで罪を背負えばいいものを。

イーマ・ライヒビは、自分のケツすらも女に拭わせるような愚図だったのか

コスモスの顔は真っ青になり、風呂に入っているにもかかわらず寒いかのようにがたがたと震えている。

いや、違う。

コスモスが恐れているのは国民の死ではなく知り合いの死。私や、城下町の知人たちの顔が頭に浮かんでいるのだろっ。

私もコスモスのように目の前のことだけに気を配っていればよかったのかもしれない。

それが言い訳だということは判っているけれど。後の祭りだということもわかっていているけれど。

「魔女でも、馬鹿につける薬は持ち合わせていないわ」

まるで私の考えなど見透かしているようにそういつて、魔女は冷ややかに笑った。

第九幕後編。

「でも、コスモスさんと貴方の生命だけは、私が名誉をかけて救います」

ハルはそういつて、何かをどぼんと風呂場に放り込む。やがて流れてくるひんやりした空気で、私はそれが巨大な氷であつた事を知つた。

氷と聞いて思い浮かぶのは、植物を長期にわたつて保管するための氷漬け技術だ。生で無ければ効果を發揮しない薬草は、一度ハルフアナに輸出され氷漬けにされてから再輸入される。それを日陰で保管して、何とか必要な時まで鮮度を保つのだ。

そして、腐死病のための薬草と言えば一つしかない。

蒼人参

人参のような橙色の根と、蒼い実をもつ稀少な薬草。

すぐに、青い実が湯の上に浮かんできた。

ハルはそれを腰につるしていた別の薬草と大雑把に混ぜ合わせて、無造作に私とコスモスに差し出した。

「半分こ、しなさいね。コスモスさんだけではなくて今は貴方も腐死病に感染しているのだから」

ハルは、いつものように幼い笑顔で笑つた。

「魔女殿、これはちゃんと二人分あるのか？」

「ないわ」

ハルは当然のように、二人分の薬を持っていないことを告げた。

「でも、コスモスさんは貴方を差し置いて一人だけ薬を飲んで助かるうとは思わないだろうし、貴方はコスモスさんを助けるために何とか薬を飲ませたいと思うでしょう？それで二人とも薬を飲もうとしなかったら、薬がある意味が無いじゃないの」

「いや、私が言おうとしているのはそうじゃなくて

」

私は、それが誰のための薬であるのか聞こうとして、止めた。

これがイングリットを助けるための薬であることは間違いが無い。わざわざ重い氷の塊を王城にまで持ってきたことを考えても、もう、イングリットの死は秒読みなのだろう。ここでイングリットの名前を出せば、ハルは迷った末にイングリットを選ぶだろう。今は、ただ死を目前にした私たちを見て感情的になっているだけだ。時間を置けば冷静さを取り戻す。

「さあ、どうしたの？半分だから一人分には満たないけど、薬を飲んだ上で延命措置を行えば、腐死病だって何とか退治できるわ。さあ」

おずおずと、コスモスが手を伸ばす。コスモスが握ったのは、薬の半分。

残る半分は、イングリットの方では無くて私の分。

私はコスモスとハルから目を逸らすようにして、受け取った蒼人參を飲み下した。

「イーマは悪くないからな」

ハルが風呂場から立ち去って、暫くたった頃、ぽつりとコスモスは呟いた。

それが、一瞬「イーマが悪いんだからな」と聞こえて相当神経が参っているのだと自覚した。

いろいろと考えすぎるのが、私の悪いところだろう。

どうしても、魔女の言葉が頭から離れない。

コスモスが目の前に居るのに、コスモスが目の前にいるからこそ、他の事について考えてしまう。

腐死病が国中で蔓延していることについて考えてしまう。

自分がコスモスに対処療法を教えなければ、被害はもっとずっと小さくて済んだのにと後悔してしまう。

けれど、ああ。

ここで私が罪悪感を抱くことは、コスモスにも罪悪感を抱かせる事になってしまう。

とりあえず、国民の事ではない。

コスモスのことだ。

「ところで、コスモス。おまえ、魔女殿が来る前に何かいいかったよな？」

「え？」

ぼんっ。と言う感じでコスモスの顔が唐辛子のように真っ赤に染まった。

「そ、そうか？ わっちは覚えていないぞ」

下を向いて落ち着き無く体をゆするコスモス。忘れたことにしてとぼけようとするコスモスのために私は口添えした。

「『イーマが例え森の魔女にうつつを抜かしてわたちの事をちつとも構ってくれなくても、わたちの愛しているのは』のところで中断されていたぞ」

私がそういつてコスモスの目を覗き込むと、コスモスはついと目を逸らした。

私がおその様子に含み笑いをもらしながら黙ってみていると、コスモスはおおずおと顔を上げて、それからまた俯いてしまう。暫くしてもう一度トライするも、結局は耐え切れずに視線を逸らしてしまう。私は調子に乗って、コスモスの視線を追いかけ始めた。

私が右行けば視線を左に逸らし、正面に立つと視線を上逸らし、逃げ道が無いと悟ったのかしまいには両手で顔を覆ってしまう。

「そ、その、じゃな」

ふいに、コスモスのほうから私に視線を絡めてきた。あまりに急な動作だったので思わず私が視線を逸らしそうになってしまう。そんな、真っ直ぐな視線だった。

コスモスの金色の髪が、紅く染まった耳が、首筋が、どこか潤んだ目が、かすかに震える首筋が、私の心の現に触れてときめきの音を奏でてくれる。

「わたちは、イーマのことを愛しちやる……これで満足か？」

最後の最後にはやっぱり目を逸らして。それでも大切な言葉ははっきりと紡いで。

コスモスはコスモスらしく愛の告白をした。

分かっていた事でも、実際にコスモスの口から言われた事が嬉しくて、私はコスモスをぎゅっと抱きしめてしまう。

それから、コスモスの肩を抱いた。

「私も、コスモスのことが好きだ」

私は誠意を持って答える。女王に忠誠を誓う騎士のように誠実に。ここで紡ぐ言葉に、嘘は無い。

だから、ここで思っていることをすべて言ってしまわなくては、これからずっと言えないだろう。

「私は、人とは少し考え方が変わっていて、突拍子のないことを平気でやって、自分の運命さえも認めようとせずに逃げてばかりいるどうしようもない男だ。だが、こんな私でもお前を愛している事に嘘は無い。お前の全てが好きだ。王家の血筋がお前のために全てを投げ出してもいいという私の願いを踏みにじってしまう事もあるだろう。誰かのために、お前のことを後回しにしなければいけないこともあるだろう。でも、忘れないで欲しい、コスモスが、私にとってかけがえの無い存在だという事には変わりがないのだと。私がコスモスのことを、心から好きなのだと言うことを」

だから、と私は一度言葉を区切った。

彼女に理解できるかどうかはわからなかったけれど、言葉にしておくべきだと思ったから。

「だから、辛いときに、一人で抱え込まないでくれ。コスモスは強いから、なんでも一人で抱え込んで、たいていのことは一人でも解決できてしまうだろう。苦しみも乗り越えられてしまうだろう。でも、一人で何でも出来なければいけないという考えは間違っていると思う。いつそ乗り越えないでくれ、解決しようとしなくてくれ。他人の手を借りる気が無いのなら、努力なんて放棄してしまえ」

それは、コスモスに言う言葉であると同時に、自分に向けて言う言葉でもあった。

だから、わかる。誰かを頼るという事が、口で言う以上に大変だということとは。

「一緒に、乗り越えて行こう」

どんな苦境も、二人なら、大丈夫。

他人に迷惑をかけないために自分だけが被害をこうむるように努力するのは、もう止めよう。

腐死病が王都で蔓延して、国民に散々迷惑をかけて、いつそ開き直ってしまったのかもしれない。それでも、いい。

権力を持つものとして生まれたのだ。それを使うべき唯一の時にくだらない悩み事にうつつを抜かしていたら、自分が軽蔑する、王位を押し付けようとしてくる兄たちにすらも申し開きが出来ない。

口だけで誰かを頼れといっても、それは無責任なだけだ。

誰かを頼れというなら、態度でしめそう。自分の持っている重いものを、コスモスの肩にも、半分乗せよう。

「腐死病を、退治しよう」

まずは、私から。

国が滅びかかっているというプレッシャーと、沢山の都民が死にかかっているという重責を、二人で分け合うことにした。

国家書庫

そこには、国の全てがある。

王家の人間のみがその書物を閲覧する事が許され、そこから得ら

れる知識は計り知れない。書籍数延べ七百万冊。石版記録が七十万枚。文化的価値のある絵画が七万枚。時代別の国の地図が七千枚。祖先が残した暗号と思われる書類が七百余枚。一部紛失してしまったらしいが、代々の国王の肖像画が七十枚。王家の家宝が七点。書庫と言つよりも既に博物館といったような国家書庫に、私の記憶が正しければ私自身始めて入る。

国の全てがあると言つ謳い文句は嘘ではない。だから、この国と腐死病がどうかかわつてきたのかも分かるはずなのだ。

「・・・・・・・・わからんな」

私は貴重な書物の一つをどさりと「読了済み」とかかれた箱に放り込むと、硬い木の椅子に寄りかかった。

国家書庫の欠点を上げるとするならば、それは整理の悪さだ。時代別に並んでいるかと思つと急に作者の名前順になつていたり、かと思つと王族の書いた書物だけは別枠に用意されていたりする。おまけにこの書庫を利用したであろう代々の王族が読んだ本を好き勝手な棚に突っ込んでいくから、ただでさえ混沌とした書庫の中がもはやカオスと化している。

それだけならまだいい。売ればそれだけで金貨何十枚分もの価値がありそうな本に落書きがされていたりするのは何でだろうか？

ひよつとして王族は王族でも、三歳児とかがここの本を閲覧しているのではないだろうか？

ついでに言つとその落書きの中になぜか見覚えがあるものがいくつも混じっているような気がするのは何でだろうか？！

「・・・・・・・・」

私は幼少のころに思いをはせた。

あー、そう言えばあの頃はお絵かき帳が無かつたんだっけ？

じゃあここに来たのって二回目か。

「なんじゃ、もう音を上げたか？」

コスモスが別の本を読みながら私を茶化してくる。

ちなみにコスモスは一度に三冊の本を読んでいる。目は二つしかないのにどうやって三冊も本を同時に読んでいるのだろうか。

「ふむ。こうしてみるとあれだな、まじめに本を読んでいるコスモスと言うのもなかなか可愛い」

私がそう言うを見ると見るうちにコスモスの顔が真っ赤になる。
あ、読む本の数が二冊になった。

「それで、そう言うコスモスのほうは何か進展があったか？」

「うむ」

「……あつたのか。」

「イーマ、わたちの仮説があっているか、検証してみて欲しい」

そういつて彼女が差し出したのはこの国の地図。それも時代別のもので十枚以上に及んだ。

そして、その地図のあちこちを埃だらけになった手で指差しながらコスモスは私に仮説を説いた。私はにわかには信じられなかったが、コスモスはちゃんと裏づけまで取っていた。

腐死病を撲滅する一縷の可能性が、コスモスによって示されたのだ。
った。

第十幕。再び、ハル

ここはどこだろう・・・・・・

地面を踏んで感じるのは、やわらかい土の感覚ではなく固い床の感覚。

息を吸って感じるのは、じめじめした森の空気ではなく人間臭い街のにおい。

下を向いて、顔が映るぐらいにつるつるに磨かれた床を見たとき、私は恐怖を感じた。

ここは、人間の縄張りだ。私のような存在が不用意に足を踏み入れている場所ではない。

右も、左も、上も、下も石で作られた壁に閉じ込められた、ここは人間の住む巢の中。

私が昔捨て去った古巢に、もう私の居場所はない。

冷静さを取り戻して初めて、自分がとんでもない事をしたのに気がついた。

（あの蒼人参はイングリットを救うためのものだった）

あの蒼人参は人間なんかのために使っていないものではなかった。

（あの、人間め）

あの小賢しい人間は私が蒼人参を誰のために持ってきていたのかちゃんと理解していたはずだった。それなのに冷静さを失った私をたしなめる事もせず、ぬけぬけと同属のために薬を使った。

人間にとっては人間を救う事が正義だ。

けれど、こうして魔女をだました事には罰を与えなければいけない。

腐死病でライヒビが滅びようと知ったことか。人間は自分たちの犯した罪を悔いつつみんな死んでしまえばいい。

「・・・・・・・・・・はあ」

気づいている。わかつている。本当は助けられない私への言い訳をしているだけだというのは自分自身で一番理解している。森の魔女はライヒビにおいて絶対の存在だ。けれど、森の魔女の力を持ってしてもここまで暴走してしまった腐死病は止められない。言ってしまえば、森は今私の声が聞こえないほどに怒り狂っているのだ。人の分を超えてまで生き残ろうとした愚か者どもに我を忘れているのだ。

「・・・・・・・・・・」

私はただ単に、ライヒビの人たちを助けられないのではないと、自分の意志を持って助けられないのだと思い込みただけだ。

助けたいと言う気持ちを自覚してしまったら、自分の無力さを悔いる事になるから。

魔女は人と森との境界線を守るための存在。たいていは人の側がその境界を乗り越えようとするが、今回は森のほうが悪い。私は魔女として森を諫めなくてはいけない。

森の怒りは理解できる。自分で勝手に腐死病にかかっておいて、運命を受け入れようとせずに無理矢理生き延びようとする人間に対して森が怒りを感じるのはもっともな事だ。けれど、それだけのことでは人を全て滅ぼそうと言うのはさすがにやりすぎだ。

私に、それを止める力は、ないけれど。

「あ、魔女さん！」

と、不意に後ろから呼びかけられた。

結局私が救えなかった少女の、無防備な声だった。

気がつかなかった振りをして歩み去ってしまうことは、私には許されない。

ちゃんと、ごめんなさいと言わなければ。

「……イングリット」

私がややためらいつつも、小さな声で少女の名前を呼ぶよりも、

「『魔女さん』ではなくて『師匠』ですよイングリット。呼び方は大切です。自分にとって相手がどんな立場にあるのかを明確にするためのものですからね」

聞こえてくるロッキンツォンの声。

まるで、姉妹のように和やかに会話する二人を見て、それからロッキンツォンの、『師匠』の意味に気がついて、私は下唇を噛んだ。

（言わなければ）

言わなければ。もうイングリットを助けることは出来ないと、イングリットは死んでいくのだと。

「ねえ、イングリット」

私は意を決して振り向く。

そこには、笑っているイングリットと、同じく笑っているロッキンツォンと、そして何故か彼らと共に愛想笑いを浮かべる宰相が居た。思わず、ロッキンツォンに問いたくなる。

あなたは、どちら側の存在なの？と。

でも、返ってくる答えが怖くて聞けない。ロッキンツォンが人の側にたつ存在だと答えたら、私は本当の意味で一人になってしまうか

ら。

早くイングリットを家族にしなければ。一人になる恐怖にはもう耐えられない。

ああ、でも。

ここで真実を話したらイングリットは私から離れていってしまうかもしれない。魔女が人間なんかのためにイングリットを蔑ろにしたと知ったら私の前からいなくなってしまうかもしれない。

私は結局、言葉に詰まった。

イングリットがそんな私の顔を不思議そうに見上げてくる。

「宰相閣下」

私は結局、イングリットのことを後回しにして宰相に向き直った。イングリットの前から逃げるように宰相に歩み寄る。

「コスモスさんのとった延命措置と言うのは、大きな対価を伴うものです。はつきりいうと、腐死病の感染範囲が爆発的に跳ね上がるんです。このままでは　　国どころか、大陸そのものが滅びかねません」

「……対処療法を王子殿下に教えになったとき、貴方はその事もちゃんと王子殿下にいったんですか？」

確認するように問う宰相。宰相は無表情で、私を責めるつもりなど毛頭無いようだ。

もつとも、責めても意味が無いと割り切っているだけなのだろうが。私は首を横に振って、もう一度イングリットのほうを向く。

「それでね、イングリット………いえ、ロッキンツォン」

結局は逃げるようにロッキンツォンのほうを向く。

「コスモスさんが腐死病に感染していたのよ。だから仕方が無かったの。それで……」

言葉を区切った私に、ロッキンツォンはまさか、と呟く。

「姉さんは、家族だと言った、大切だと言ったイングリットよりもコスモスさんのほうを優先させたんですか？」

針のように私の心に突き刺さったロッキンツォンの声は、しかし、怒気を含んでは居なかった。長い間一緒に暮らした姉妹だからこそ分かる、それは軽蔑だった。

ああ。

ロッキンツォンに、今、私は見捨てられた。

ロッキンツォンは宰相と同じ人間の側に立っている。

私は最後の希望のように、すぐるようにイングリットを見て、目を見開いたまま硬直した。

イングリットの着ている服。赤黒い模様の入ったややくすんだ色合いの服だと思っていたのだが、それは私がイングリットのために作った私とおそろいの植物で出来た服だった。

そしてその上に書かれている模様は、文字だ。コスモスさんの字で、イングリットを貴族にすると書かれている。

貴族は、つまり人間の階級。

イングリットも結局は人間を捨てられないのだ。

私の体の芯の部分が一瞬かつと熱くなって、それから急激に頭が冷えた。

（なんだ。私が苦しまなければいけないことは何も無いんじゃない）

守らなくてはいけない存在が無い事が、こんなに楽な事だとは思わなかった。

自分の周りに居るのがみんな人間なら、気を使うことは無い。

みんな、死んでしまつて構わない。

むしろ、早く死んでしまえばいい。早く死んでしまつてくれ。そうすれば、もう悩まなくても済むから。

自分が人間を捨てきれない事とか、人間が自分にとって何かとか、考えなくてもよくなるから。

宰相が近くを歩いていた部下を捕まえててきばきと指示を飛ばすのが、ぼんやりとした私には何故か遠く感じられる。人間が、人間を助けるために悪あがきをするさまを、こうして高嶺の見物と言つのも悪くない。

意識は遠く、まるで私は夢を見ているような心地だった。

気まぐれな心の波に揺られて、私の意識は遠く、遠く、と・・・お・・・く・・・

「えっと、事情はよくわかんないけど、まあ、師匠が病氣の人を放つて置けるような冷徹さを持っているとは思わないし」

私を現実へと引き戻したのは、意外な人物の言葉だった。

私はまじまじとイングリットを見る。

「だって、死にかかっている八歳の子供を可愛そうだからって言っ

て家の中に運び入れちゃうようなお人好しなのよ？あたしだって師匠がそんな人だったから今、こうして生きていられるんじゃない」

助けてくれてありがとう。と、イングリットは今更ながらお礼を言う。

今この瞬間にイングリットを見捨てようとしていた、その、私に向かつて。

数日前、魔女の館で言ったのと同じ暖かさで、違った親しみをこめて。

「ロッキンツォンさんから聞いたわ。魔女さんが、あたしを弟子にしようとしている事。あたしを家族にしてくれようとしている事、聞いたわ」

「………私を、許してくれるの？」

「いや、だからあたしは事情がよくわかっていないんだけど……
……まあ、とりあえず、許してあげるわ。だって、家族。家族だからね」

二度、繰り返すように家族といった。

この場において、三度、家族といった。

何度も言うつと軽く響いてしまうから、大切な言葉は胸の内にだけしまつて置くべきだと誰かが言っていたのを私は思い出す。けれど、それは違うと思う。

大切な人と大切な思いを分け合いたいと思う。言葉はそのためにあるのだから。

倉庫に山と積まれただけの宝に意味が無いように、口から紡がれない言葉など意味が無いのだ。

だってほら、この子の言葉が、私の心をこんなにも軽くしてくれる

んだから。

「師匠は、魔女だから大手を振って人を助けることは出来ないでしょう？ だったら、あたしやロッキンツォンさんのために頑張ればいいじゃない」

この子は、強い。

私は思わずそう思った。

「……まあ、そういうことなら私も姉さんの手助けをするのは吝かではありません」

私とイングリットの会話を黙ってみていたロッキンツォンが、楽しそうに笑っていった。

第十一幕。再び、コスモス

ライヒビ王国が誇る国家書庫内。

「ニミカカ山脈中腹にあったカニミ村、ジェマ村、政令都市ナグタール。コミユギ峠にあったビーマ村。死火山レノハ山のカルデラ内にあったマルク村。マニラ山カルデラ湖のほとりにあった漁業都市セメティレウス。シマ山にあった隠れ里ミルガン。リサ高原にあったケマ街、ノレマーヌ自治区。避暑地ロマヌ山、ベンド山にあり、今でも細々と生存者が暮らすプライベール町。裸山の上に作られたチチコマ村。歴史上最も多くの人が死んだとされるシミレム台地のサルメール男爵領、そして、イタカ山にあったイタカ村」

イーマが、わっちが調べた資料と地図を照らし合わせていく。ライヒビも地盤変化や火山の隆起などによって百年単位で考えると相当地形も変わっているが、それらを考慮に入れて改めて検証してみると、一つの事実が浮かび上がってくる。

「腐死病が蔓延しているのは、標高の高いところにある村や町ばかりだ」

統計学的に考えて、絶対にありえない確率だ。

本当に、どうしてこんな事に今まで気がつかなかったのだろうと思うが、何十枚もの地図を一つ一つ年代記と照らし合わせなければいけない作業は骨だった。

「つまり、ベッタラ……じゃのうて、ええと」

「ベッタラであっている。蒼人参と言うのが一応は正式な名前にな

つていと言っただけだ」

「蒼人參の実る春まで待たなくても、ただ単に標高の低いところに逃げ込めばいいということじゃな」

わっちは得意満面といった顔をする。イーマがエライエライといったわっちの頭を撫でてくれた。ちよつと悔しそうな顔をしているのは、わっちの方が先に腐死病への対抗法を見つけ出したからだろう。わっちは機嫌のいい猫のようにぐいぐいと頭をイーマに押し付けた。

「だか……さて、どうしたものかな」

急に思慮深い顔になるイーマ。その顔は精悍で、わっちは一瞬見とれてしまった。

「何か問題があるのじゃな？」

「ある。国中の人間に腐死病の事を通達して、混乱を一切きたさないようにこの対策について教え、国民が避難するための施設と食料と水を確保し、老人や子供が逃げ遅れて腐死病にかからないようにヘルパーとして城から兵士達を派遣するでしょう。どのくらいの期間が必要だと思う？」

「……一年？」

「そのくらいか、下手をするともつとかかる。腐死病が蔓延するまでに三日。その後で死に至るまでに最長でも一週間。苦しい判断だが、少しでも多くの生命を救うためにはここから遠く離れた片田舎の村は犠牲にするしか……無いだろう。それでも救えるのはせいぜい、三千人」

三千人。

国の人口の十分の一にも遠く及ばない。

彼は、三千人を救ってそれで自己満足できる程強くない。下手に頭がいいせいで、考えてもしょうがないような事にまで想像をめぐらしてしまう。

救えた命よりも、救えなかった命のほうが重い。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

イーマは、ぎりと歯を噛み締めて手に持った地図を握り締めた。

その目は虚空を眺めていたが、思考を放棄しているようではなさそうだ。むしろ、一人でも多くの人間を助けるために全力で打開策を考えているようだ。

「所詮、あなたの思考能力じゃあ人の限界は超えられないという事ね」

声に驚いて振り向くと、書庫の入り口に魔女がいた。

身にまとう白い服は素朴ながらも神々しく輝いていて、堂々と仁王立ちする姿はまるで窮地に現れる英雄のようだった。

「魔女殿、か。ここは王族の人間しか入れないはずだが、どうやって兵士達を言いくるめたのだ？」

イーマが噛み付くように言う。実際、掴み掛かりそうな迫力で魔女を睨みつける。

「宰相閣下の紹介でナコとか言う侍女が出てきてね。あの娘、お城のアイドルか何かなのかしら？ナコが微笑みかけたらこの書庫の門

番たちはみんなイチコロだったけど」

「……………やっぱり、あやつ、魔王が何かじゃろうか」

まさか国家書庫の門番までも侍女に絶対服従を誓っているとは思わなかった。

「さて、話は戻るけど、所詮人間の貴方には人間のできることにしか考えが及ばないようね。例えば、伝説に出てくるエルフの民が出てきて助けてくれるんじゃないかとか、実は今の状況が夢で眼が覚めたら何事も起こっていなかったとか、そういう奇抜な発想は出来ないのかしら？」

明らかな挑発に、イーマがますます視線を鋭く尖らせる。

魔女はチヨイチヨイと不意に現れた手に後ろから脇をつままれる。

「姉さん。絶望的状况にある人にそういう言い方をするから空気読めないと言われるんですよ。ちゃんとした言い方しましょう。『あなた方はなんて無脳なのかしら、目の付け所が全然違いますよ』って」

「あら、その言い方では駄目よ。口調は丁寧だけれどもものすごく毒を含んでいるもの。前半部はどうにかしなければいけないわ」

「……………魔女殿」

イーマが魔女を呼んだ。

「それでは姉さん、こんなのはどうですか？『貴方達はとても有能ですね。そこまで突飛な目のつけ方をなさるなんて』といった感じ

に」

「・・・・・・・・・・魔女殿」

「ロッキンツォン、それでは皮肉になってしまっわ。前半部はよくなったけれど、後半部は悪化してるもの。ここはいつそ、後半部をばっさり省略してはどうかしら」

「・・・・・・・・・・魔女殿っ」

「うーん、そうすると、こうなりますね。『貴方達はなんてすばらしいオツムをしておいでなのかしら』って」

「・・・・・・・・まじよど・・・・・・・・ああ、いや、いい。気の済むまでやってくれ」

力なく俯いたイーマ。

なんだか先ほどまでの精悍さのカケラも感じられなかった。
なぜか魔女とロッキンツォンの後ろにいるイングリットが、ちよいちよいと、魔女をつついた。

「どうしたの？イングリット？」

即座に尋ねる魔女。何故か親しげだった。

「いえ、多分だけれど、師匠とロッキンツォンさん以外状況を理解していないんじゃないかな」

実地的確な忠告だった。何故かイングリットのさらに後ろに立つ私の父がこくこくと同意するように頷く。

「ああ、それならそうといってくればよかったのに」

そうして、イーマのほうに向き直る魔女。

「腐死病は空気感染で蔓延する。それは規模が国レベルになった今でも変わらないわ。だったら蔓延する前にその空気を浄化してしまえばいいだけの話じゃない。腐死病の蔓延を王都だけにとどめることができれば、あなたたちの才能を持ってすれば王都の人達全員を避難させることぐらい朝飯前でしょう」

にやりと笑う魔女。野性味を感じさせる白い八重歯がきらりと光った。

ほんと、魔女の力は上限が無い。

雲に乗って空を飛ぶとか、未来が予知できるとか、ゴスロリの少女ばかり集めてレスハーレムを作っているとか、興奮すると刻の声を上げながら太陽に向かって走り出すとか、すっぽんぽんでも往來を平気で歩けるような変わった男にしか興味が無いとかと言う眉唾物の噂も、実は真実なのではないかと思ってしまう。

「これだけの力が人間のものになったら、どれだけ素晴らしいだろうな」

さすがのイーマもあきれ気味に呟く。

魔女が採った方法。

口で説明するのは簡単で、人間には絶対に不可能な方法だった。

魔女はそもそも風呂場でわっちとイーマに蒼人參を飲ませたときか

らこの方法は思いついていたと言う。

ただ、それでももう王都は救う事ができないから、王都を救うにはとつくに手遅れだという事で投げやりになっていたらしい。例えば国中の人間が生き残っても、王都の数千人が救えないで無力感に絶望するならばいつそのことみんな死んでしまえばいいという、魔女ならではの考え方はわっちには到底理解ができなかったが、いずれにしろみんな助かるのだ。何も言うまい。

どこで何があつたのかは分からないが、魔女は人を救おうとし、イーマとわっちはその方法を提供した。それがここで必要な唯一の真実だろう。

「コスモス、呆れて間抜け面をさらしている時間は無いぞ。都民を非難させるのがまだだからな」

イーマは言う。

雨を降らせる。

ライヒビ全土に、これでもかと言うぐらいじゃんじゃん雨を降らせると言うのが、魔女のとつた方法だった。空気感染する腐死病はその特性ゆえに雨で流れてしまう。既に感染してしまっているであろう王都の人間は別として、そもそも腐死病が蔓延しなければ感染後の対策を取る必要は無い。

その効果は、靨面だった。

森の魔女は、それこそ理屈を越えた力によつて奇跡を起こした。

「私の力というのは、ちょっと違うけれどね」魔女は言う。「これは、森という漠然とした意志の力。私は森に頼み込んだだけに過ぎないわ。本来、人の起こした事の始末は人がつけなければいけないのだけれどね」

「ん？今回の件は、腐死病だから天災じゃろう？」

わっちがそういうと魔女と魔女の妹が即座に「違います」と首を振った。

「腐死病は天災だけれども、腐死病の少女を国の心臓部といえる王都につれてきたのは人間、わざわざ隔離しておいたのに興味本位からその少女に密会した上、腐死病にかかってしまったのも人間、延命措置をとったことによって、国中に腐死病菌を振りまいたのも人間。腐死病は確かに深刻な問題だけれども、自然の摂理にのっとったものであるから放っておいて国が滅びることは無いわ」

わっちも含めてその場にいた数人がしゅんとする。思うところがあるのだろう。

「魔女殿、最後に一つだけ、いいか？」

王子が魔女に向き直って言う。

「魔女殿なら、腐死病そのものを撲滅する事ができるのではないか？天候そのものすらも左右できるあなたなら、腐死病ぐらい、根絶やしに出来るのではないか？」

してはいけない質問だと、彼自身わかつてはいるのだろう。

魔女は決して人間のためにあるのではなく、あくまでも人と自然との間を取り持つ存在なのだから、人の味方ばかりは出来ない。人が自然を侵略するのも、天災によって人が滅びるのも同じように阻止する。人とそれ以外とのボーダーラインを守るための存在なのだから。

「あなたは、愛する人が凶悪な殺人鬼になったとして、その人の殺

人を止めるためにその人を殺せる？」

魔女の問に、父の宰相は私を見て、私は王子と父を見て、王子は私と魔女を見て、魔女の妹はイングリットと己の姉を見て、イングリットは魔女と魔女の妹を見て、魔女は、平等に全員を見た。今見た相手が、きつと彼ら彼女らにとつて愛する人なのだろう。

「殺したりは、できんな……ん、いや、すまない。詮無い事を聞いた。ゆるしてくれ」

「かまわないわ。人間の事を最優先に考えるのは、人として当たり前的事だから」

それは、まるで自分は人間ではないというような言い方。

「魔女は、人じゃないわよ」

心を読んだように魔女はそういった。

けれど、魔女と人も互いに歩み寄れるかもしれない。

いつの日か、人と森との境界がゆるくなったらそういう日が来る。

ただし、それは人間がこの世界で苦勞して勝ち取ってきた特権を全て捨てればの話だ。

わっちはイングリットを見た。

彼女は魔女の弟子になるのだという。

そして、わっちの名を抱くものだ。

人と森との間に存在する魔女の、さらに魔女と人間の間にある存在

それはどちらから見ても架け橋となる、希望なのかもしれない。

第十一幕。再び、コスモス（後書き）

あと三時間後にエピソードを掲載します。

閉幕。魔女の弟子

「いい？上から順番に粉紫蘇、ニミヤラワの根、春椎茸、黒花、真珠草、犬酔わし、鬼喰らい、踊り茸、海花、海野菜、フユノシラセ、ボウボウ草の汁、南唐辛子、根無し大根。これがキノコに当たったときの薬の材料よ」

「…………おねえちゃん、空気読もうよ」

師匠がそういつて、家族にだけ向ける砕けた口調のロッキンツォンさんが的確な突込みをした。
ちなみにあたしは、キノコに当たってベッドの上で苦しみもだえている。

あたしを弟子にしたのはいいが、何かにつけて薬の作り方を教えたがるのは師匠の悪い癖だ。そりゃあたしだって魔女になるためにはいろいろな薬の作り方を覚えなければいけないけれど、腹を抱えてベッドの上をごろごろするあたしを見るなり、嬉々としてわけのわからない薬草を沢山持つてきて講義しだすのは止めてほしい。こっちは死ぬほど苦しい思いをしているのだ。薬を飲ませてくれてから作り方を説明してくれてもいいのではないだろうか。

あたしは涙目で師匠とロッキンツォンさんを見る。

渋々薬を調合し始めた師匠と、それを監視するロッキンツォンさん。
あ、なんか本当に楽しそう。

いいなあ……………

薬を飲み終わったらなんか即座に元気になってしまったので、ベッドから飛び出そうとしたらロッキンツォンさんにチヨイと首筋をつかまれてベッドに連れ戻された。

「絶対安静」

「じゃあ森の散策をしながらリハビリする」

「却下。そもそも食中^{しよくあた}りのリハビリなど聞いたことないわよ」

「でも、家の中より森のほうが落ち着くし」

「一眠りすれば起きてもいいから、暫くはおとなしくして頂戴」

そう

魔女の弟子になってから、森の空気が変わったように感じられる。

なんだか、森が近い存在に感じられるようになったと言うか、森に親近感を感じるようになったと言うか、とにかく、森に受け入れられているような感じがするのだ。

これが、森の『愛情』と言う奴なのだろうとあたしは漠然と理解している。

それはとても気持ちよくて、暖かくて、あたしも森に対して何かポカポカとした感情を抱くようになってきた。

でも、その感情に全身をゆだねちゃおうとすると何故かコスモスや王子様の顔が頭に浮かんできて

なぜか、あたしはそれがとても名残惜しく感じるのだった。

それがどういふことなのかは、なんとなく分かる。でもはつきり口にしようとすると霧のようにすぐ霧散してしまつて、掴みどころが無い。

あたしはあたしが逃げ出さないように監視しているロッキンツォンさんをちらりと見て、ベッドの中で軽い溜息をついた。

ふと、窓の方を見る。

窓脇に置かれた植木鉢と、その中身。

オレンジ色の細い根を懸命に伸ばし、青い小さな実を一粒、ぶら下

げている植物。

決して群生する事の無い、けれどもとても貴重な実。

本来は全く人参とは違う植物なのだが、橙色の根をしているという事から、蒼人参とよばれる植物。

この小さな実は、きっと誰かの命をつなぐ。

蒼くてちいさな、命のカケラ

閉幕。魔女の弟子（後書き）

さて、これにて「ちいさなカケラ」は終わりを迎えました。

「どうせ昔書いた作品なんだから、全章一括掲載でよくないか？」
とも思ったのですが……

やってみたかったんですよ。

連！載！

それはともかく、ほぼ一か月近く、お付き合いいただきありがとうございます。
ございました。

今後の予定ですが、これからひと月ほど間をおいて、短編を一つか
二つ、投稿しようかと思っています。
では、その時にまた。

2011年7月27日

夏詠水面

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5742u/>

ちいさなカケラ

2011年7月27日17時45分発行